

東入部遺跡群1

— 東入部遺跡群第4次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第381集

1994

福岡市教育委員会

「東入部遺跡群1」正誤表 (福岡市報581集)

頁	行	誤	正
例言	7	山口 亭	山口 亭
1	22	山口 亭	山口 亭
14	6	SK006 (第15図) SK009と共に	SK005 (第15図) SK006と共に
15	4	SK006 (第15図) SK005と同様	SK006 (第15図) SK005と同様
22	2	26は浅く	20は浅く
22	6	14~22は	堀方14~22は
32	8	SP1505, 1574, 233, 1545	SP1505, 1574, 1545
32	9	その北にはSP1507, 236	その北ではSP2125
32	10	1565	1555
32	11	1565	1555
35	4	SB068	SB067
35	18	SB070	SB069
37	1	灰茶褐色土	灰褐色土
39	1	胎土で	胎土は
39	2	179~182	179~181
41	1	須恵器	須恵器
46	12	SB069	SB068
60	4	碧玉製	碧玉製
60	4	344	345
60	5	342	346
62	25	373	400
62	27	400は	400に
78	1	砂石	砂岩
図版5	(2)	SX001, 018	(2) SX010, 018
図版10	(1)	SB069	(1) SB068
図版12	(5)		(5) 1505, 1540
図版13	(4)	SB-30?	(4) SB30-22
図版14	(6)	41-?	(6) 41-1

※76頁14行以下に次の文がぬけている。

すものがある。626、628は外面褐色を呈し、他は暗褐色である。

632は胎土である。内面にはナデ調整がみられ、外面は小さな凹凸が多い。胎成前の穿孔がある。633はかまごとの跡かとと思われる。

634は羽口で最大径8cm、内径2.7cmを測る。先端方向は灰色を呈す。635~638は不明土製品である。635はスヤの痕跡と丸い指環状のくぼみで凹凸が著しい。黄白色を呈し砂粒をほとんど含まない精良な胎土である。図示した裏の面は平滑で3mm大の砂粒が付着する。他は淡茶色

※第19図に示した堀方の番号が表1に使用しているものと一致していないのでその対象を示す。

SB30-16	1-1532	18-1216	20-1522
	17-1581	19-1109	22-1539

※表1 (32頁)

除去 左列8行目 | 1539 | 35×30 | 35.56 | 35.5

追加

1545	72×65	35.19	34.82	2345	69×56	34.32	34.37
1574	60×50	35.19	35.0	2390	104×85+α	34.79	34.87
1585	85×70	35.08	34.79	2391	73×62	34.7	34.2
1588	85×109	34.63	34.03				

誤 正

※第7図 SC054の標高 37.4m 34.7m

第17図 SK042の標高 36.1m 35.1m

SK059の標高 35.9m 34.9m

第24図 SB070の標高 37.0m 35.2m

第28図 SB041の標高 35.2m 35.3m

第35図 SK009の標高 34.9m 35.2m

第56図 SK079の標高 35.9m 35.1m

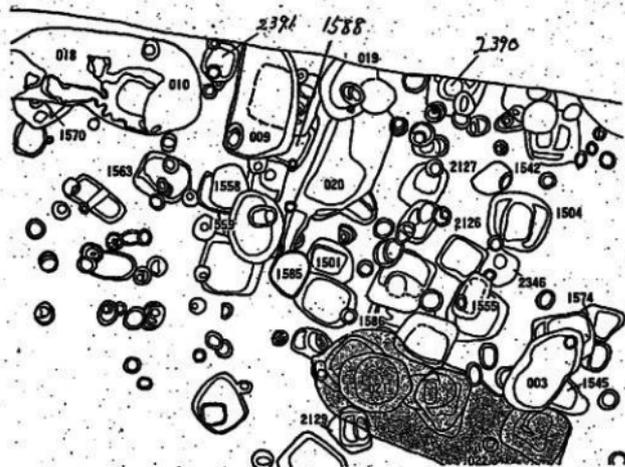
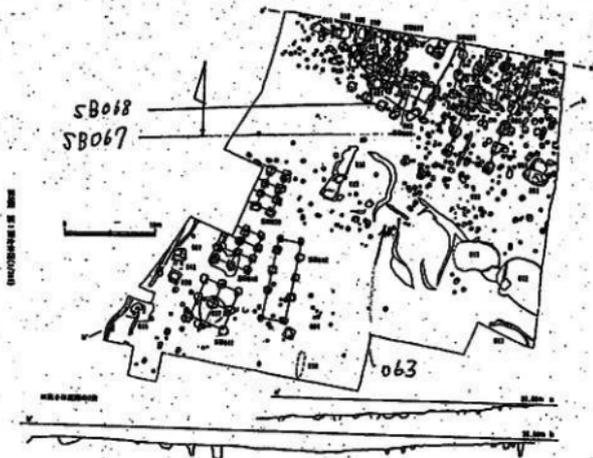
※第31図SB041の堀方の土層図で1のみ標高35.1m

※第75図 632の下と、第76図のスケールを以下に変更

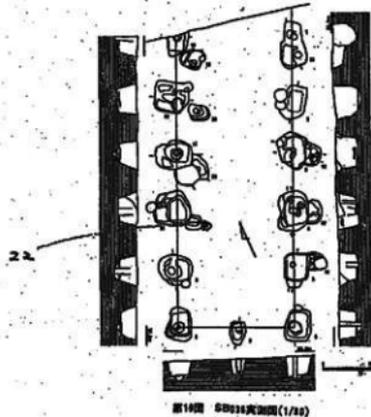


26
28
2/1
SK 341
577

22/
SK 05/
557



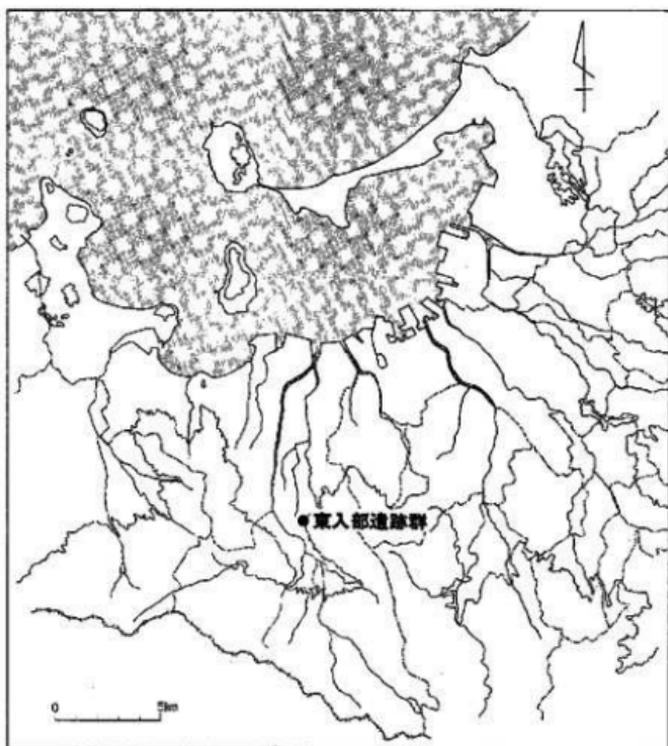
付図1 縮尺は1/100 目次を変更、付図に追加



東入部遺跡群 1

— 東入部遺跡群第4次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第381集



遺跡調査番号 4208

遺跡略号 HGI-4

1994

福岡市教育委員会

序

福岡県の北西部、玄界灘に面して位置する福岡市には、豊かな自然と歴史的遺産が残されてきました。それらを保護し後世に伝えていく事は、言うまでもなく私共の務めであります。しかし、近年の福岡市のいちじるしい都市化により、それらが失われつつある事も事実です。

福岡市教育委員会では、これらの開発にともないやむを得ず失われていく遺跡について、事前に発掘調査を行い、記録保存に努めております。

本書は、平成4年度に実施した入部出張所駐車場拡張および入部公民館建設にともない調査した東入部遺跡4次調査の記録を報告するものです。調査では、縄文時代から中世にいたる数多くの遺構と遺物を発見しました。この結果、この地区の歴史および他地域との交流についての問題も明らかになりつつあります。

本書が埋蔵文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまで、多くのかたがたのご理解とご協力を賜りましたことに対し、心から謝意を表する次第であります。

平成6年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花 剛

例 言

1. 本書は入部公民館建設、入部出張所駐車場拡張にともない、福岡市教育委員会が1992年5月から7月にかけて発掘調査を実施した東入部遺跡4次調査の報告書である。
1. 遺構の表記は、SC-堅穴住居跡、SK-土坑、SP-ピット、SX-その他の遺構とした。
1. 本書使用の方位は磁北である。
1. 本書使用の遺構実測図は、黒田和生、英豪之、榎本義嗣、池田祐司が中心に作成し作業員の方々の協力を得た。
1. 本書使用の遺物実測図は、山口 享、坂本憲昭、石橋忠治、池田による。
1. 本書使用の補図の製図は、安野 良、副田則子、伊藤美紀、山口、池田による。
1. 本書使用の写真は、遺構を池田が、遺物を平川敬治が撮影した。空中写真は衛空中写真企画による。
1. 本書の作成にあたっては先に挙名した他、上田保子、前田みゆき、井上真由美の協力を得た。
1. 本書の執筆は、II、III2.8)とIVの一部を山口が、他を池田が行なった。また大澤正己先生から鉄滓の調査報告をいただき、付論として掲載することができた。出土鉄滓については穴澤義功氏より御教示を得た。後日、製鉄関連遺構については追加報告する予定である。
1. 本書の編集は山口の協力を得て池田が行った。

本文目次

I	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II	立地と環境	2
III	発掘調査の記録	4
1.	調査の概要	4
2.	遺構と遺物	9
1)	竪穴住居	9
2)	弥生土器集中分布	10
3)	製鉄関連遺構	14
4)	掘立柱建物	18
5)	土坑	34
6)	ピット出土の遺物	56
7)	トレンチ出土の遺物	60
8)	包含層出土遺物	62
IV	おわりに	80
付論	東入部遺跡4次調査 製鉄関連遺構出土品の金属学的調査 大澤 正己	83

挿図目次

第1図	早良平野の遺跡 (1/75000)	1
第2図	周辺の遺跡群 (1/8000)	3
第3図	調査区位置図 (1/1000)	4
第4図	土層略図	5
第5図	第1面全体図 (1/300)	6
第6図	第2面全体図 (1/300)	7
第7図	SC053、054実測図 (1/40)	8
第8図	SC053、054出土遺物実測図 (1/3)	9
第9図	SX029実測図 (1/30)	10
第10図	SX029出土遺物実測図 (1/3)	11
第11図	SX038出土遺物実測図 (1/3)	12
第12図	SX064実測図 (1/40)	12

第13図	SX064出土遺物実測図 (1/6、1/3)	13
第14図	SK010、018、024実測図 (1/40)	14
第15図	SK005、006、035、057実測図 (1/40)	15
第16図	SK010、018、024出土遺物実測図 (1/3)	16
第17図	SK042、059実測図 (1/30)	17
第18図	SB031実測図 (1/80)	18
第19図	SB030実測図 (1/80)	19
第20図	SB030柱掘方土層実測図 (1/40)	20
第21図	SB030、031柱掘方土層実測図 (1/40)	21
第22図	SB030、031出土遺物実測図 (1/3)	22
第23図	SB067実測図 (1/80)	23
第24図	SB068、070実測図 (1/80)	24
第25図	SB067、068、070柱掘方土層実測図 (1/40)	25
第26図	SB067、068、出土遺物実測図 (1/3)	26
第27図	SB039、040実測図 (1/80)	27
第28図	SB041実測図 (1/80)	28
第29図	SB042実測図 (1/80)	29
第30図	SB039、040、042柱掘方土層実測図 (1/40)	30
第31図	SB041柱掘方土層実測図 (1/40)	31
第32図	SB039、040、041、042出土遺物実測図 (1/3)	31
第33図	大型ビット土層実測図 (1/40)	32
第34図	大型ビット出土遺物実測図 (1/3)	33
第35図	SK002、003、009、011実測図 (1/40)	34
第36図	SK002、003、009、011出土遺物実測図 (1/3)	36
第37図	SK012実測図 (1/60)	37
第38図	SK012出土遺物実測図1 (1/3)	38
第39図	SK012出土遺物実測図2 (1/3)	39
第40図	SK012出土遺物実測図3 (1/2)	40
第41図	SK013実測図 (1/60)	41
第42図	SK013出土遺物実測図 (1/3、1/2)	42
第43図	SK014出土遺物実測図 (1/3)	43
第44図	SK017実測図 (1/60)	44
第45図	SK017出土遺物実測図1 (1/3)	45
第46図	SK017出土遺物実測図2 (1/3)	46
第47図	SK019、021、023、037実測図 (1/40)	47

第48図	SK019、021、023、037出土遺物実測図 (1/3)	48
第49図	SK051、052実測図 (1/40)	49
第50図	SK051、052出土遺物実測図 (1/3)	50
第51図	SK055、056、060、062実測図 (1/40)	51
第52図	SK055、056、076出土遺物実測図 (1/3)	52
第53図	SK063実測図 (1/30)	53
第54図	SK063出土遺物実測図 (1/3)	53
第55図	SK071、074、076、077実測図 (1/40)	54
第56図	SK078、079実測図 (1/40)	55
第57図	ビット出土遺物実測図1 (1/3)	57
第58図	ビット出土遺物実測図2 (1/3)	58
第59図	ビット出土遺物実測図3 (1/3)	59
第60図	ビット出土遺物実測図4 (1/3、1/2、1/1)	60
第61図	トレンチ出土遺物実測図 (1/3)	61
第62図	包含層出土遺物実測図1 (1/3)	63
第63図	包含層出土遺物実測図2 (1/3)	64
第64図	包含層出土遺物実測図3 (1/3)	65
第65図	包含層出土遺物実測図4 (1/3)	66
第66図	包含層出土遺物実測図5 (1/3)	67
第67図	包含層出土遺物実測図6 (1/3)	68
第68図	包含層出土遺物実測図7 (1/3)	69
第69図	包含層出土遺物実測図8 (1/3)	71
第70図	包含層出土遺物実測図9 (1/3)	72
第71図	包含層出土遺物実測図10 (1/3)	73
第72図	包含層出土遺物実測図11 (1/3)	74
第73図	包含層出土遺物実測図12 (1/3)	75
第74図	包含層出土遺物実測図13 (1/3)	76
第75図	包含層出土遺物実測図14 (1/3、1/2)	77
第76図	包含層出土遺物実測図15 (1/3)	78
第77図	包含層出土遺物実測図16 (2/3)	79
付図	第1面全体図(1/150)	
付図	第2面全体図(1/150)	

表目次

表1 大型ビット計測表

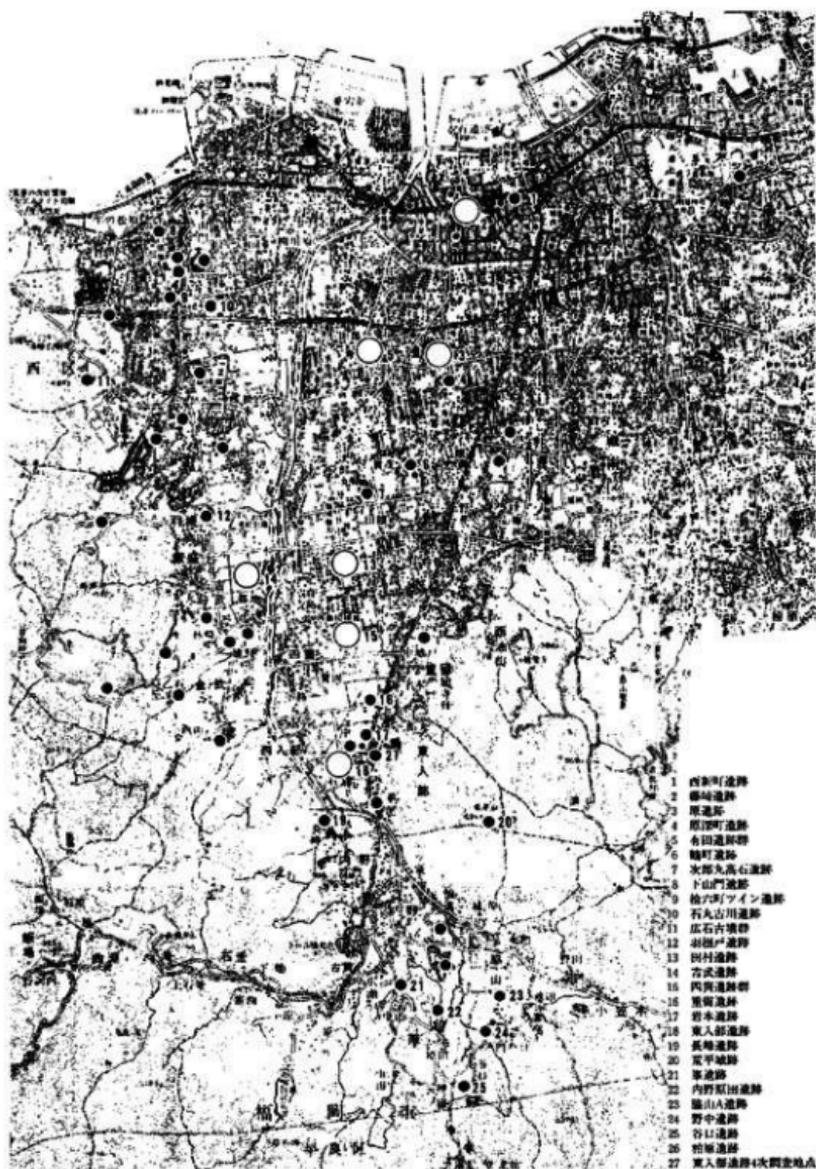
図版目次

図版目次

- 図版1 (1)第一面全景 (2)第1面(西から)
- 図版2 第2面全景(北西から)
- 図版3 (1)SC053(西から) (2)SC054(東から)
- 図版4 (1)SX029(北から) (2)SX064(西から)
- 図版5 (1)SX005(南から) (2)SX001、018(南から)
(3)SX024(西から) (2)SX024(南から)
- 図版6 (1)SX035(西から) (2)SX042(東から)
(3)SX059(南から) (4)SX059(南から)
- 図版7 (1)北東側建物群(南から) (2)南西側建物群(南から)
- 図版8 (1)SB030(北から) (2)SB030、031(西から)
- 図版9 (1)SB042(南から) (2)SB031(北から)
- 図版10 (1)SB069(北から) (2)SB039(東から)
- 図版11 (1)SB031(北から) (2)SB067、068周辺(北から)
- 図版12 (1)SB030-4 (2)SBO030-7 (3)SB030-5
(4)SBO030-6 (6)SP
- 図版13 (1)SB030-4 (2)SB030-7 (3)SB030-13
(4)SB030- (5)SB031-4 (6)SB067-9
(7)SB068-3 (8)SB068-9
- 図版14 (1)SB039-7 (2)SB039-8 (3)SB040-4
(4)SB040-6 (5)SB041-4 (6)SB041-
(7)SP1501 (8)SP1559
- 図版15 (1)SK002(西から) (2)SK076(南から)
- 図版16 (1)SK012(西から) (2)調査区南西隅ビット群(南から)
- 図版17 (1)SK003(東から) (2)SK011(北東から)
(3)SK012(南西から) (4)SK019(東から)
- 図版18 (1)SK021(南から) (2)SK020(南東から)
(3)SK026(南東から) (4)SK051、052(南から)
- 図版19 (1)SK056(東から) (2)SK063(西から)
(3)SK055(西から) (2)SK060(東から)
- 図版20 (1)SK062(南から) (2)SK074(南から)

(3)SK079(北から) (2)SK078(東から)

- 図版21 出土遺物1 SC054、SX029、064、010、024、SB030、
031、SB068、大型ビット
- 図版22 出土遺物2 SK002、003、009、011、012
- 図版23 出土遺物3 SK012、013
- 図版24 出土遺物4 SK014、017、019、021、022、023、051、
056、076、063
- 図版25 出土遺物5 ビット、トレンチ
- 図版26 出土遺物6 包含層
- 図版27 出土遺物7 包含層
- 図版28 出土遺物8 包含層
- 図版29 出土遺物9 包含層
- 図版30 出土遺物10 包含層



第1図 奈良平野の遺跡(1/75000)

I はじめに

1 調査に至る経過

福岡市早良区大字東入部一帯に広がる東入部遺跡群は、1978年の福岡市教育委員会による遺跡分布調査により発見され、周知される事となった。1986年から始まったこの地域の県営園場整備事業にともなう埋蔵文化財の試掘、発掘調査により、この遺跡が縄文時代から中世に及ぶ各時代の遺構が遺存していることも判明した。

平成3年11月21日に、東入部遺跡地内、福岡市土地開発公社(以下「甲」とする)より早良区役所入部出張所駐車場拡張事業及び入部公民館建設事業にともなう埋蔵文化財事前審査願いが提出された。これを受けた福岡市教育委員会埋蔵文化財課(以下「乙」とする)では同年11月17日に試掘調査を実施した。試掘調査は申請地に3ヵ所のトレンチを設けて行い、申請地の全域に遺構と遺物の包蔵を認めた。この結果を受けて甲、乙両者は協議を重ね、建設にともない遺跡の保存は困難と判断し、発掘調査を実施することとなった。

2 調査の組織

調査委託: 福岡市土地開発公社

早良区役所入部出張所駐車場拡張事業主体 市民局 区政課

入部公民館建設事業主体 教育区委員会 社会教育課

調査主体: 福岡市教育委員会 教育長 井口雄哉(前任) 尾花 剛

調査総括: 埋蔵文化財課長 折尾 学 同第1係長 飛高憲雄(前任) 横山邦嗣

調査庶務: 埋蔵文化財課第1課係 寺崎幸男

事前審査: 主任文化財主事 井澤洋 - 文化財主事 吉武 学

調査担当: 埋蔵文化財第1係 池田祐司

整理補助: 山口 享 (福岡大学)

調査作業: 岩見敏子、大鶴タカ、岡部喜久美、緒方シマヨ、金子啓佑、金子ヨシ子、川嶋ツキエ、菊池栄子、正崎由須子、清水邦子、鶴田喜美枝、林 嘉子、平川土枝、平川富美子、平川伸子、平川史子、平野ミサオ、細川友喜、森山宣子、山尾タマエ、山口タツエ、山田ヤス子、結城多美子、吉岡勝野

整理作業: 上田保子、前田みゆき、緒方まきよ

II 立地と環境

入部の地は早良平野でも、西側を西山東麓の、東の荒平山麓麓の迫り出しによって細く狭められた所であり、その西寄りを室見川が、東側を金屑川が流れる。平野内にはいくつかの洪積台地も点存するが、その大部分は室見川を中心とした河川の沖積作用によって形成されている。

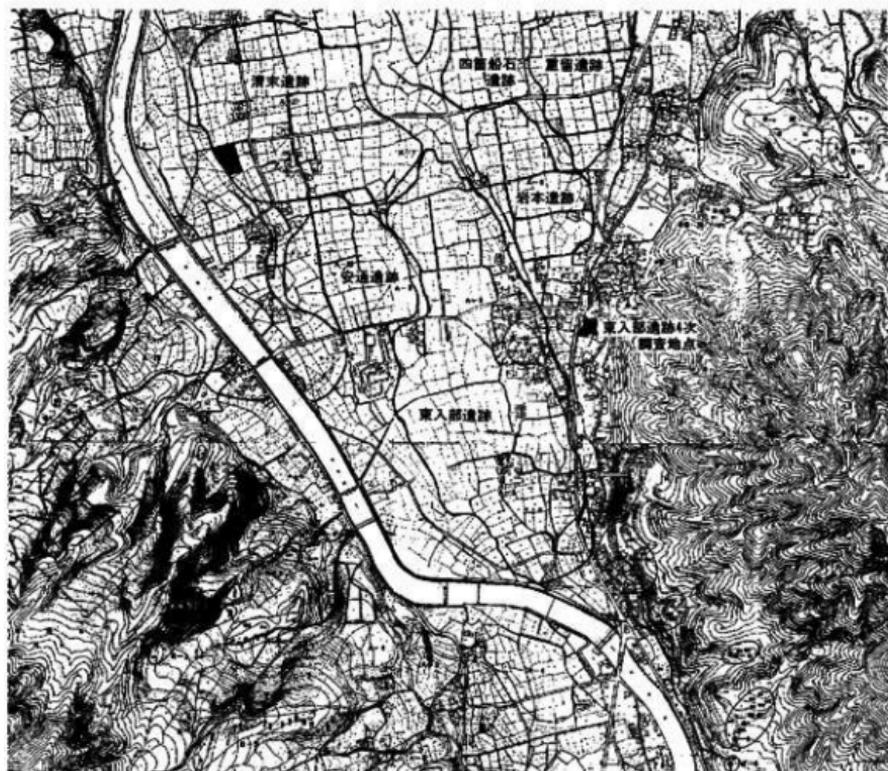
東入部地区では、縄文時代の遺物は、岩本遺跡群^①からは磨削縄文土器や偏平打製石斧・石鏃などがみられる。重留遺跡第2次調査^②では住居跡5棟、貯蔵穴1基が確認されており、墓地に関しては東入部遺跡第2次調査^③においては甕棺墓16基と土坑墓1基が確認されている。

弥生時代にはいと、石廬丁・太形蛤刃石斧といった大陸系磨製石器などと共に岩本遺跡からは中期の水田遺跡も確認されており、また重留遺跡群第2次調査^④では、住居跡も前期の松葉型のものから終末期の布留式土器併行期のものでみられ、遺跡群全体で見ると連続して住居跡が形成されている。東入部遺跡第2次調査^⑤では前期後半から後期初頭にかけての甕棺墓130基、土坑・木棺墓30基が調査されており、なかでも957号木棺墓・84号甕棺墓からそれぞれ細形銅剣1本ずつ出土しており、そのほかにも銅鋼・鉄施・鉄刀など多数の金属器も出土している。早良平野のなかでも、入部地域は一つのまとまりをもった集団を形成していた可能性が考えられる。

古墳時代では、拝塚古墳^⑥は全長約75mを測る前方後円墳であり、この地域の首長墳と思われる。また、重留遺跡群第2・3次調査^⑦では、二又鎌やえぶりといった木製品の出土も見られ、東入部遺跡第2次調査^⑧においては滑石製の玉作り工房が発見されている。重留遺跡群で確認された須恵器窯跡は小川編年Ⅱ期の基準資料として重要である。

古代では、「和名類聚抄」^⑨筑前国早良郡条をみると、毗伊・能解・額田・早良・平群・田部・曾我の七郷の記載がある。「大日本地名辞書」^⑩において古田東伍は、「今入部村と曰ふ、田隈村の南なれば、和名抄能解郷の属域にやあらん」と推定している一方、「早良郡誌」^⑪では、能解郷を西脇・梅林・免田・次郎丸・重留・干隈・野芥にまたがる地域とし、入部は郷に含まれていないと考えているようである。考古学的には、率遺跡^⑫では掘立柱建築が確認されており、製鉄関連遺構が安通遺跡^⑬で発見されている。掘立柱建築については、一般的な倉庫であるのか、官衙に付随するものなのかは不明であるが、前述の如くこの地域には郡衙はなく、「延喜式」^⑭をみても公的な施設は見られない。官衙とするならば、里(もしくは郷)となるかそれに付随する施設、あるいはまた早良平野から三瀬峠へ抜ける道の要衝にあり、地形的にも天然の関所を形成しているため、そのような意味をもった建物が造られた可能性も考えられよう。製鉄関連遺構は、周辺からは同時期の関連遺構が確認されており、集中的に鉄生産が行われたと考えられ、金屑川の上流地域であることを考え合わせると興味深い。

- (1) 福岡市教育委員会 1993年 「入部Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集
- (2) 福岡市教育委員会 1991年 「入部Ⅱ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集
- (3) 福岡市教育委員会によって1992年に調査、未報告。
- (4) 福岡市教育委員会 1990年 「入部Ⅰ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第235集
- (5) 池邊彌 1981年 和名類聚抄郡郷里驛名考證 吉川弘文館
- (6) 吉田東伍 1901年 大日本地名辞書 富山房
- (7) 福岡県早良郡役所編 1973年 「早良郡誌」
- (8) 福岡市教育委員会 1989年 「峯遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第197集
- (9) 1967年 増補改訂国史大系「延喜式」 吉川弘文館



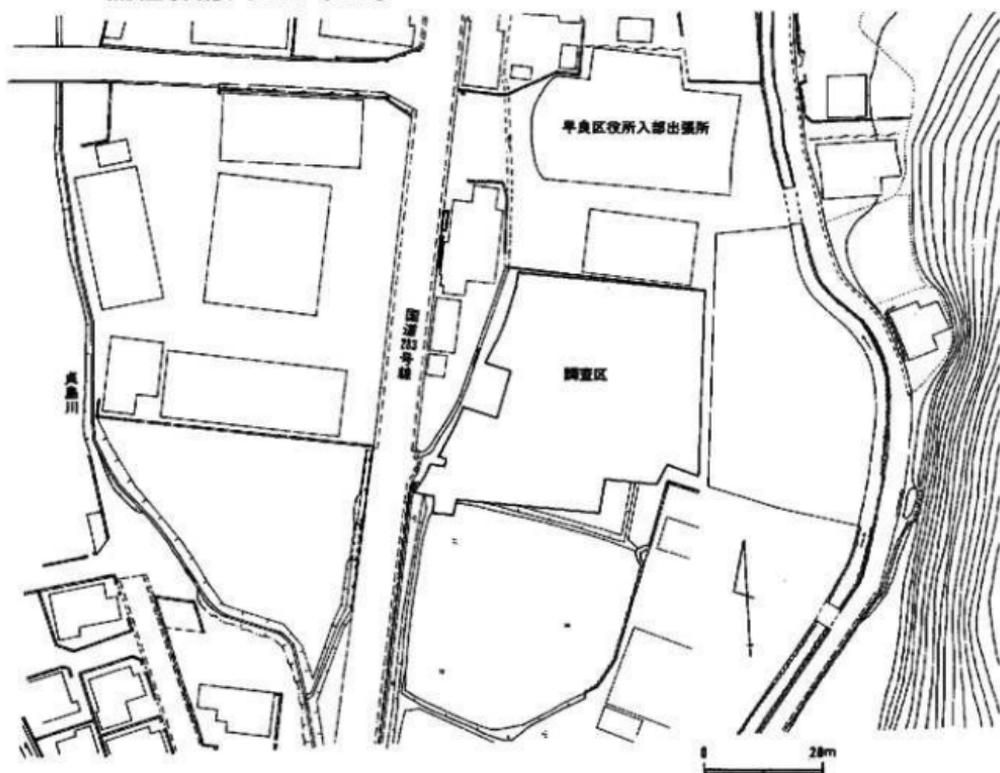
第2図 周辺の遺跡群(1/8000)

III 発掘調査の記録

1 調査の概要

調査対象地は国道283号線に添っており、調査前は水田として利用されている。国道より0.9mほど高い土地であった。標高は36.3mである。東側の東入部中公園は0.8m高く、南側の田地も高くなっており、小さな谷状の地形である。東側は荒平山の斜面へつながら山裾には旧街道、用水路が走る。西側には国道沿いを走る用水路が流れ、貞鳥川へ傾斜していく。

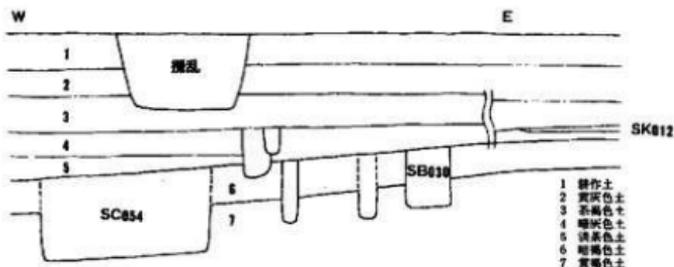
工事対象面積は1,318㎡であった。事前に試掘調査を行い、3本のトレンチを入れた結果、包含層と考えられる黒褐色土の上下で遺構が検出された。このことから対象地の全域に付いて発掘調査を実施することになった。



第3図 調査区位置図(1/1000)

調査は排土置場を確保するために北側2/3から行い、反転して調査を進めた。まず最上部の水田耕土、床土、茶褐色土、暗灰色土を重機により除去、搬出し、6層暗褐色土上面で遺構検出を行った。ただし南東では6層の上に乗る灰褐色土上でSK011、012、013を検出した。また調査区北側中央では6層上の暗灰色上でSK002を検出しこれらの遺構の調査後さらに6層まで下げ、これまでを1面として全体図に示している。6層は西側に向かってレベルが次第に下がり薄くなる。そしてSK023付近で途切れ、SB039付近でやや上がり薄く広がる。西側も薄く、途切れる。SB039、SB040等の遺構は6層上面で検出したものの、6層がごく薄く、時間的制約から第2面の遺構と共に調査し、全体区で合成した。第1面では大型の建物群を主体に古代を中心とした遺構と遺物を検出した。この面の遺構の覆土は褐色系のもが多く、検出困難であった。第2面は第6層下の黄褐色土の上面で検出した。調査区の南東隅から北西隅へ浅い河川が流れ、全体の勾配もこれに向かって落ちている。この落ちは一部6層にのっており第1面において検出できたものと考えられる。またこの落ちの堆積は古代の遺物の包含層となっておりトレンチを7本入れた後重機で掘り下げた。遺構はこの河川を挟んで多くのピット群と弥生時代の竪穴住居、土坑を検出した。この中には上面からの掘り残しもあり、古代の遺物を出土したものは全体図の第1面に合成した。弥生時代の遺構も第1面においてSK029のような遺物の散布を検出している。竪穴住居の掘込み面も第6層か7層か判断付け難い。当初6層を古代の遺物包含層と考えていたが、遺構以外で出土する遺物は弥生、縄文であり、これらも遺構を見落としている可能性がある。

層位を調査区北壁で観察すると、耕作土下に黄灰色土、暗褐色土が堆積しその下が第1面とした6層である。西側や河川部には、さらにこの上に淡茶色土、暗灰色土、灰色砂層が堆積する。東壁では6層の上は灰茶褐色土でこれにSK011等がある。北側との関連は不明である。6層の下はやや砂質の黄褐色土で、河川で低い部分、南東側では青灰色砂質土が広がる。



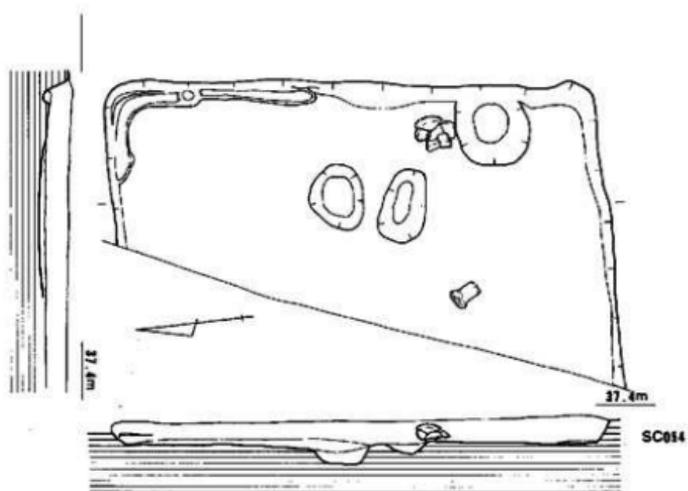
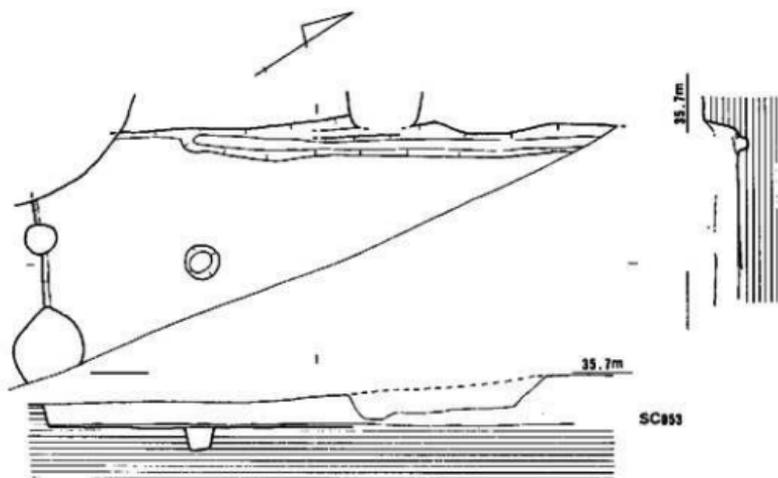
第4図 土層略図



第5図 第1面全体図(1/300)



第6図 第2面全体図(1/300)



第7图 SC853、854实测图(1/40)

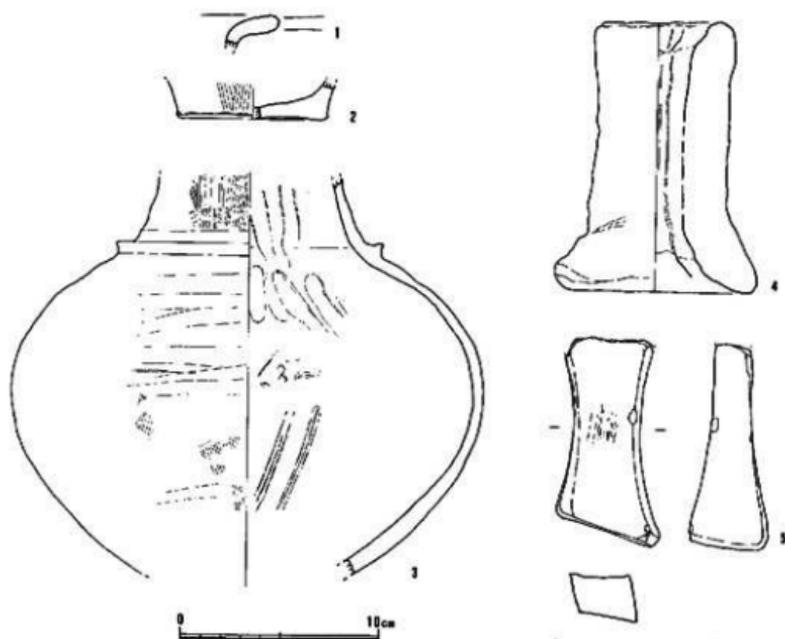
2 遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第2面で検出した。いずれも茶褐色土を覆土とし、先述したように1面目からの掘り込みの可能性がある。土層観察においても上面との関係はわからなかった。

SC053(第7、8図) 調査区の東側にかかる。方形になるものと思われるが、大部分が調査区外になり、規模も不明である。深さ約30cmが残存する。西壁に沿って測溝が掘られる。小ピットを1つ検出した。1、2が出土した。1はL字型口縁の甕、2は甕の底部で外面に刷毛目調整を施す。この他黒曜石製鏃が出土している。

SC054(第7、8図) 方形プランを呈し、深さ20cmが残存する。南北長3.35mを測る。北東隅に沿って測溝が掘られる。ピットが2つあるが、浅く、掘り方もはっきりしない。3~5が出土した。3は甕で外面に赤色顔料を塗る。外面は刷毛目調整の後に横方向のナデ調整を施す。内面には指圧痕、絞り痕が見られる。4は支脚で淡黄褐色を呈し、3mm大までの砂粒を多く含む。5は砥石で一部欠損している他は全面を使用している。



第8図 SC053、054出土遺物実測図(1/3)

(2) 弥生土器集中分布

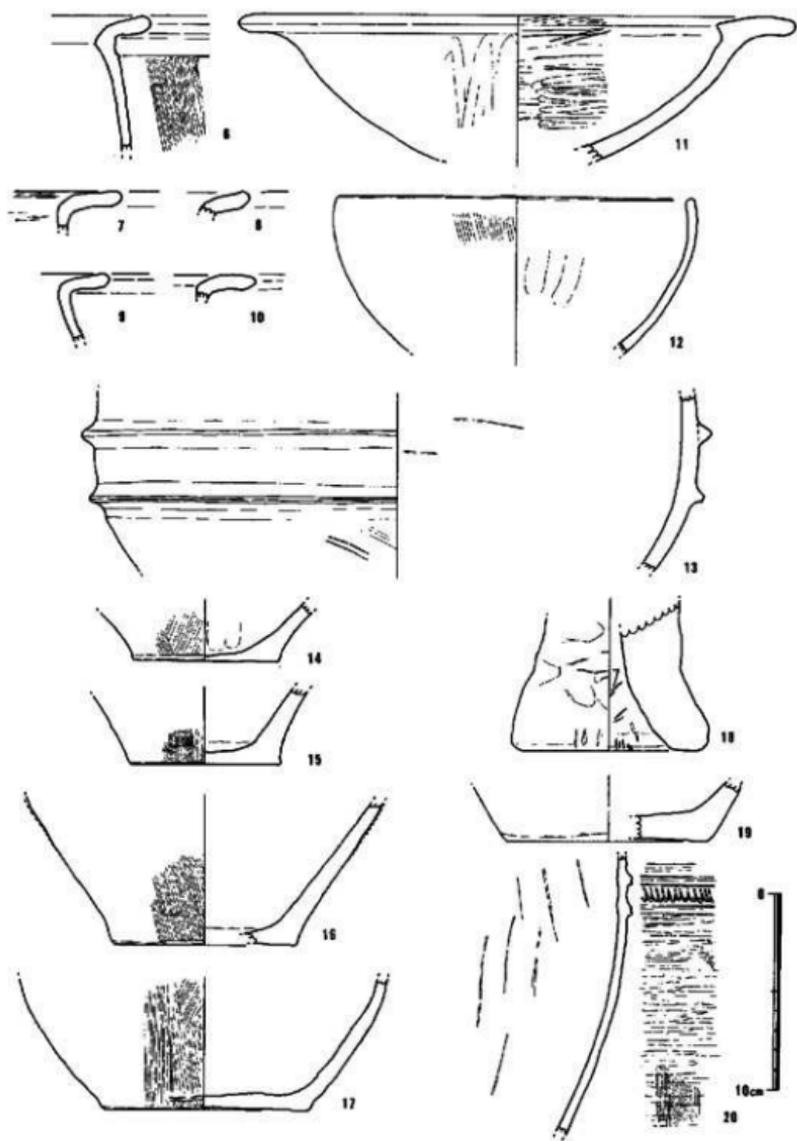
第1面の遺構検出を行っている際に各地点で弥生土器が出土していた。その中でまとまって出土したものを示す。これらは何らかの遺構を検出できなかった可能性がある。

SX029(第9、10図) 調査区の中央東よりに約6m×4mの範囲に散らばる。レベルはほぼ同じで、遺物は弥生時代中期中ごろまでまとまっており遺構の床を示す可能性もある。6~10は甕の口縁部で、鋤形口縁、L字形口縁を呈す。11は鋤形口縁の高坏で内外面に丹塗り摩研を施す。研摩調整は外面は縦方向に粗く、内面は横方向に丁寧に仕上げる。12は鉢で、口縁部がやや内傾する。13、20は壺の胴部である。13は捺痕が残るがナデ調整、20の外面は縦方向の研摩調整のあとに横方向の研摩を施す。突帯間には上下に往復する暗文が施される。18は支脚で淡黄茶色を呈し、2mm大の砂粒を多く含む。やや不整形であるため復元した径は不確かである。14~16は甕の、17、19は壺の底部になると思われる。

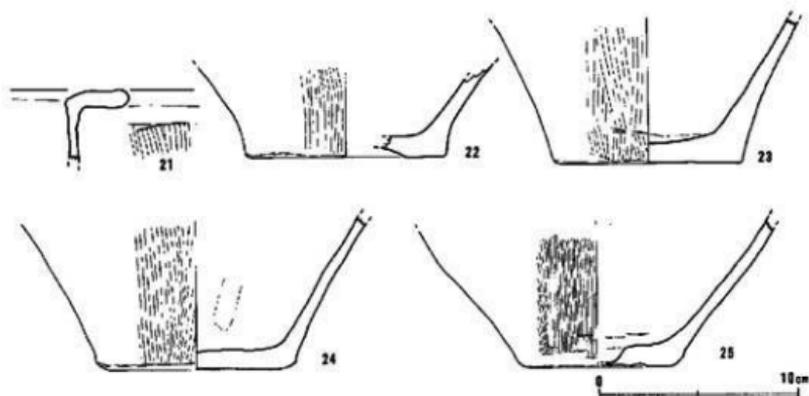
SX038(第11図) 調査区南側にまとまって弥生土器が出土した。位置のみ全体図に示す。21は甕の口縁、22~24は甕の、25は壺の底部である。この他にも甕等の胴部片が出土している。



第9図 SX029実測図(1/30)

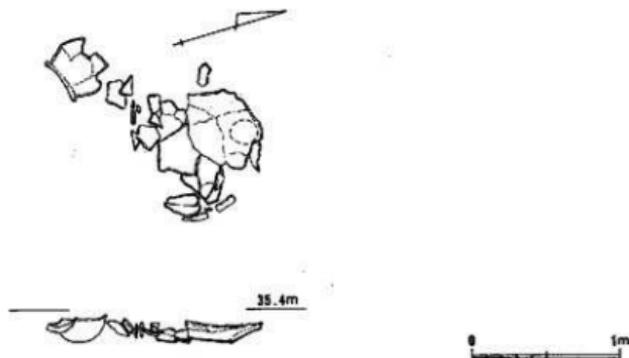


第10图 SX020出土物实测图(1/3)

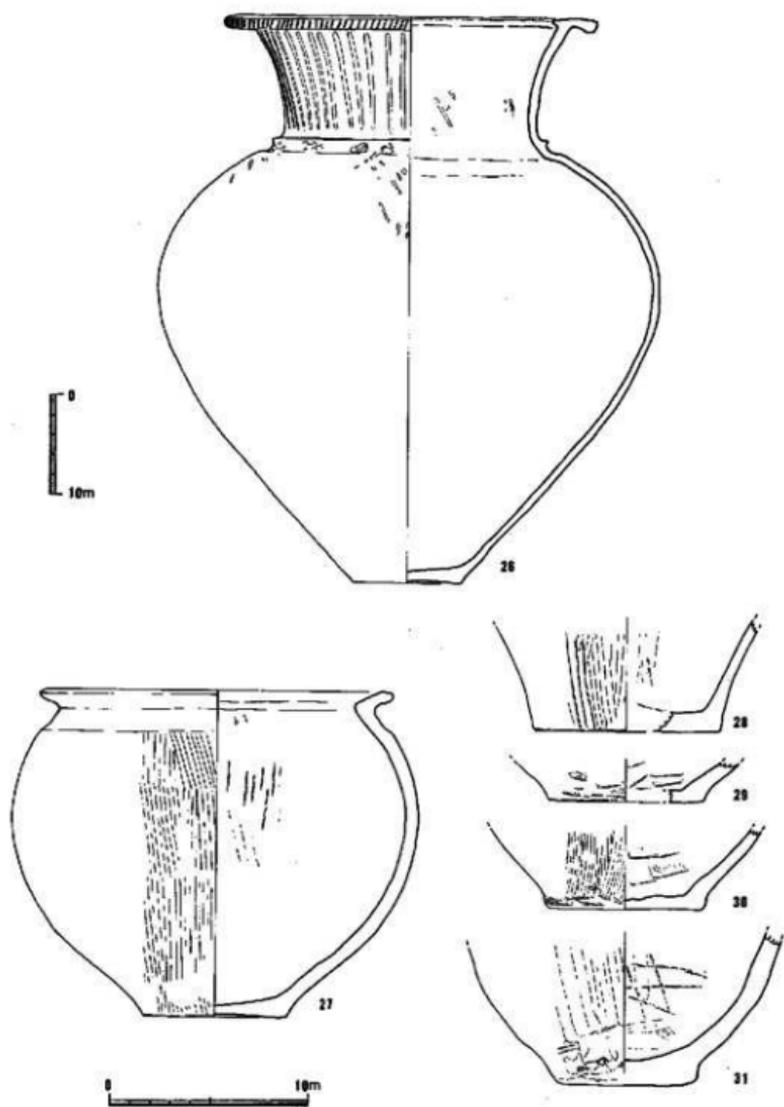


第11図 SX038出土遺物実測図(1/3)

SX064(第12、13図) 26を主体とする土器がまとめて出土した。26、27は横たわった状態で出土し、原位置に近いものと思われる。26は大型の壺で鋤形の口縁部を持ち胴部最大径が上部にある。頸部外面に赤色顔料を塗り、縦方向に暗文を施す。口唇部には細い刻み目を施し、肩部には顔料が散る。外面は板状工具による擦痕調整がみられる。1/2弱が残存する。27は球形胴部に頸部がすはまる壺状の形態を持つが、口縁部の形態、外面は刷毛目調整、内面を縦方向の削り調整を施す事から甕と思われる。1mm大の砂粒を多く含む。28~30は甕の底部でいずれも外面に刷毛目調整を施す。31は壺の底部と思われる。



第12図 SX064実測図(1/40)

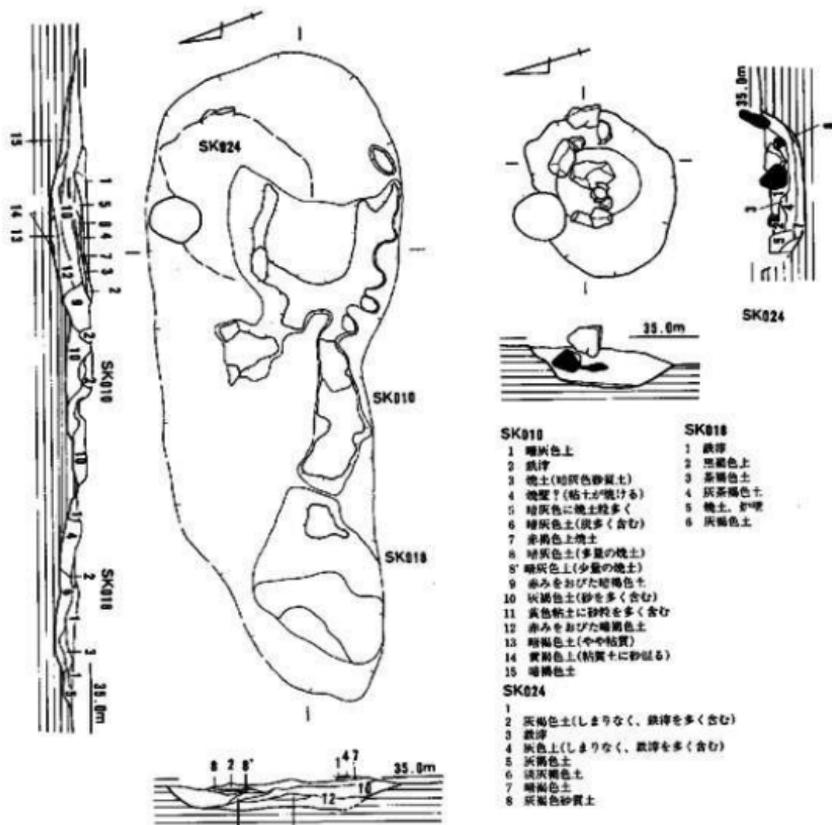


第13圖 SX064出土遺物実測圖(1/6 1/3)

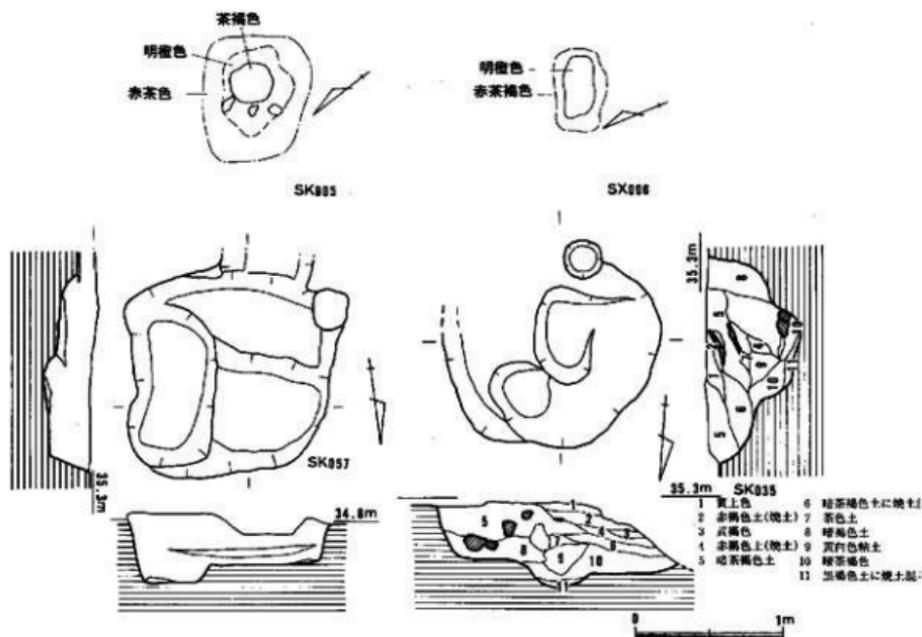
(3) 製鉄関連遺構

鉄滓を含む遺構は調査区全域に広がる。その中で強い熱を受けたり、焼土、炉壁などを含み製鉄関連遺構と考えられるものは、調査区北東のSK005、006、北西のSK010等、南西のSK042等が挙げられる。出土した鉄滓、炉壁等の詳細は後日に期し、今回は遺構の解説を行っておきたい。

SK006 (第15図) SK009と共に調査区北東に位置する。地表面が環状に赤変しており、外側



第14図 SK010、018、024実測図(1/40)

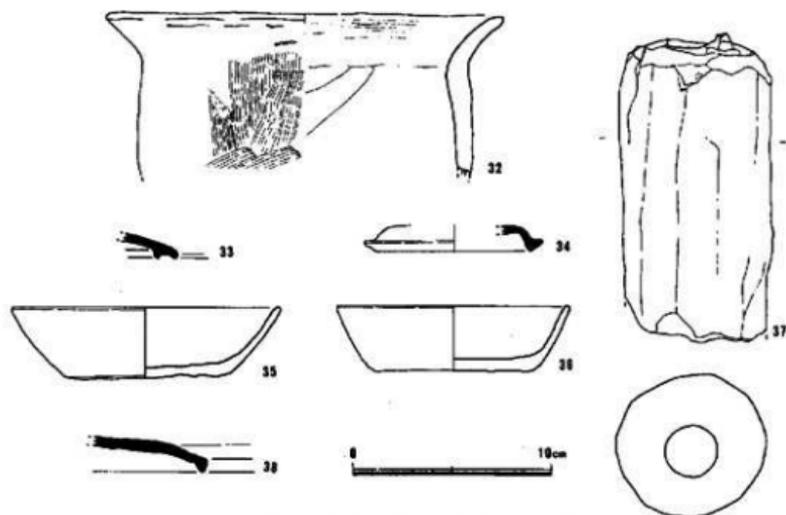


第15図 SK005、006、035、057実測図(1/40)

に向かって漸移的に地表の色と同じになる。上部に高温を発する施設があったものと考えられる。中央部は地面と変わらない。断面を観察したが、赤変しているのは厚さ2cmである。下部構造はない。

SK009(第15図) SK006と同様の遺構である。ただし中央部が最も赤変し、周りになるにつれて薄く地表面と同じになる。

SK010、018、024(第14、16図) 緩やかにくぼみに鉄滓、焼土、炭、炉壁等が見られる。まず東西に長く、両端が円形の焼土、炭の広がりを検出し、東側をSK010、西側をSK018とした。SK018は深さ10cm程の浅いくぼみで、炭を多く含む黒色土に鉄滓、炉壁を含む。焼土も混ざりが少量である。SK010は検出したレベルに焼土が広がり、中央部がくぼむ。焼土は2層に分かれる。全体は深さ25cm程の緩やかにくぼみになる。下部は鉄滓は少量しかみられない。32-34が出土した。SK024はSK010を掘り下げる段階で暗灰色の覆土のくぼみを検出した。SK010のくぼみとはずれる。15cm-30cm大の礫があり、中央からは土師皿35、36と、やや西によりに羽口37が出土した。全体は1m大の深さ30cmのくぼみになる。礫の下は、締まりのない鉄滓を多



第16図 SK010、018、024出土遺物実測図(1/3)

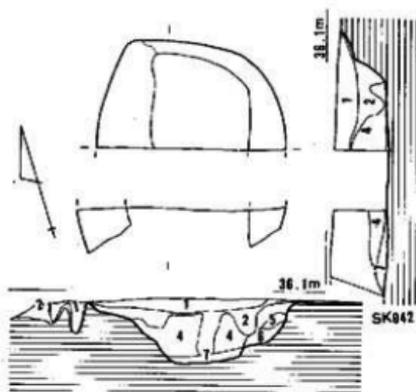
く含む灰色土である。35、36は器面が粗れ、歪んでいるため詳細は不明だが35は篋切り痕が残る。

SK035(第15、16図) 1.5m大の凹形の掘り込みの上部に鉄滓、焼土、炉壁等が堆積する。炉の構造を表す程のものではない。下部は粘質土や、鉄滓等を含まない土が主体であるが、中央のくぼみの最下層は焼土を含む。38が出土した。

SK042(第17図) SK042の周円径約3mは鉄滓を含む焼けた土が広がり、これを取り除いた段階で掘り込みを確認した。南側は鉄滓して掘り下げたためプランは不明であるが、隅丸長方形になるものと思われる。緩やかな壁は北西を除いて焼けている。最下部には炭を多く含む土がある。

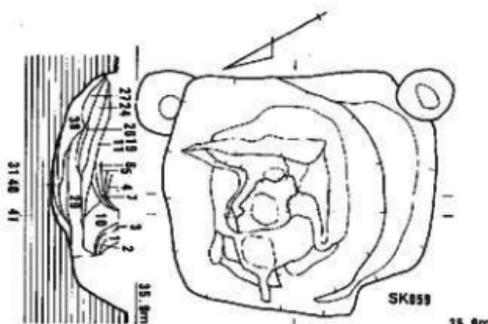
SK057(第15図) 隅丸方形の土坑である。東側が最も深く、西側は二つの段がある。締まりのない灰茶褐色を覆土とし、鉄滓、炉壁を多く含む炉状の構造はない。

SK059(第17図) 方形の土坑の中央に炉壁、焼土等が堆積する。夜間に調査したため、明確な構造と、土層を観察ができなかった。炭、焼土が碗状に重なるパターンが3カ所(7-8、13-14、18-19層)あり、炉を数回作り直したものと考えられる。中央部分は鉄滓等が最下部まで出土するが、周辺部はしまりのない上でそれらの混ざりが少ない。土層図には必ずしも現れてないが、土坑を掘削した後に意識的に締まりのない土を埋めた可能性もあろう。



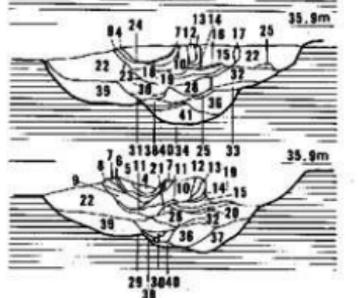
SK042(アミは赤変部分)

- 1 灰褐色土
- 2 鉄滓および
- 3 赤褐色上に鉄滓混ざる
- 4 赤褐色土やや粘質
- 5 褐色褐色土
- 6 黒色土
- 7 暗黄褐色土
- 8 暗褐色土～灰層
- 9 暗褐色土(腐色かかる)
- 10 淡黄褐色土
- 11 暗褐色土



SK059

- 1 灰褐色土(炉壁?)
- 2 黒色でもろい土
- 3 焼土
- 4 灰褐色土(炉壁?)
- 5 灰褐色土
- 6 黒色でもろい土
- 7 黄褐色土(炉壁?)
- 8 焼土
- 9 褐色土
- 10 灰褐色土
- 11 焼土
- 12 黄褐色土(炉壁?)
- 13 黒色でもろい土
- 14 焼土
- 15 赤褐色土
- 16 黄褐色土
- 17 黄褐色土
- 18 黒色でもろい土
- 19 焼土
- 20 灰褐色土
- 21 赤褐色土



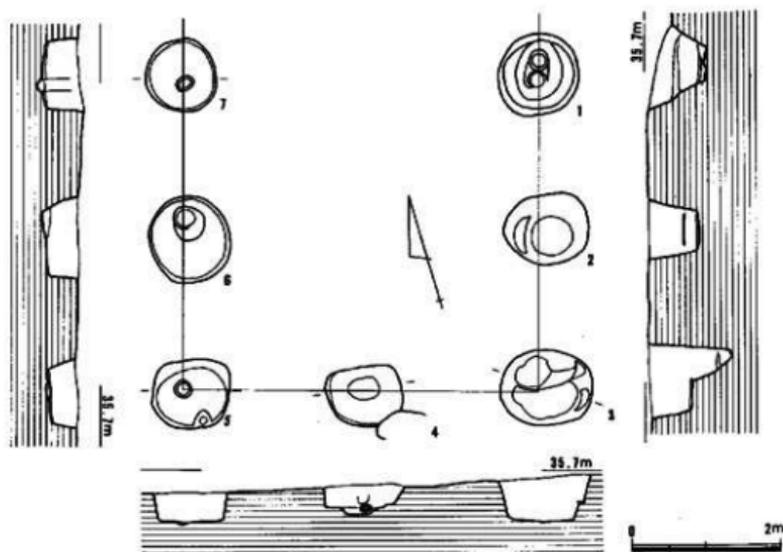
- 22 赤褐色土(灰を多く含む)
- 23 灰層
- 24 赤褐色土に焼土を多く含む
- 25 黄褐色土
- 26 灰褐色土
- 27 黄褐色土
- 28 黄褐色土と赤褐色土が互層
- 29 淡褐色土
- 30 暗褐色土上に焼土を多く含む
- 31 焼土
- 32 赤褐色土
- 33 黄褐色土
- 34 赤褐色土上に焼土を多く含む
- 35 焼土
- 36 赤褐色土(腐色は軽多し)
- 37 黄褐色土と黄褐色土の互層
- 38 赤褐色土が混じる
- 39 赤褐色土上に黄褐色土アブロックを含む
- 40 黄褐色土
- 41 赤褐色土に黄褐色土アブロック

第17図 SK042、059実測図(1/30)

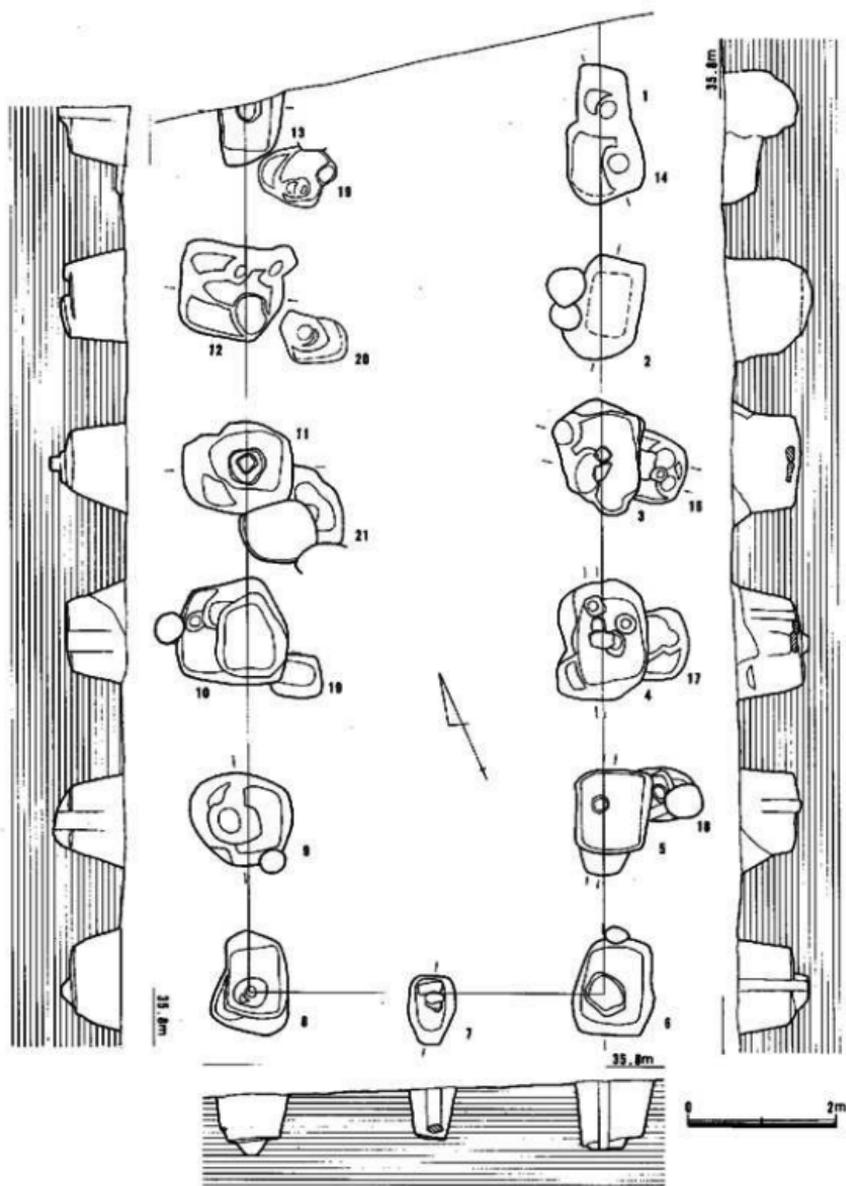
(4) 掘立柱建物

先に述べたように調査区の南東から北西に流れる河川状の低地を挟んで両側に1mを越す掘り方を持つ大型のピットを検出した。北側に5棟、南側に4棟を復元したが、北側は大型ピットの切り合いが著しく、建てたものの中でも疑問が残るものや拾いきれていないものも残っており不十分な報告になる。以下各建物の概略を北側の群から順に述べ、拾えなかったものについては規模を表に示す。なお、柱痕跡は平面ではピットとの区別が付け難いものが多いため、約15cm毎に土層を観察しながら掘り進めた。また、後のピットに切られるものが多く、遺物が混入している可能性もある。

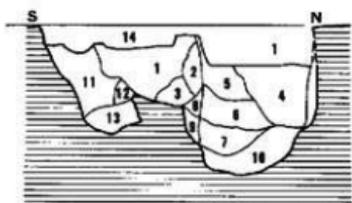
SB030(第18、19、20、21、22図) 調査区の北東で検出した梁行2間×桁行6間以上の建物で北側はさらに調査区外に延びている。主軸は磁北から24度東による。柱掘方は小ピットや他の大型ピットとの切り合いが多く、本来の形をとどめていないものが多いが、おおむね長辺1.1m~1.4m、短辺0.8m~1.2mの長方形のプランを呈する。ただし7はやや小型である。柱間寸法は柱痕跡が確認されたもので2.5m前後で、桁行1~6、8~13間の総長は12mを測る。等間隔とすると一間2.4mである。梁行6~8間でも同様の事が言える。柱筋は9が通っていないが、他



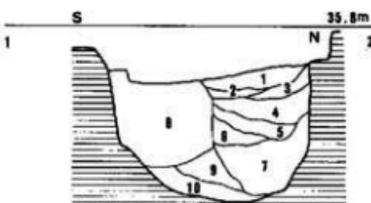
第18図 SB031実測図(1/80)



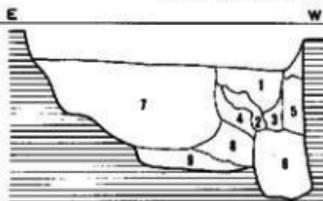
第18圖 SB030實測圖(1/10)



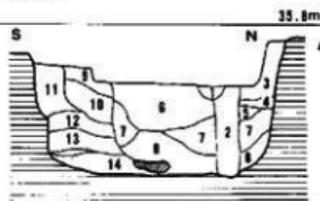
- 1 暗灰褐色土 7 淡灰褐色土と黄褐色土の混り
2 灰褐色土 8 灰黄褐色土
3 灰褐色土に灰が多まる 9 2よりやや明るい
4 淡灰茶褐色土 10 淡灰褐色土に黄褐色土が多まる
5 淡茶褐色土 11 4に同じ
6 茶褐色のしまりあり 12 暗褐色土
13 淡灰褐色土に黄褐色土が多まる



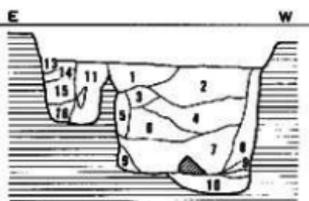
- 1 淡灰褐色土 8 暗褐色土、塊上、灰を含む
2 淡灰褐色土灰まじり 9 暗褐色土
3 黄がかった灰褐色土 10 黄褐色土
4 黄がかった灰褐色土やや暗い、11
5 淡黄褐色土
6 淡黄褐色土
7 暗灰褐色土



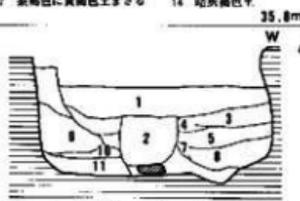
- 1 灰茶褐色土 6 灰褐色土、しまりがない
2 黄褐色土シルト層 7 灰茶褐色土、砂質で均
3 灰茶褐色土に黄褐色土が多まる 8 暗灰褐色土
4 3に近い黄褐色土は粒状 9 灰に黄褐色土多くまざる
5 黄褐色土、やや灰褐色にごる



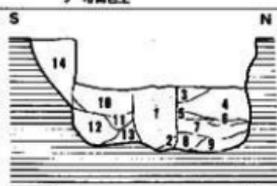
- 1 黄褐色土 8 茶褐色土
2 茶褐色土 9 灰褐色土に黄褐色土ブロック
3 灰黄褐色土 10 灰褐色土に黄褐色土ブロック
4 茶褐色土(灰がかる) 11 暗灰褐色土(灰がかる)
5 4よりやや暗い 12 暗褐色土しまりなし
6 4に同じ 13 12に少量の黄褐色土
7 茶褐色に黄褐色土が多まる 14 暗灰褐色土



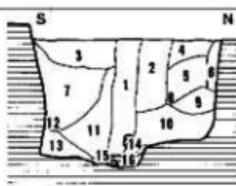
- 1 茶褐色土 10 灰褐色土
2 黄褐色土の多く入った灰褐色土 10' 黄褐色土
3 2がやや暗い 11 灰茶褐色土
4 黄茶褐色土 12 灰褐色土
5 茶褐色土 13 灰茶褐色土
6 4に近い黄が強い 14 黄褐色土
7 黄がかった淡灰褐色土 15 灰灰褐色土
8 暗灰褐色土 16 灰褐色土
9 暗褐色土



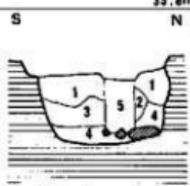
- 1 灰褐色土と黄褐色土の混り 9 暗茶褐色土
2 淡灰褐色土 10 灰褐色土に黄褐色土ブロック
3 灰褐色土 11 暗灰褐色土
4 灰褐色土に黄色ブロック多い
5 黄褐色土に茶褐色土
6 暗褐色土
7 黄褐色土
8 灰茶褐色土



- 1 灰灰褐色土 11 暗灰褐色土
2 黄褐色土、灰褐色土を含む 12 3に近い
3 灰褐色土に黄褐色土少量まざる 13 4?
4 暗灰褐色土 14 灰褐色土
5 灰茶褐色土
6 黄褐色土
7 暗灰茶褐色土
8 黄がかった灰褐色土
9 灰褐色土
10 灰褐色土に黄褐色土少量まざる



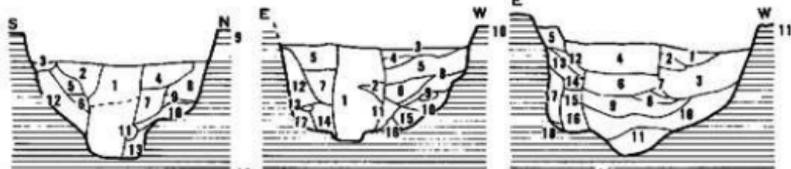
- 1 茶褐色土 9 淡茶褐色土
2 淡茶褐色土に黄褐色土ブロックを含む 10 灰茶褐色土
3 2に近い黄褐色土 11 灰茶褐色土
4 暗褐色土に黄褐色土を含む 12 灰灰褐色土
5 4に多くの黄褐色土を含む 13 灰褐色土
6 灰褐色土 14 淡灰褐色土
7 淡灰褐色土 15 灰褐色土
8 暗褐色土 16 暗褐色土



- 1 灰褐色土と黄褐色土の混り、灰少量まざる
2 灰茶褐色土(やや黄がかる)しまりがない
3 暗灰褐色土
4 灰褐色土
5 暗褐色土、しまりがない

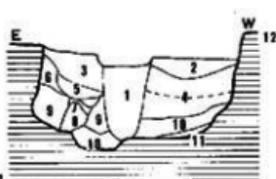


第20図 SB030柱掘方土層実測図(1/40)

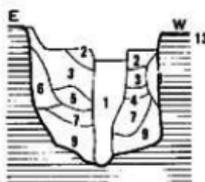


- 9
 1 暗灰褐色土
 2 暗褐色土に黄褐色土ブロック
 3 灰褐色土
 4 暗灰褐色土に黄褐色土ブロック多く含む
 5 暗灰褐色土と黄褐色土の互層
 6 暗灰褐色土
 7 暗灰褐色土(砂まざる)
 8 暗灰褐色土質土
 9 暗灰褐色土
 10 暗灰褐色土や粗骨質
 11 黄褐色土ブロック
 12 黄褐色土に灰色土まざる
 13 淡灰色土
- 10
 1 灰茶褐色土
 2 灰褐色土に黄褐色土
 3 灰茶褐色土(黄褐色土ブロック含む)
 4 黄褐色土
 5 5に近い、黄が強い
 6 灰茶褐色土に黄褐色土まざる
 7 灰茶褐色土
 8 暗茶褐色土
 9 黄褐色土ブロック
 10 暗褐色土、しまりが無い
- 11
 1 淡灰色土
 2 淡灰色土
 3 淡灰色土に黄褐色土
 4 淡褐色土に黄褐色土含む
 5 暗灰褐色土
 6 灰褐色土
 7 黄褐色土
 8 灰茶褐色土
 9 灰茶褐色土、しまりなし
 10 暗褐色土
 11 黄褐色土に茶色土まざる
 12 灰茶褐色土
 13 灰茶褐色土、しまりなし
 14 暗褐色土
 15 灰茶褐色土
 16 暗灰褐色土
 17 暗灰褐色土、しまりなし
 18 黄褐色土

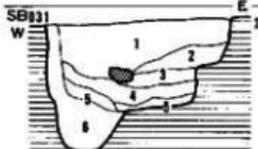
35.8m



- 12
 1 灰茶褐色土
 2 淡灰褐色土に黄褐色土を含む
 3 淡灰褐色土に黄褐色土を含む
 4 灰茶褐色土、黄褐色土、茶褐色土ブロック含む
 5 灰褐色土
 6 黄褐色土
 7 淡灰褐色土
 8 暗茶褐色土
 9 暗茶褐色土
 10 茶褐色土、少量の黄褐色土を含む

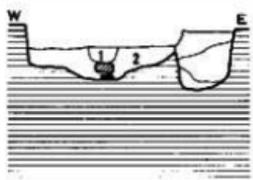


- 13
 1 淡灰色土、しまりなし
 2 黄褐色土に灰色土まざる
 3 淡灰色土に黄褐色土まざる
 4 灰色土
 5 暗灰褐色土
 6 暗灰褐色土
 7 淡灰黄褐色土
 8 6に同じ
 9 黒褐色土

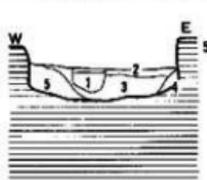


- 3
 1 黄がかった灰褐色土(砂質でしまる)
 2 灰茶褐色土
 3 暗灰茶褐色土、灰色土ブロック上多く含む
 4 灰茶褐色土、黄褐色土を多く含む
 5 黄褐色土、灰褐色土を多く含む
 6 暗褐色土

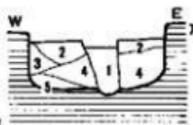
35.7m



- 4
 1 灰褐色土
 2 茶色土



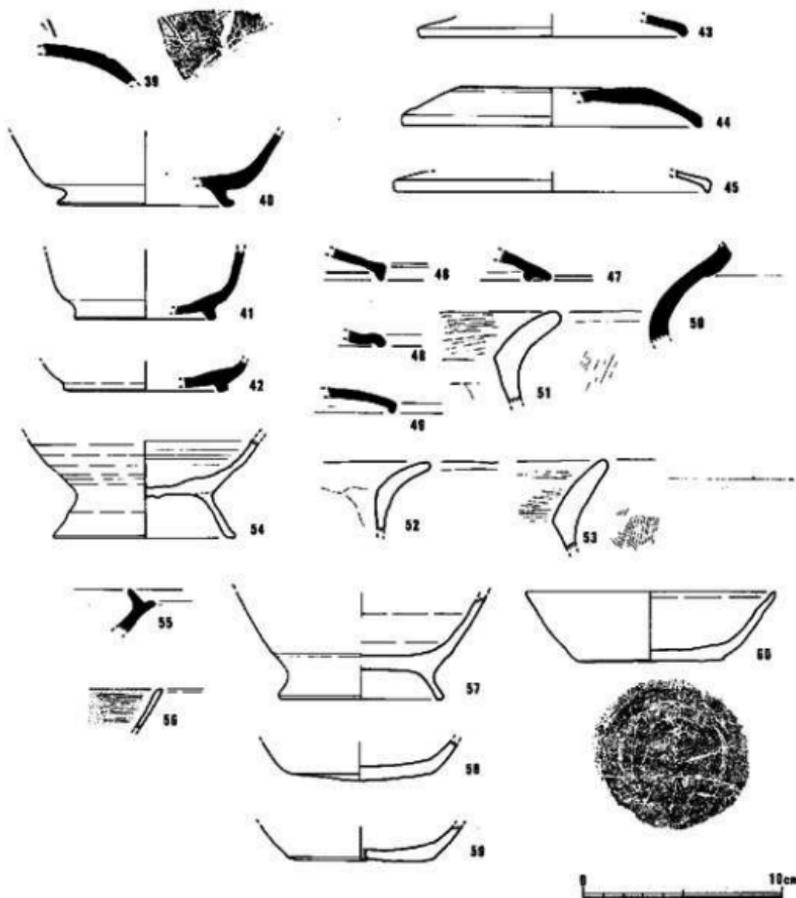
- 5
 1 灰褐色土
 2 黄がかった灰褐色土
 3 暗灰褐色土
 4 暗褐色土
 5 暗褐色土



- 7
 1 灰褐色土
 2 灰茶褐色土
 3 黄褐色土
 4 灰褐色土
 5 灰褐色土

第21図 SB030、031柱掘方土層実測図(1/40)

0 1m



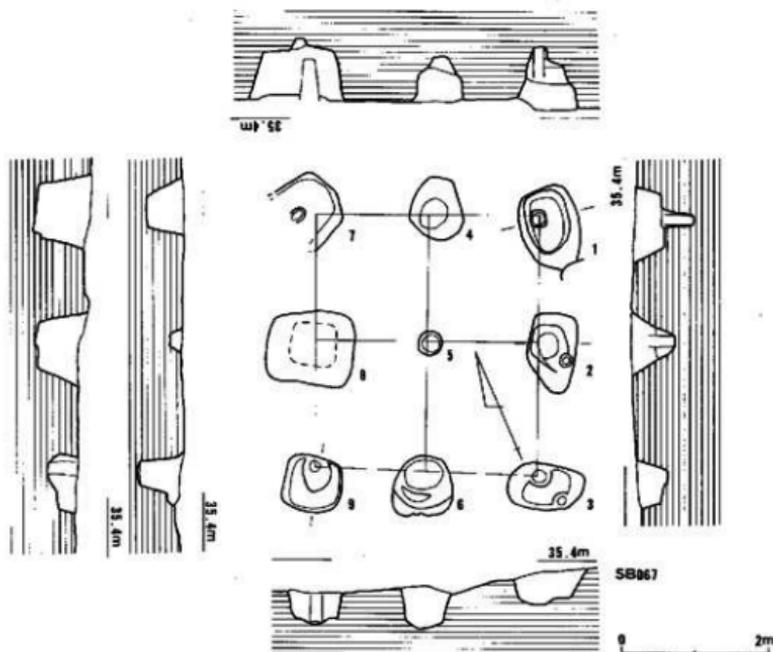
第22図 SB030、031出土遺物実測図(1/3)

の柱漏形との切り合いがある可能性がある。14~22は一部SB030と切り合い、やや軸を西に傾く建物になる可能性がある。しかし18に対応するものがなく、26は浅く小ぶりであり15もはっきりしないため可能性を示して止めておく。なおSB030の掘方に切られるように示したが、実際は切り合いの区別は付け難い。4の上層においては16が切るが疑問が残る。遺物は39から53が出土した。39~49は須恵器の坏身及び蓋である。52、53は土師器の甕である。この他には土師器坏片、黑色土器A片1点、弥生土器片が出土している。14~22は土師器碗54のほか土師

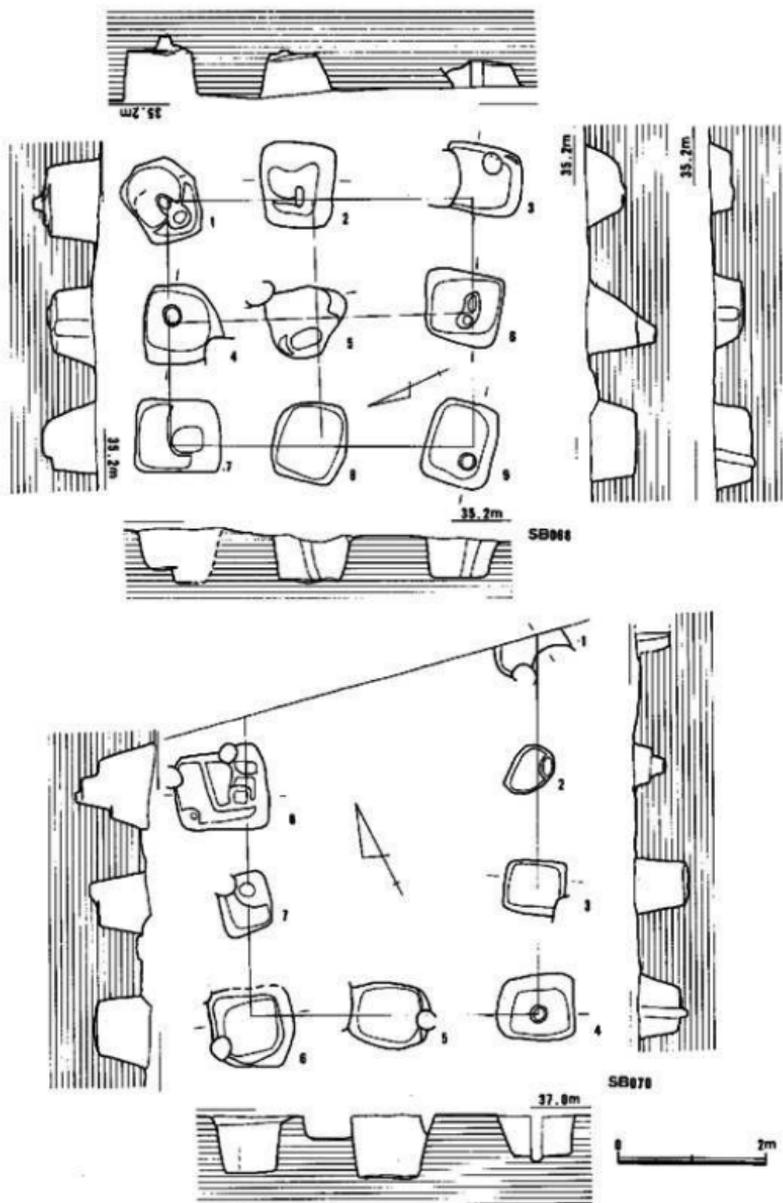
器坏、須恵器甕片、鉄滓等が出土している。

SB031 (第18、21、22図) SB030と重なる梁行2間×桁行3間以上の建物で北側はさらに調査区外に延びている。主軸は磁北から17度東による。柱掘方は直径0.9~1.2mの円形プランを築す。柱痕跡は7のみでしか明確なものを確認できていない。5の床のくぼみを柱の痕跡とすると桁行5~7の柱間は4.2mで、等間隔とすると2.1mである。桁行は1~7間が4.8mを測り、等間隔とすると一間2.4mである。55から60が出土した。55は須恵器の坏、56は黑色土器Aで坏の口縁部と思われる。57~60は土師器で57は碗、他は坏である。この他鉄滓も少量出土している。

SB067 (第23、25、26図) SB030の西3mに位置する2間×2間の建物である。丁度中央に小ピットがあり、機能するものかもしれない。南北軸は磁北から24度東により、SB030と一致する。柱掘方は1m×0.6mの隅丸長方形または一辺0.75mの隅丸方形プランを築す。9はSB068を切る。7、8は切り合いの判断ができず、8は丁度SB067の掘方と重なると思われるが、プラン



第23図 SB067実測図(1/80)

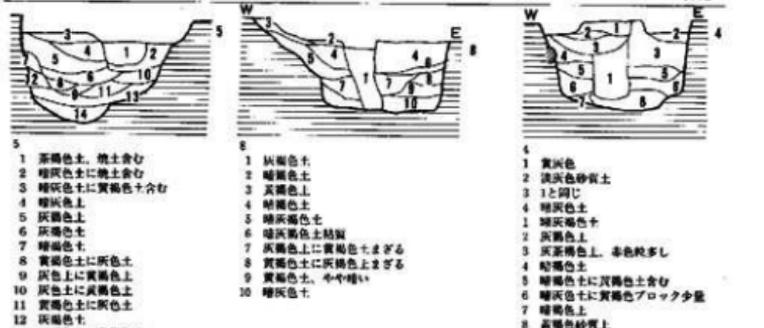
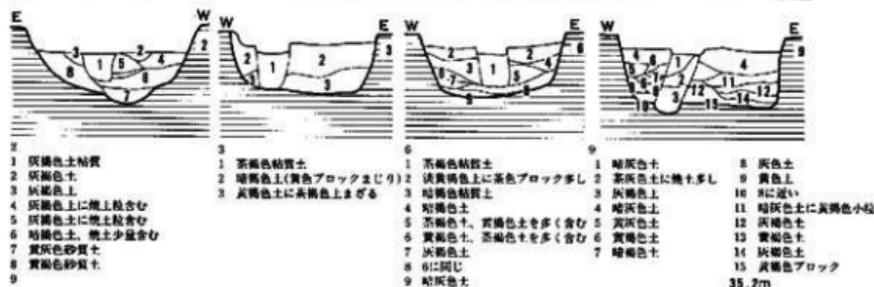


第24图 SB068、070实测图(1/80)



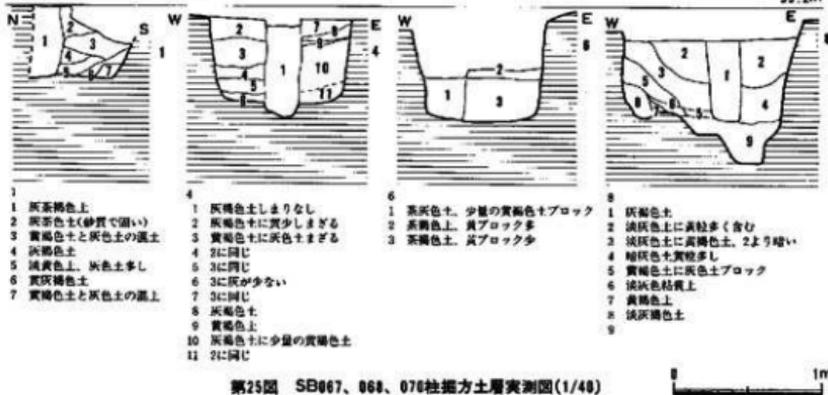
SB068

35.2m



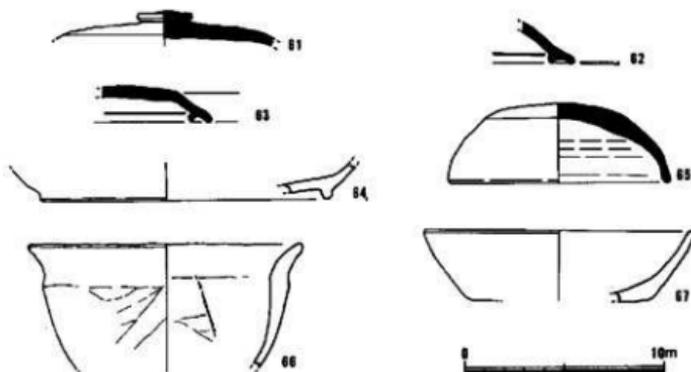
SB070

35.2m



第25図 SB067、068、070柱掘方土層実測図(1/40)

0 1m



第26図 SB067、068 出土遺物実測図(1/3)

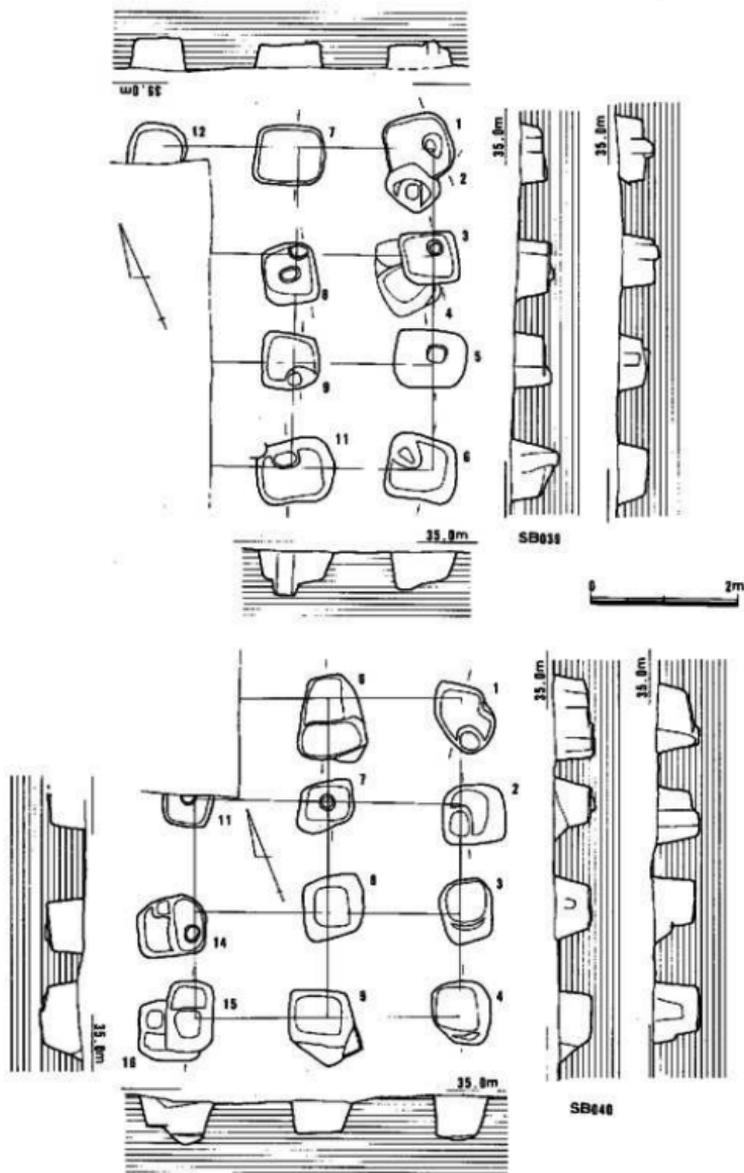
を確認できず両者ともSB068の掘方を示している。南北軸は磁北から24度東によっている。柱痕跡と床のくぼみが残る東側の柱間隔は北から1.7、1.8mである。南側は3.0mで等間隔とする。遺物は62が出土した。須恵器の蓋である。他に少量の鉄滓が出土した。

SB068(第24、25、26図) 3間×3間の総柱の建物で東側をSB067に切られる。また4もSB070にわずかが切られる。南北軸は磁北より24度東によっている。柱掘方は1m大の隅丸方形プランを呈す。規模は柱痕跡が残る東側で4.1m、南側で3.4mを測り南北方向に長い。8、9は柱痕跡が斜方向に残る。遺物は63から66が出土している。63は須恵器の蓋、64は環である。66は土師器の甕である。図示した以外は甕の破片が多く、他に少量の鉄滓が出土した。

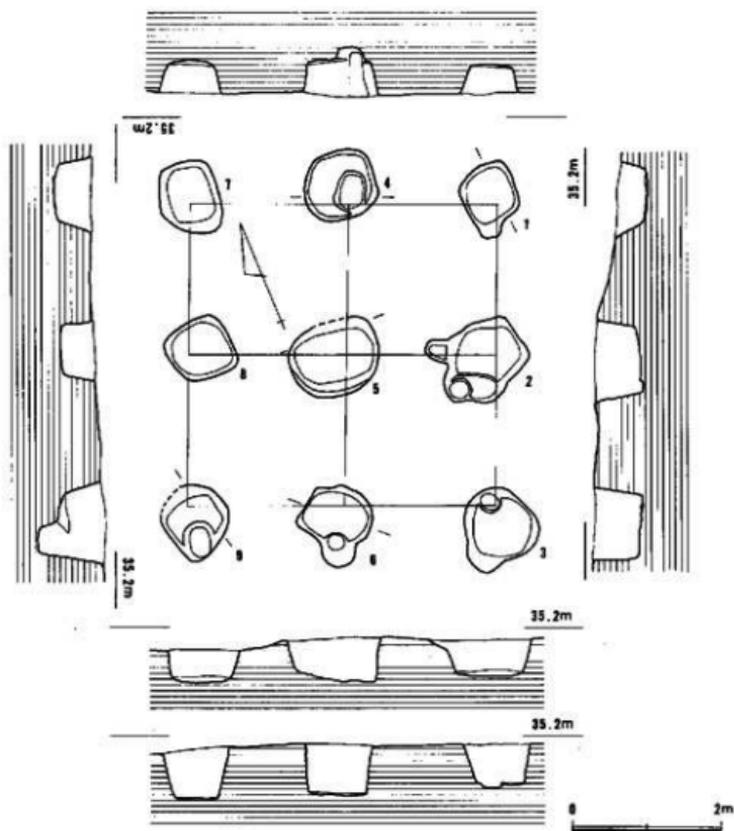
SB070(第24、25、26図) SB068の北西に位置する梁行2間×桁行3間以上の建物で北側にさらに調査区外に延びる。主軸は磁北より24度東によっている。柱掘方は0.8~1.1mの方形を呈す。2は小ぶりで疑問が残る。8は複数のピットが重複したものと思われる。柱間隔は残っているものが少なく、はっきりしないが、桁行の柱間寸法は1~4間が5.1mで等間隔とすれば1.7mとなる。梁行の柱間は4~6間が4.2mで等間隔とすれば2.1mである。遺物は65が出土した。完形に近い生焼けの須恵器環蓋である。この他には土師器の甕、弥生土器、少量の鉄滓が出土した。

南側の一群であるSB039、040、041は軸、規模を同じにして南北に並ぶ。

SB039(第27、30、32図) 調査区の西側中央に位置する2間×3間の総柱の建物で西側は調査区外に延びる。南北の軸は磁北より東に24度よる。柱掘方は0.8m~1m大の方形を呈する。北



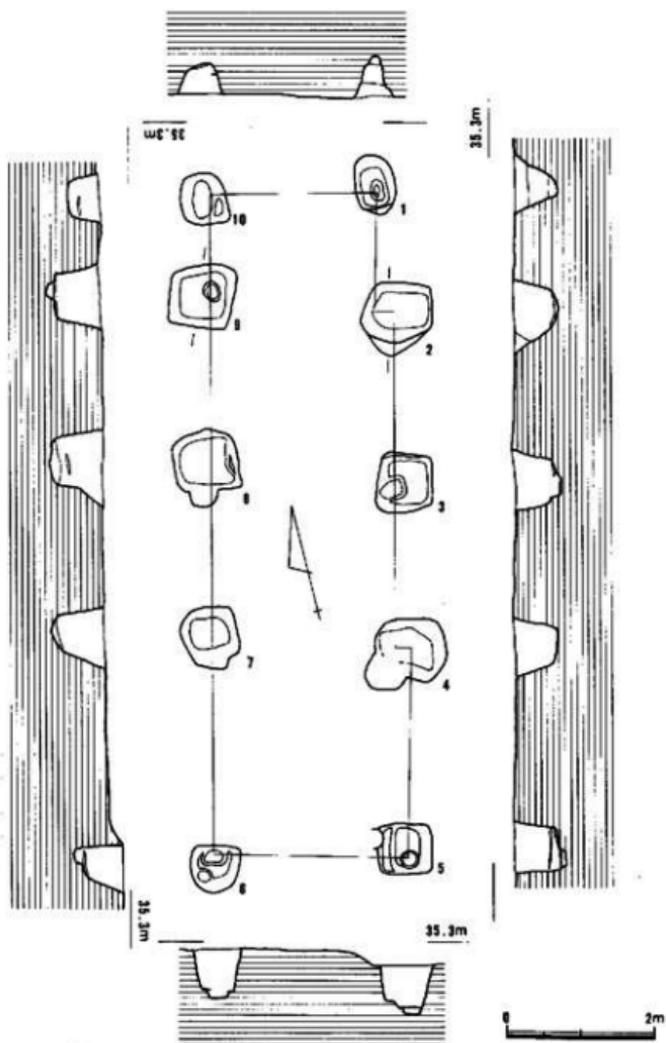
第27図 SB039、040発掘図(1/80)



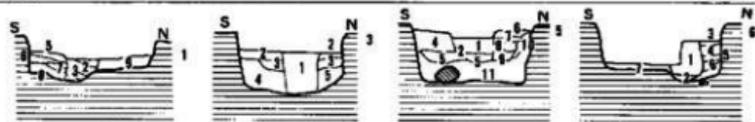
第28図 SB041発掘図(1/80)

側の柱間隔は7~11で4.5mで、等間隔とすれば1間1.5mほどである。東西では4~8間で1.85mと長い。柱筋は5~9間のように通らないものがある。遺物は少ない。68は須恵器の蓋で天井部にへら削りを施す。69は上埴器の環である。軟質で淡澄色を呈す。70は形態は支脚に似る。砂粒をあまり含まず、器壁が薄い。擦過状の調整痕がみられるがナデ調整で仕上げる。この他に土師皿の小片、少量の鉄滓が出土した。

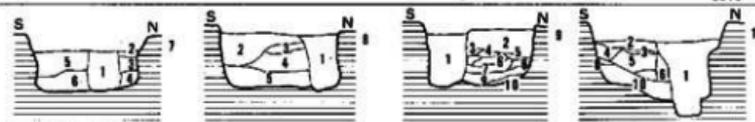
SB040 (第27、30、32函) 2間×3間の総柱の建物である。SB039と柱筋を同じにして柱間で約3m離れて南に位置する。南北軸は磁北より22度東による。規模もほぼ同じである。15は2つ



第29圖 SB042突測圖(1/80)

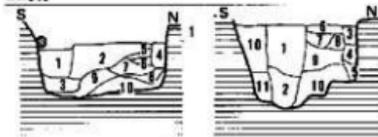


- | | | | |
|---------------|--------------------|------------------|-----------------|
| 1 黄褐色砂質土 | 3 灰褐色土 | 5 灰褐色土(砂を多く含む) | 6 腐植土、やや少質 |
| 2 灰土 | 4 灰褐色土と黄褐色ブロックの混り層 | 6 腐植土 | 7 黄褐色土 |
| 3 暗灰色上に灰褐色土较多 | 5 暗灰色土、黄褐色ブロック含む | 7 灰褐色土 | 8 黄褐色砂質土に灰褐色まざる |
| 4 暗褐色土 | 6 暗褐色土、黄褐色小ブロック | 8 灰土(砂を多く含む) | 9 灰褐色土に黄褐色まざる |
| 5 黄褐色砂質土 | 7 暗褐色土と黄褐色粘質の混り層 | 9 黄褐色土(少量の灰土) | 10 黄褐色土、灰ブロック少量 |
| 6 暗灰色砂質土 | | 10 黄褐色土(少量の灰土) | 11 暗褐色土 |
| 7 黄褐色砂質土 | | 11 灰土 | 12 灰褐色土に黄褐色土少量 |
| 8 黄褐色粘質土 | | 12 黄褐色土(少量の灰褐色土) | 13 暗褐色土 |
| 9 暗灰色粘質土(砂質) | | 13 灰土に少量の黄褐色土 | 14 黄褐色土 |
| | | 14 黄褐色土 | 15 黄褐色土 |
| | | 15 黄褐色土 | 16 黄褐色土 |

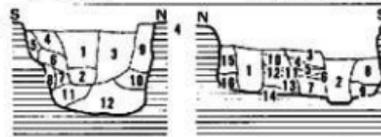


- | | | | |
|-------------------|---------------------------|-----------------|---------------------|
| 7 灰褐色土 | 8 暗灰色粘質土 | 9 1 灰褐色土、砂を多く含む | 11 1 茶がかった暗灰色土、シルト質 |
| 2 灰褐色土と黄褐色ブロック混り層 | 9 暗褐色土(粘質) | 2 暗褐色粘質土 | 2 暗褐色土に暗褐色土 |
| 3 暗褐色土、黄褐色ブロックを含む | 10 暗褐色土に少量の黄褐色土 | 3 灰白色砂質土 | 3 黄褐色土に暗褐色土 |
| 4 暗褐色土、黄褐色小ブロック | 11 今や茶がかった暗褐色土に少量の黄色土ブロック | 4 2に同じ | 4 2に同じ、黄が多い |
| 5 暗褐色土と黄褐色粘土の混り層 | | 5 2に同じ | 5 暗褐色土に黄褐色土 |
| | | 6 2に同じ | 6 暗褐色土に黄褐色土 |
| | | 7 黄褐色粘質土 | 7 暗褐色土に黄褐色土 |
| | | 8 黄褐色粘質土 | 8 暗褐色土に黄褐色土 |
| | | 9 7に同じ | 9 黄褐色土 |
| | | 10 7に同じ | 10 暗褐色土に黄褐色土 |

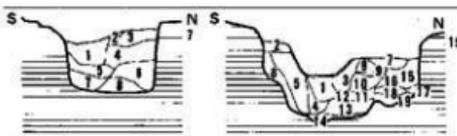
SB040



- | | |
|-------------------|------------------|
| 1 灰土に黄褐色土 | 2 灰茶褐色土 |
| 2 灰土に多くの黄褐色土 | 3 暗灰色粘質土 |
| 3 灰土、黄褐色土、黄白色の混り層 | 4 黄褐色土に灰褐色土まざる |
| 4 暗灰色土 | 5 黄褐色土 |
| 5 灰白砂 | 6 灰褐色砂質土 |
| 6 暗褐色土 | 7 灰褐色土、灰少量 |
| 7 灰白色砂 | 8 黄褐色土 |
| 8 黄褐色土に灰褐色土 | 9 暗褐色土に灰白色粘り多くなる |
| 9 灰白色砂 | 10 9に同じ |
| 10 灰褐色土に灰白色砂 | 11 暗灰色粘質土 |

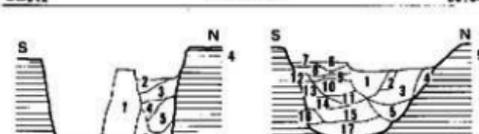


- | | |
|-----------------|----------------|
| 3 暗灰色粘質土、砂を多く含む | 6 暗灰色土 |
| 4 暗褐色粘質土 | 7 暗褐色土に黄褐色土まざる |
| 5 暗褐色土に黄褐色土まざる | 8 暗褐色土に黄褐色土 |
| 6 暗褐色土 | 9 暗褐色土に黄褐色土 |
| 7 暗褐色土に黄褐色土 | 10 暗褐色土に黄褐色土 |
| 8 暗褐色土に黄褐色土 | 11 暗褐色土に黄褐色土 |
| 9 暗褐色土に黄褐色土 | 12 暗褐色土に黄褐色土 |
| 10 暗褐色土に黄褐色土 | 13 暗褐色土に黄褐色土 |
| 11 暗褐色土に黄褐色土 | 14 暗褐色土に黄褐色土 |
| 12 暗褐色土に黄褐色土 | 15 暗褐色土に黄褐色土 |
| 13 暗褐色土に黄褐色土 | 16 暗褐色土に黄褐色土 |



- | | |
|-------------------|------------------|
| 7 灰褐色土、黄褐色土较多 | 15 1 灰褐色土、まじり少ない |
| 8 黄褐色土、黄褐色土较多 | 2 灰褐色土、黄褐色土较多 |
| 9 黄褐色土 | 3 灰褐色土 |
| 10 黄褐色土に灰褐色土 | 4 灰褐色土 |
| 11 黄褐色土、まじり少ない | 5 灰褐色土に黄褐色土较多 |
| 12 暗褐色土(粘質) | 6 暗褐色土に黄褐色土 |
| 13 暗褐色土に黄褐色土少量まざる | 7 黄褐色土 |
| 14 黄褐色粘質土、やや黄にごる | 8 灰褐色土に黄褐色土ブロック |
| | 9 黄に灰ブロック |
| | 10 灰に黄の粘り多し |
| | 11 暗褐色土 |
| | 12 暗褐色土 |
| | 13 暗褐色土 |
| | 14 黄褐色土に灰土ブロック多し |
| | 15 暗褐色土に黄土ブロック |
| | 16 暗褐色土 |

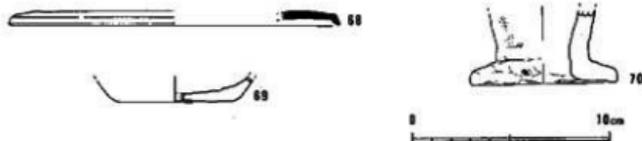
SB042



- | | |
|------------|----------------|
| 4 1 暗灰色粘質土 | 9 暗褐色土 |
| 2 暗褐色土 | 10 暗褐色土に黄白ブロック |
| 3 灰褐色砂質土 | 11 暗褐色土 |
| 4 灰褐色砂質土 | 12 灰褐色土 |
| 5 白色砂質土 | 13 黄褐色土 |
| 6 暗褐色粘質土 | 14 暗褐色土に黄褐色土 |
| | 15 灰褐色土 |
| | 16 暗褐色土 |
| | 17 暗褐色土に黄褐色土 |



第31図 SB041柱端方土層実測図(1/40)

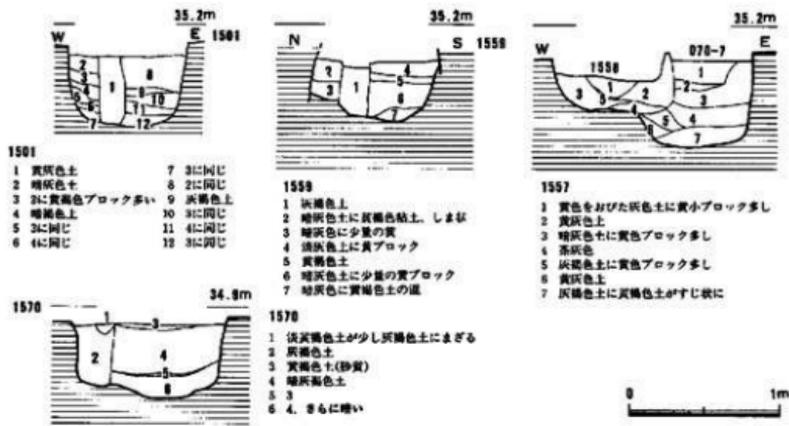


第32図 SB039、040、041、042出土遺物実測図(1/3)

の掘形が重なる。平面では区別できなかったが、土層観察で切り合いと2つの柱痕跡を検出した。段差のある掘方も切り合いの可能性が考えられるが他の建物はひろえない。15は覆土上部に鉄滓が薄く張り付く。遺物は各掘方から出土しているが少量で、弥生土器の他は土師皿片、須忠器、土師器の甕の胴部片が出土した。

SB041(第28、31図) 2間×2間の総柱の建物である。柱間で約2.5m離れる。南北軸は東に22度よる。柱掘方は0.8~1mの方形を意識しているが方向が不揃いである。柱痕跡を認識できたものが少なく、柱間隔は復元困難であるが、南北、東西方向とも2m弱と思われる。出土遺物のほとんどは弥生、縄文土器で、須忠器の小片、土師器の甕と思われる破片をわずかに含む。少量の鉄滓が出土した。

SB042(第29、30、32図) SB040、SB041の東に位置する桁行4間、梁行1間の建物である。柱痕跡を検出できなかったため柱間隔は不明である。南北軸は磁北より14度東により、SB039



第33図 大型ビット土層実測図(1/40)

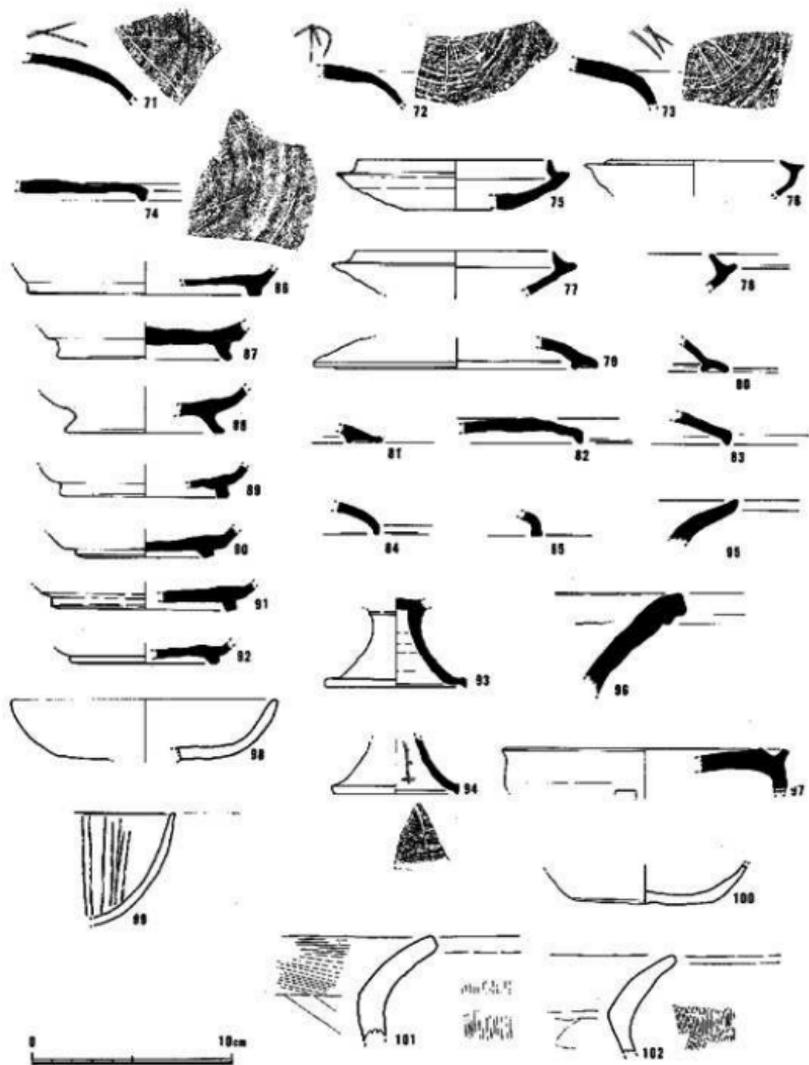
表1 大型ビット計測表 (上・下端は標高, 単位はm)

遺構番号	ナテ×ヨコ(cm)	上端	下端	遺構番号	ナテ×ヨコ(cm)	上端	下端	遺構番号	ナテ×ヨコ(cm)	上端	下端
1501	83×73	35.13	34.45	1540	100×95	35.11	34.31	1590	106×82	34.76	34.12
1504	112×105	35.12	34.55	1542	100×100	35.17	34.28	1108	70×70	35.6	35.03
1305	75×60	35.12	34.37	1555	88×55	35.0		1109	80×70	35.39	34.95
1506	100×100	35.2	34.13	1508	70×76	35.0	34.84	1216	86×74	35.67	34.6
1522	80×68	35.34		1559	100×80	35.09	34.96	2125	79×86	34.95	34.34
1532	84×78+a	35.75	35.09	1563	100×63	34.99	34.37	2126	80×60	34.79	34.02
1539	35×30	35.56	33.5	1570	106×110	35.0	34.38	2127	84×74	34.79	34.11
1539	71×60	35.39	34.96	1581	94×60+a	35.7	34.97	2129	70×60	34.92	34.4
				1586	90×80	35.1	34.12				

等と向きを異にする。2~4、7~9は2.4m前後の柱間隔で復元できるが、1、10と2、9との間隔は1.3m前後と不揃いである。やや疑問が残るが建物遺構とした。1、10などは付属施設の柱形か。遺物は少なく、弥生土器を主体とし、土師器の坏と思われる小片が出土している。他に少量の鉄滓が出土した。

その他の大型ビット(第33図、表1 付図1)

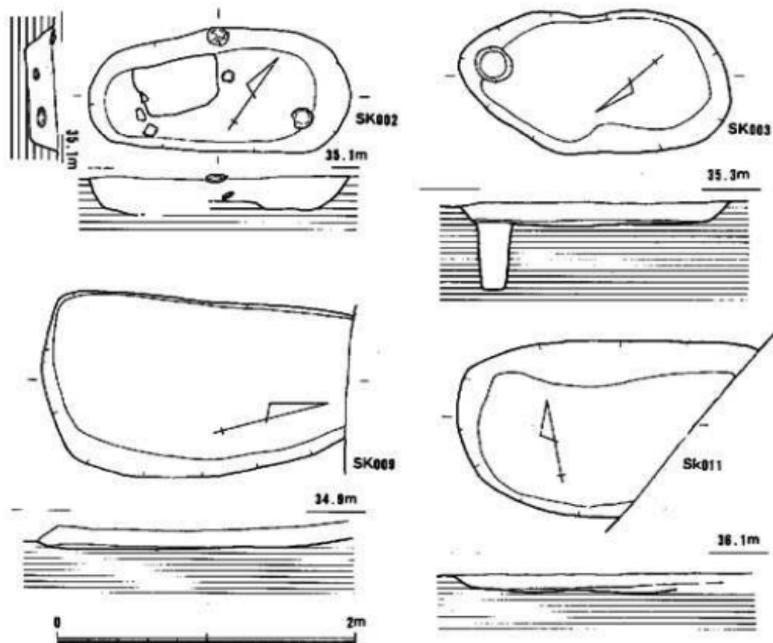
調査区の北半の建物群の周囲には、建物としてまとめきれなかった大型のビットが分布している。ここでは復元の見通しについて若干述べておく。東側のSB030と重複するものは先述した。SB067の周辺ではSP1505、1574、233、1545があげられる。0.7m大の不整形でSB067に近い。その北にはSP1507、236や、1506、1540がビットの切り合いの可能性がある。SB070の周りではSP1542、1504、1565、1586、1559、1588がまとまる。掘方は0.8~1mの方形で揃う。ただし1565は浅く、小ぶりでSB068-4のほうが揃う。233もSB068-7とはほぼ重なる。SP1588の北は検出できていない。この内側では北からSP2390、2127、2126があり、その延長上には258、1572、2129が少なくとも見かけの上では並ぶ。SB070の西側ではSP2391、1563、1570が



第34図 大型ピット出土遺物実測図(1/3)

等間隔に位置し、北に延びることも考えられる。

出土遺物で図化できたものを一括して以下示す。71～97は須恵器である。71～74はヘラ記号が施される。75～78は返りを持つ環である。75は2mm大の砂粒を多く含む。93、94は高環の脚部である。93の脚部は回転ナデ調整で外面には縦方向の擦痕が見られる。環部内面はナデ調整である。94も回転ナデ調整で内面にヘラ記号状の沈線がある。75、76は甕の口縁である。76は生焼けである。97は円面碗で脚に透かしが入る。陸部は使用され清らかである。98～102は土師器である。98、99は外面に丹塗りを施す環で、98は脚がつくことも考えられる。99は外面は横方向の研摩調整で、内面には縦方向の暗文を施す。100はヘラ切り底を残す環で砂粒を多く含む。101、102は甕で刷毛目調整痕が残る。図示した以外には土師器の甕片が多く、土師器の環、須恵器がある。1点ずつだが羽口と白磁の小片も出土している。後者は混入の可能性が高い。土師器の椀は出土していない。少量の鉄滓を出土したものが多い。



第35図 SK002、003、009、011実測図(1/40)

(5) 土坑

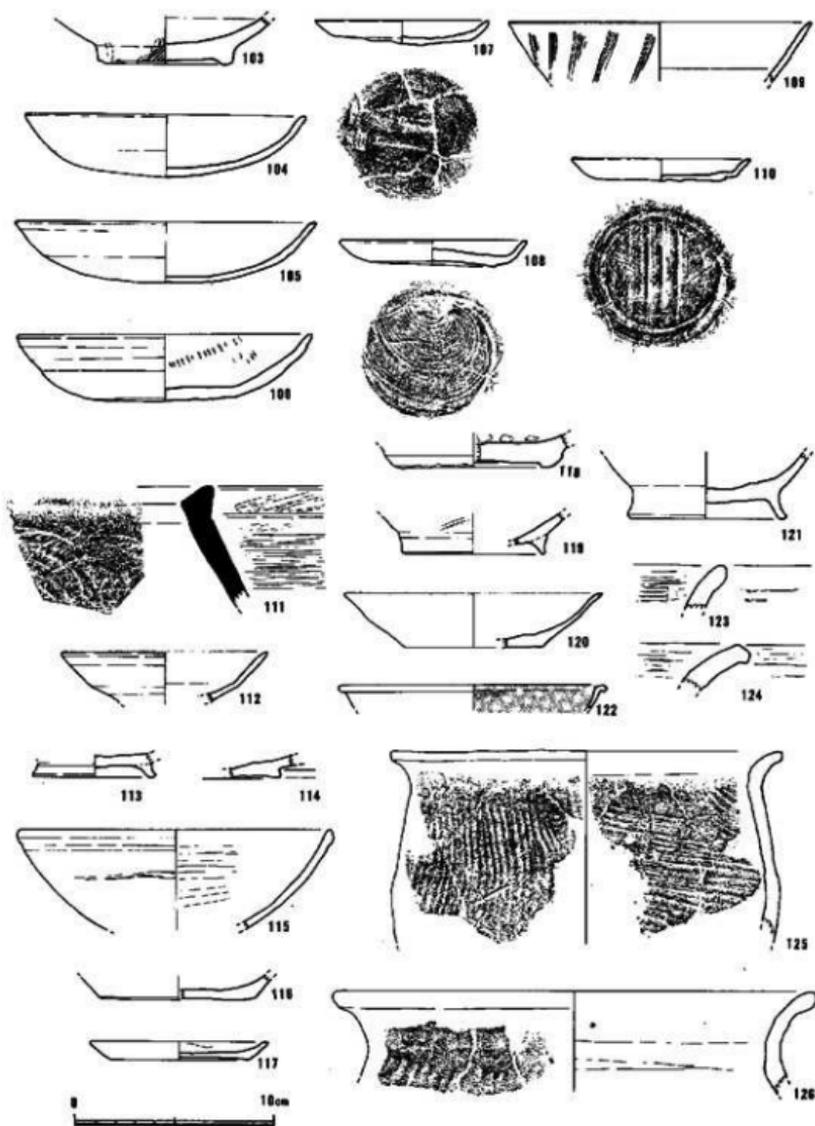
上記以外の遺構を土坑として時期等に関係なく遺構番号順に示す。特に断りのないものは1面目で検出したものである。

SK002 (第35、36図) 調査区中央北側に位置する楕円形の土坑でSB068を切る。長軸1.75m、短軸0.85mを測る。中央部分はピットとの切り合いを掘りすぎている。床面より浮いて完形の土器が出土した。覆土は粘質のある暗褐色土で柱掘方とは異なる。103～108が出土した。103は白磁の碗のIV類で青灰色がかかった灰色の釉がかかるが、体部外面下半は露胎で刷毛目状の調整痕がみられる。104～106は坏で口径14.1～15cmを測る。いずれも精良な胎土で105、106にはヘラ切りの痕跡があり、板目らしきものもある。106内面には2mmから4mmおきに刷毛目状の痕跡が短く見られる。107、108は土師皿で、107はヘラ切り底で板目圧痕を持ち口径9.3cm、108は糸切り底で口径8.9cmを測る。他に少量の鉄滓が出土した。

SK003 (第35、36図) 調査区中央北側に位置する不整形円形の土坑でSB067、068を切る。長軸1.8m、短軸0.8m、残存する深さ15cmを測る。覆土は粘質のある暗褐色土で柱掘方とは異なる。109、110が出土した。109は白磁のV類で青みがかかった灰白色を呈し、外面には櫛描き文を施す。110は完形の土師器皿でヘラ切り底に板目圧痕が残り、内面にはナデ調整を施す。他に少量の鉄滓が出土した。

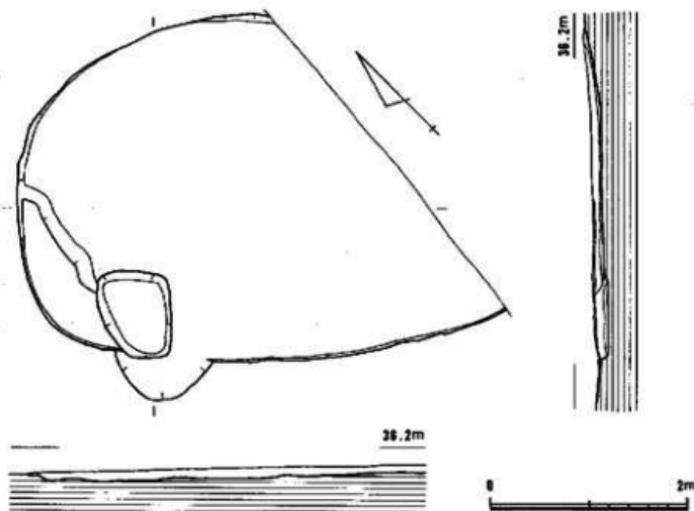
SK009 (第35、36図) 調査区中央北側に位置し北側は調査区外に延びる。不整形長方形の土坑でSB069を切る。長軸2.1m以上、短軸1.25m、残存する深さ13cmを測る。覆土は粘質のある暗褐色土で柱掘方とは異なる。111～117が出土した。112は白磁の皿で釉は青みがかかった灰白色を呈す。外面底部付近は露胎である。113は土師器の碗の脚部である。114は陶器の脚部で暗灰色を呈し、断面内部は茶色を呈す。115は土師質の碗形の土器で玉縁口縁を有し、白磁を模したものである。胎土は2mm大の砂粒を含むがきめ細かく器面は外面に凸凹があるが平滑である。116、117はヘラ切り底の土師皿である。116は粗い胎土であるが117はきめ細かな胎土で1/4からの復元口縁は9cmを測る。他に精良な胎土の土師器の坏や皿の破片が目立つ。

SK011 (第35、36図) 調査区の東壁にかかる土坑で調査区外に延び、隅丸長方形になるものと思われる。第0面目で検出した。長軸2m以上で短軸0.7m、現存する深さ13cmを測る。覆土は暗褐色の砂質土である。118～126が出土した。118は越州窯系青磁で体部全体に深い灰緑色の釉を施し、疊付き、見込みには日跡が残る。119は土師器の碗である。120は糸切り底と思われる土師皿で1/4からの復元口径は13cmを測る。121は土師器の碗で淡橙色を呈す。122は黒色土器Aで薄い器壁を折り返す。小片のため復元口径には疑問が残る。123、124は土師器の甕で内面に刷毛目調整を施す。125、126は土師器の甕である。125は内外面に平行叩き痕を残し黒色を呈す。126は外面に平行叩き痕を残し淡黄橙色を呈す。玄界灘式製塩土器と呼ばれているものか。他に少量の鉄滓が出土した。



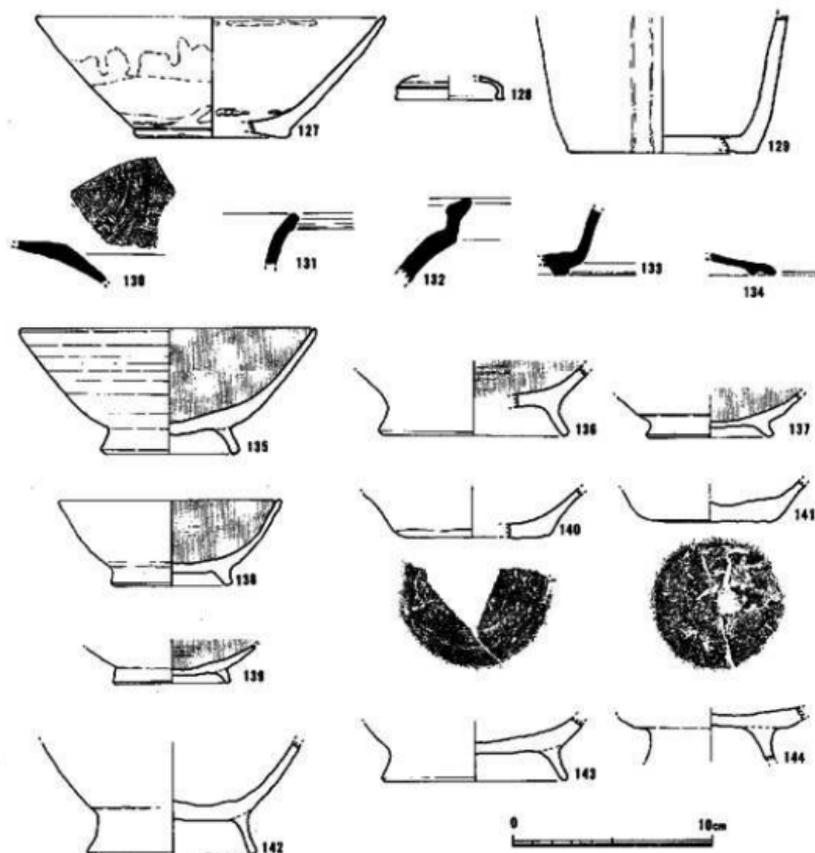
第36图 SK002、003、005、011出土遗物实测图(1/3)

SK012(第37、38、39、40図) 調査区の南東隅で灰茶褐色土上の第0面で検出した浅いくぼみ状の遺構で、調査区外に広がる。長軸5m以上、短軸3.5m、深さ13cmを測る。炭を少量含む茶褐色粘質土を覆土とする。遺物が多く出土したが、散乱した状況でまとまりはなかった。127~182が出土した。127は越州窯系青磁で灰緑色の釉を施すが発色が悪くむらがある。底部は凹盤状を呈し上げ底気味である。外面下部は露体で淡橙色を呈す。内面には日跡がある。128は越州窯系青磁の合子の蓋で淡灰緑色の釉がかかる。129は灰釉陶器と思われる。露体部に深い緑色の釉が厚く垂れている。130から134は須恵器である。130にはヘラ記号が施される。131は甕の口縁部、132は外反する頸部に立ち上がる口縁部が付く。133は坏身、134は蓋である。135~139は黒色土器Aで、内面に研磨調整を施す。135~139は碗で、137には板目圧痕が残り、138は疑似口縁の可能性がある。140、141は坏で底部外面はヘラ削りの後板目圧痕が付く。140~160は土師器である。143、144は碗である。145~153は坏で145~147はヘラ切り、ヘラ削りのあと板目が付く。他は器面が粗れており不明である。150は完形品で口径12.4cmを測る。154~160は甕である。154は外面横ナデ、内面刷毛目調整、155、157は内外面刷毛目調整、158は

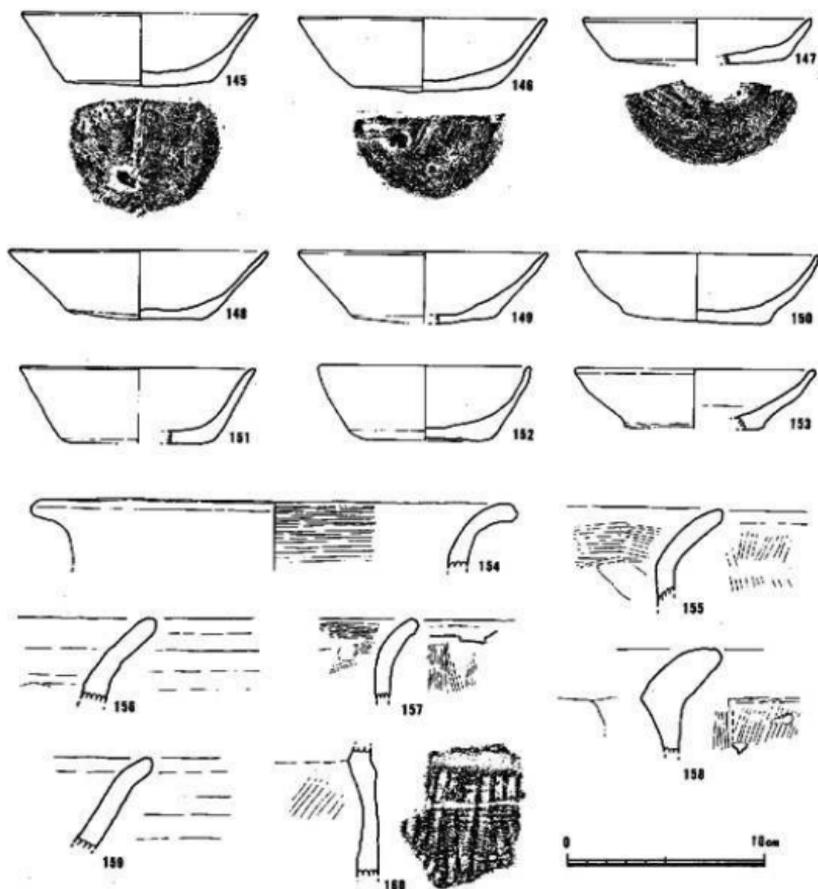


第37図 SK012実測図(1/60)

外面刷毛目、内面削り調整である。156、157は内外面に強いナデを施す。160は外面に疑似格子状叩き痕、内面に平行叩き痕が残り、2次焼成によると思われるわずかな赤変がみられる。161~170は土鉢である。重さは順に16.5、18.2、10.6、6.2、7.3、5.5、5.0、4.2、3.5、3.0gである。171~174、177はスサの汗痕が多く残る不明土製品である。形、大きさはまちまちで



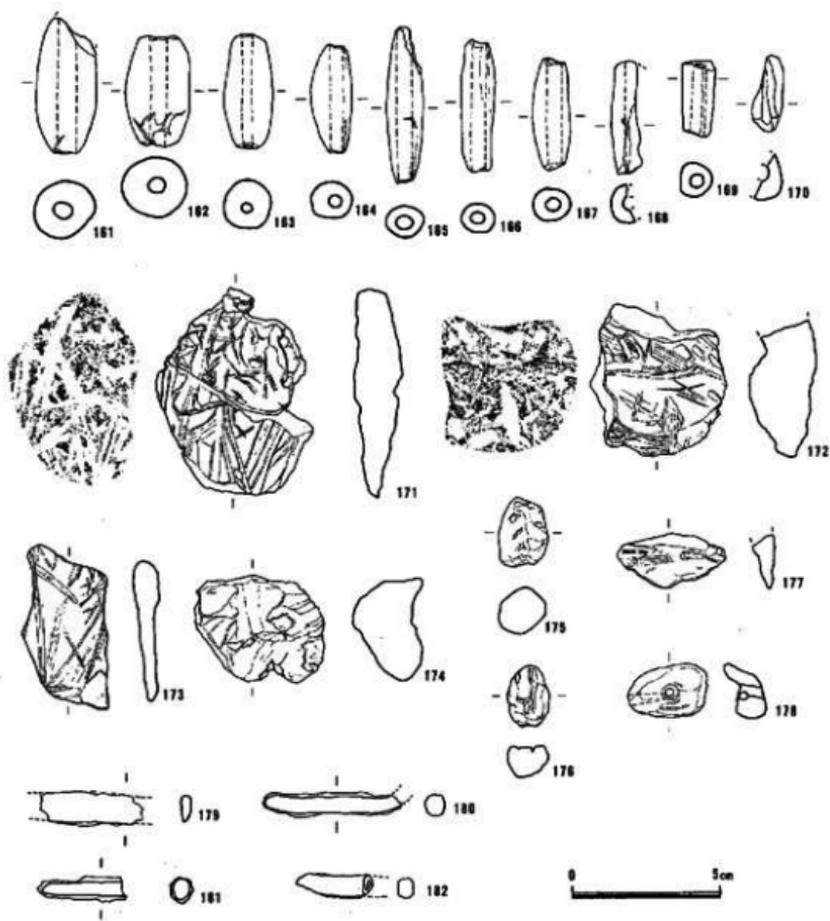
第38図 SK012出土遺物実測図1(1/3)



第39図 SK012出土遺物実測図2(1/3)

胎土で精良である。175、176は土玉状の土製品である。178は耳管状の土製品で中心に穴を通し、そこから図の右方向にも穴が通る。179～181は鉄製品だが、錆が著しく不明な点が多い。179は断面が方形で幅1cmを測る。鉄の可能性もあろう。180は片側の折れた部分から曲がるようである。181、182は断面円形で幅5.7mmを測る。他に鉄滓が出土した。

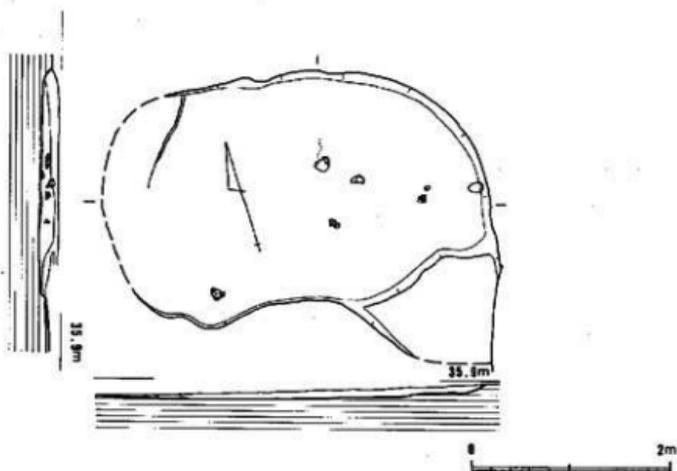
SK013(第41、42図) SD012の西隣で検出した同様の遺構である。西は浅く上端がはっきり



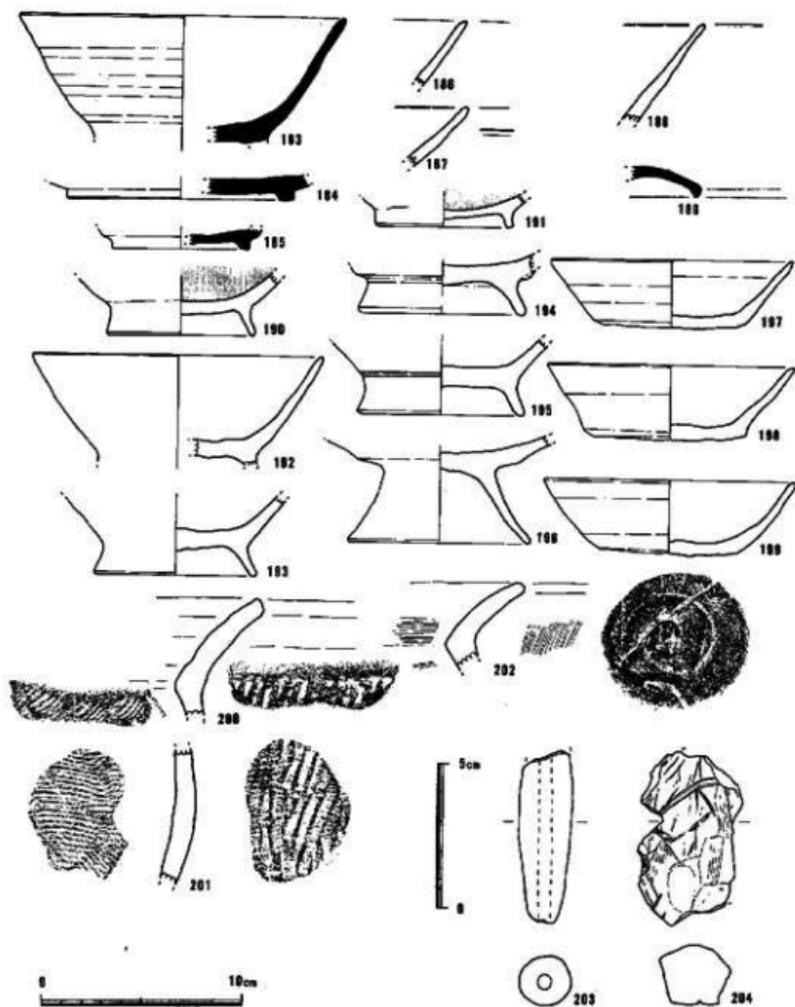
第40图 SK012出土遗物实测图3(1/2)

しない。長軸3.9m、短軸2.4m、深さ10cm弱を測る。183～204が出土した。183～185は須恵期の環、189は蓋である。186～188は青磁碗の口縁部である。186は淡緑色、187は深い緑色、188は茶色がかった緑色の釉を施す。188には細かい貫入が入る。190、191は黒色土器Aの碗である。190は内面に研摩調整を施し、外面は淡橙色を呈す。191は低い脚部を持つ。器面は粗れている。192～202は土師器である。192～195は碗である。いずれも淡橙色を呈し、細砂粒を含むが精良な胎土で回転ナデ調整で仕上げる。192は直線的な体部を有す。他も同様かと思われる。196は高い脚を持った環で内外ともに回転ナデ調整で仕上げる。細砂粒を含むが精良な胎土で淡橙色を呈す。197～199は坏である。197、198は底部外面を再調整しており、199はヘラ切りの後わずかながら板目疳が付く。198、199の内面には炭化物が付着する。200、201は胴部外面に疑似格子目叩き、内面には丸みをもった平行した当て具痕がみられる。玄界灘式製塩土器に似る。胎土にカクセン石が目立つ。202は外面と口縁部内面に刷毛目を施す甕で、外面橙色、内面黄白色を呈す。203は十蓋で現存するだけで18gを計る。204はSK012で見た不明土製品と同類である。やや厚めである。

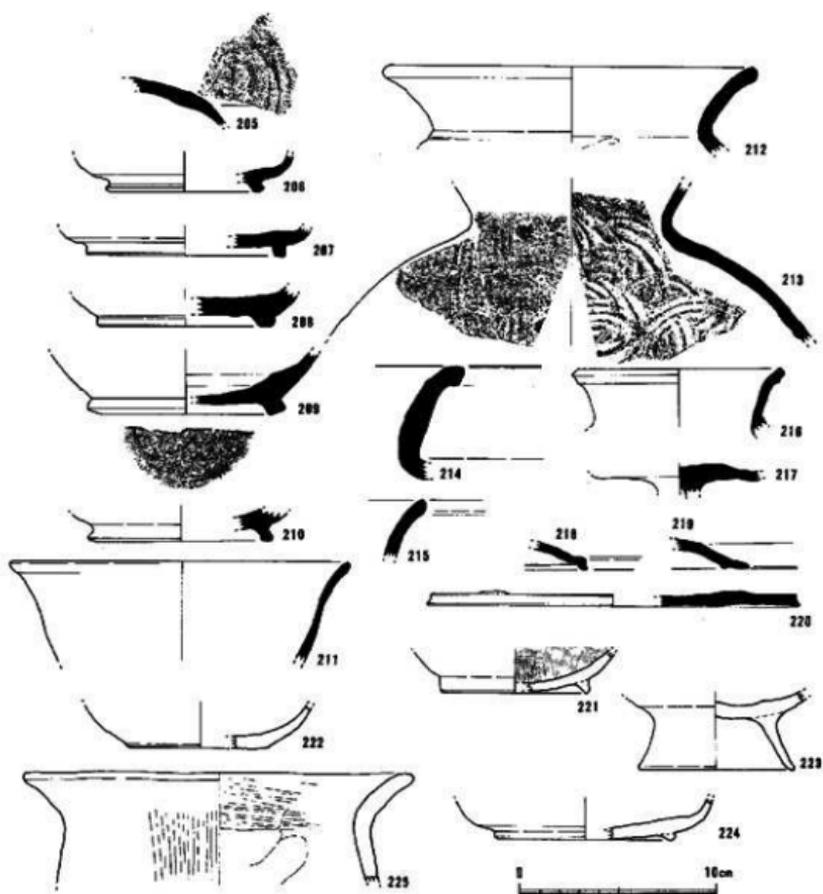
SK014(第43図) SB030の東で検出した土坑だが、遺構実測図を取っていない。SB030の東側で検出した、隅丸長方形の浅い遺構だが詳細は不明である。遺物が出土しているので第41図に示した205～221は須恵器である。206～210のうち206、207は壺等の脚の可能性があり、他は環と思われる。209は内面に強い回転ナデ痕が残り、外面底部には糸切り状の痕跡がある。2



第41図 SK014実測図(1/60)



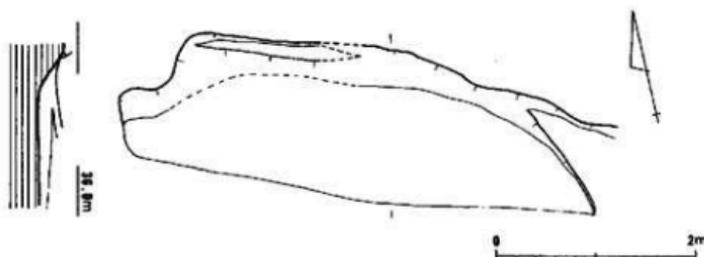
第42圖 SK013出土遺物實測圖(1/3、1/2)



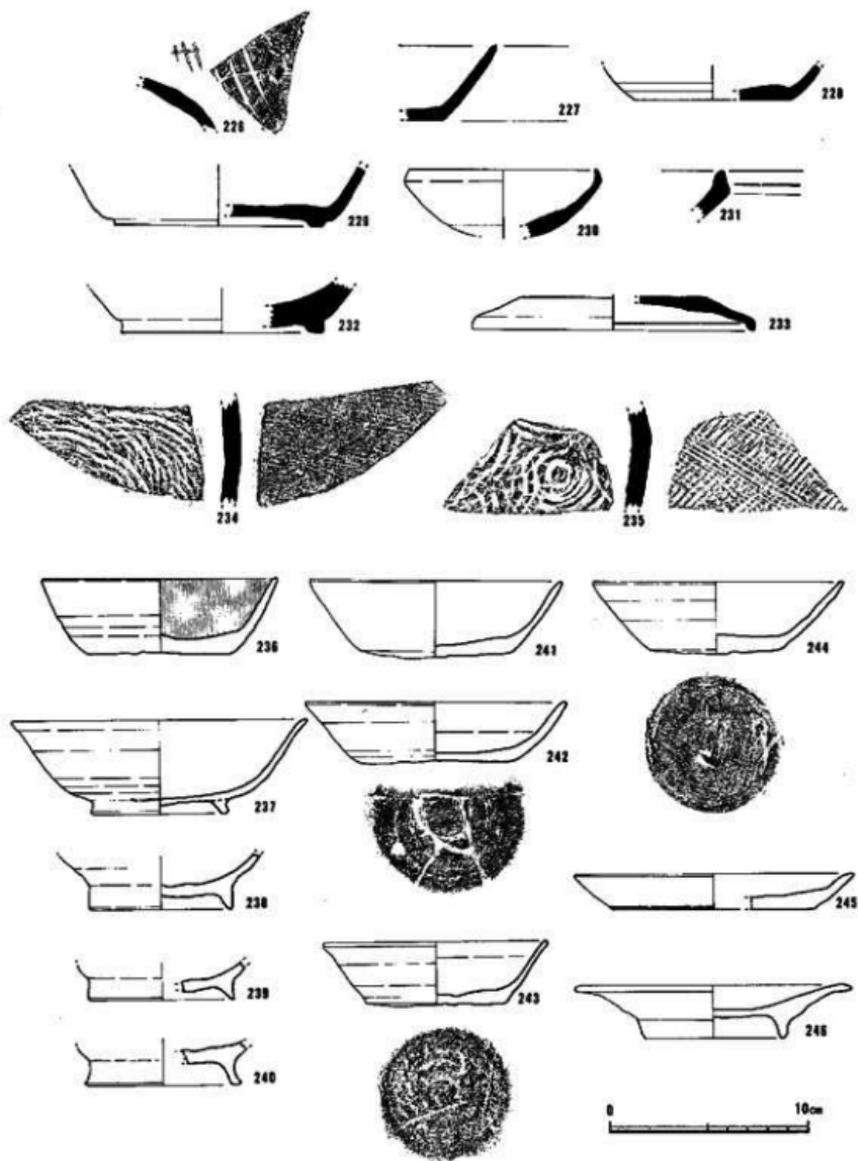
第43図 SK014出土遺物実測図(1/3)

11は外反する口縁を持ち、下部はやや丸みを持つ。胎土は精良である。212～214は甕である。213の外面の叩き痕はわずかに疑似格子目状のものが見られる。217は高環の環部か。218～220は蓋である。221は黒色土器の碗で内面は研摩調整を施す。外面は橙色を呈す。222～225は土師器である。222は環で、底は切り取りの後に削り調整。橙色を呈す。223は脚付きの環で橙色を呈す。224は環で淡明橙色を呈す。225は甕で外面は縦方向、内面口縁部は横方向の刷毛目調整、内面胴部は削り調整を施す。

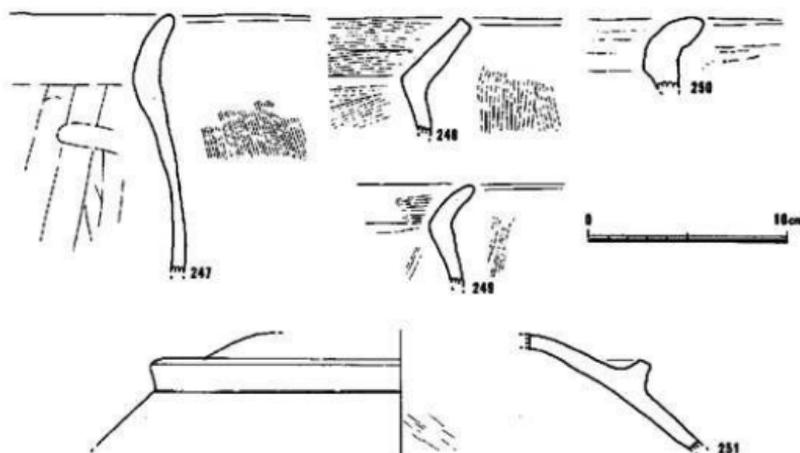
SK017(第44、45、46図) 調査区の南東隅で検出した土坑で南側に調査区外に延びる。覆土は灰色の粗砂で段落ち状になる可能性もある。226~246が出土した。226には3本の平行沈線に直行して1本の細線が描かれる。227、228は坏である。227は精良な胎土で直線的に延びる。228はやや丸みを持つ体部で器高は低いと思われる。229は低い高台を持ち、胎土は精良である。230は蓋があり復元径は確定的ではないが小ぶりの坏状を呈し口縁部がやや内傾して立ち上がる。胎土には多くの砂粒を含む。231は直立する口縁部を持つ甕と思われる。232は器壁が厚く安定しており壺の底部になると思われる。233は蓋で精良な胎土である。天井部は回転ヘラ削りを施す。234、235は甕の胴部である。胴部破片が多く出土しているため例として取り上げた。234は外面は刷毛目状の調整痕が、内面には同心円文状の当て具痕が残る。235は外面には平行叩き痕とその下に格子目状叩き痕が見られ、内面は同心円状の当て具痕が残る。236は黒色土器Aの坏で、回転ナテ調整を施し、内面底は別にナテる。外面底は粗れておりはっきりしないが切り放しの後調整を施す。237~251は土師器である。237は椀でやや丸みを持ち口縁部は外反する。器壁が薄い。粗れており調整は不明である。238~240は椀の脚である。241~244は坏である。全てヘラ切り底で241~242には板目痕がある。243は切り取り後の調整を施し、244はそのままである。245は皿で底にヘラ切り痕が残る。246は高台付きの皿で皿部は浅く開く。底にヘラ切り痕と板目が付く。247~249は甕である。247は口縁部は横ナテ、胴部外面は縦刷毛、内面は削り調整を施す。248は口縁部外面には横ナテ調整が残るが他は刷毛目調整である。明瞭な屈曲部を持つ。砂粒は少なく焼きが固い。249は内外面ともに刷毛目調整で軟質である。250は内面を削る。淡灰色を呈し、砂粒を多く含む。251は内傾する器壁に鐮状の突帯が廻る土器で、砂粒をほとんど含まない。ごく淡い橙色を呈す。内面にわずかに刷毛状の痕跡が見られ煤が付着する。外面にはわずかに砂粒の動きが見られる。他に少量の鉄滓が出土した。



第44図 SK017実測図(1/60)



第45图 SK017出土物实测图1(1/3)



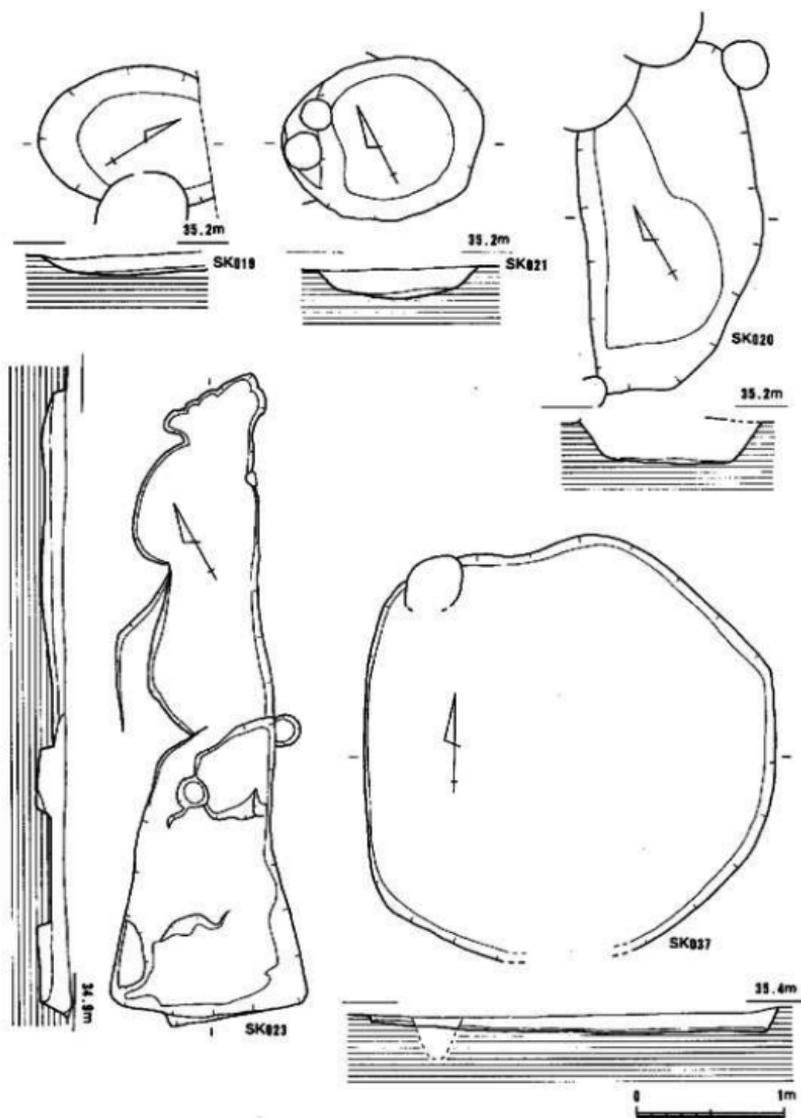
第48図 SK017出土遺物実測図2(1/3)

SK019(第47、48図) 調査区の北壁にかかる土坑で長軸1.1m、短軸0.9mを測る平面形は楕円形、断面摺鉢状を呈す。覆土は黒色粘質土である。252は土師器の甕で外面は縦方向の刷毛目調整で煤が付着する。内面は削り調整を施す。253は土師皿で回転ナテ調整で底はへら切りで後の調整は不明である。2/3が残存する。他に、須恵器の環蓋や、少量の鉄滓が出土した。

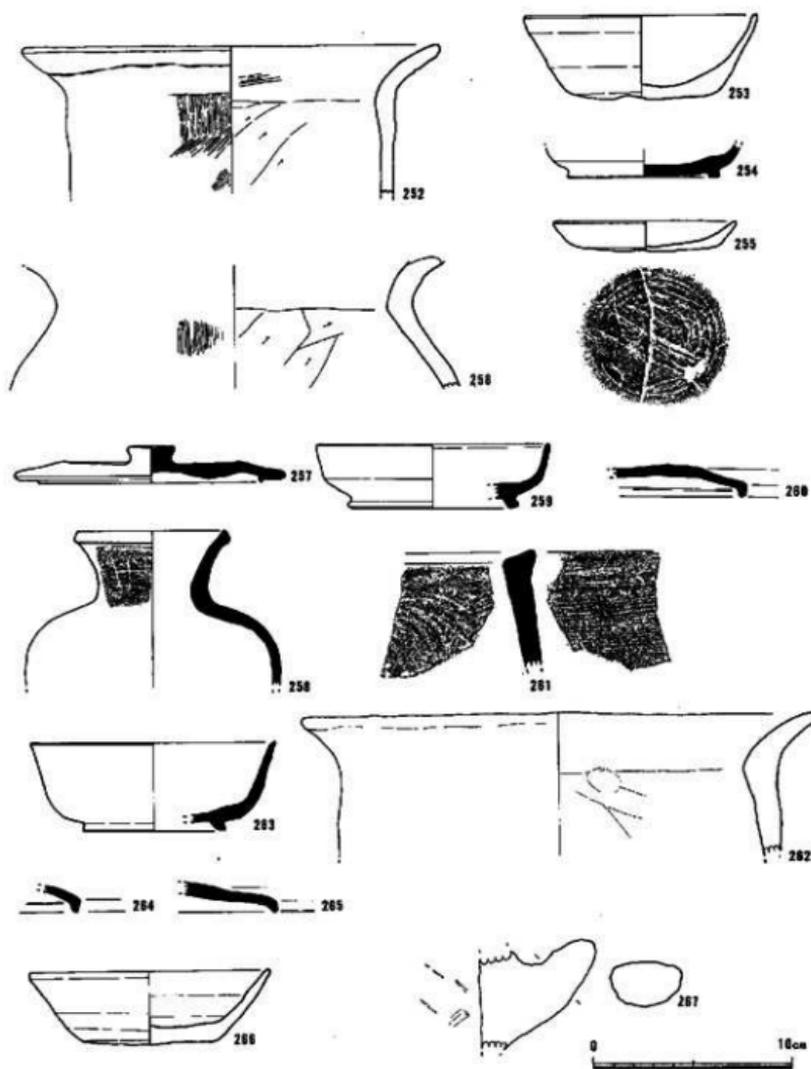
SK020(第47、48図) 調査区の北側中央やや西寄りで見出した。不整形の長方形の土坑で長軸2.4m短軸1.2m深さ28cmを測る。覆土は暗茶褐色土で柱掘形の覆土と類似する。254は須恵器の環である。鉄滓は1点出土した。

SK021(第47、48図) 調査区北側中央に位置する。SB068を切る。1.2m×1.3mの円形プランを呈す。覆土は黒色粘質土である。259が出土した。完形の土師皿で、精良な胎土で橙白色を呈し、底部にはへら切り痕をそのまま残し板目正板が付く。口径9.2cmを測る。この他須恵器の甕や土師器の環が出土している。

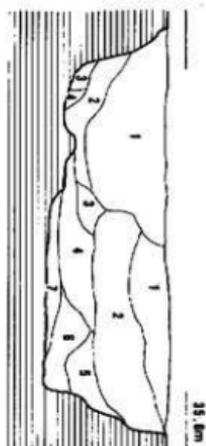
SK022(第48図) SB069の途中に東西に長い長方形の範囲に厚さ3cmに焼土を多く含む土が柱掘形に被っていた。SK021に切られる。256～258が出土した。256は土師器の甕で口縁部が欠ける。外面刷毛調整、内面刷毛調整を施す。257は須恵器の蓋で歪んでいる。細砂粒を多く含む暗灰色を呈す。258は須恵器の壺で回転なで調整を施す。頸部外面にへら記号が見られる。この他4cm大のスサ入りの炉壁が出土しているが、鉄滓は見あたらない。紛失した可能性もある。



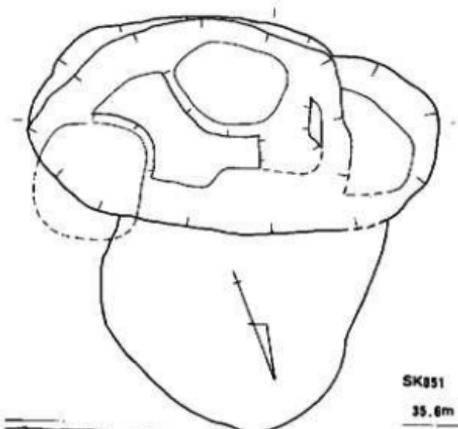
第47圖 SK019、021、023、027測量圖(1/40)



第48图 SK018、021、037、023出土遗物实测图(1/3)

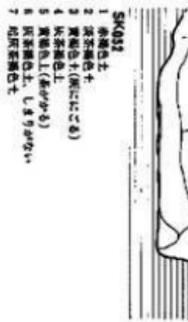


SK051
 1 埋藏層土
 2 赤褐色土
 3 灰赤褐色土、少砂土質土
 4 灰褐色、少砂土質土



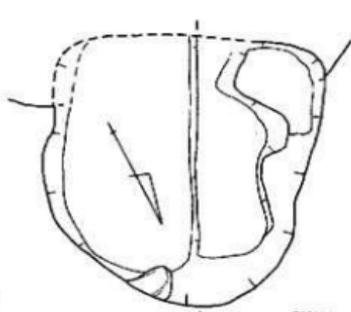
SK051

35.6m



SK052
 1 埋藏層土
 2 赤褐色土
 3 灰赤褐色土(灰赤褐色)
 4 灰赤褐色土
 5 灰褐色土(灰赤褐色)
 6 灰赤褐色土、少量砂土質
 7 埋藏層土

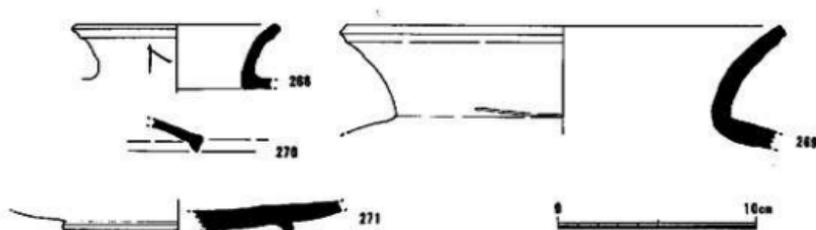
35.9m



SK052



第49図 SK051、052実測図(1/40)



第50図 SK051、052出土遺物実測図(1/3)

SK023(第47、48図) 調査区中央部で検出したくはみ状の遺構で、青灰色砂質土の地山に粗砂を多く含む灰色土が溜まる。259~261は須恵器である。259は環、260は蓋、261は口縁部として復元したが脚部の可能性もあろう。262は土師器の甕で外面ナデ調整、内面削り調整を施す。他に少量の鉄滓が出土した。

SK026(第47、48図) SK023と一連のものである。やや浅い。263は環、264、265は蓋でいずれも須恵器である。他に少量の鉄滓が出土した。

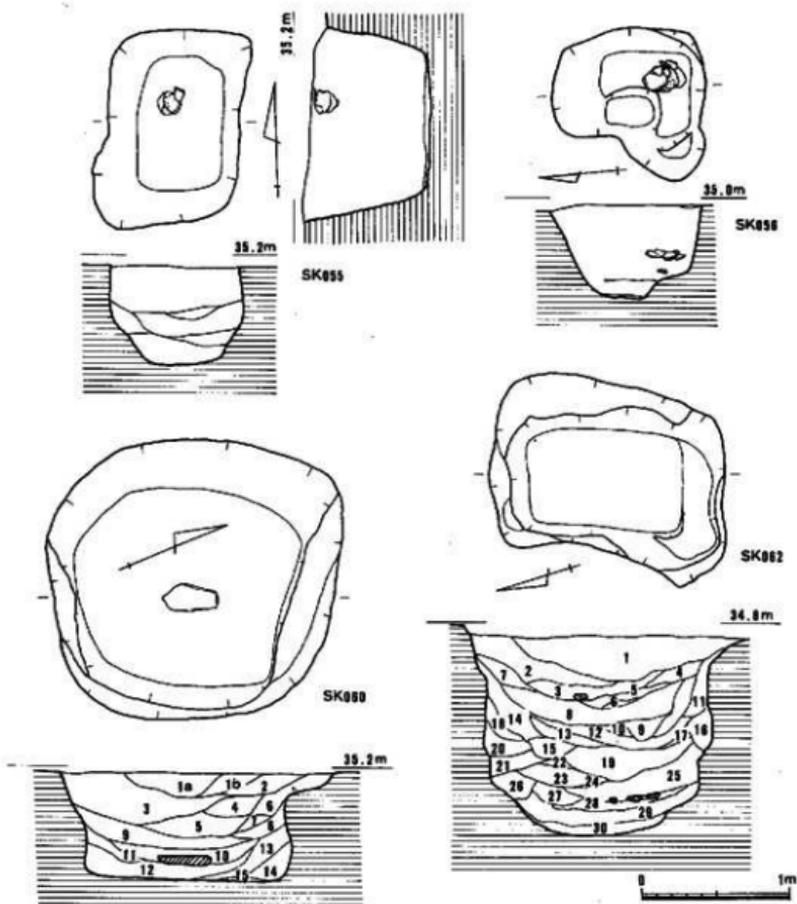
SK037(第47、48図) 調査区の南側で検出した3.7×3mの円形の土坑である。灰色の砂質土を覆土とする。266は土師器の環でヘラ切り未調整で板目圧痕が付く。この他、須恵器の環、蓋、土師器の環、椀、少量の鉄滓が出土した。

SK051(第49、50図) 第2面で検出した楕円形の土坑である。長軸2.7m、短軸1.5m、深さ0.6mを測る。SK052を切る。268~271の須恵器が出土した。268、269は甕である。268は頸部にヘラ記号状の細い沈線が入る。270は蓋である。271は土師器で大皿になるものか。胎土は精良で暗橙色を呈す。赤焼けの須恵器の可能性もあろう。この他土師器の甕片、少量の鉄滓が出土した。

SK052(第49、50図) SK051の北側に位置する不整形の土坑で2×1.8m、深さ0.85mを測る。東半は掘りすぎている。遺物は土師器の甕片らしきものがあるが弥生土器が多い。鉄滓が1点出土した。

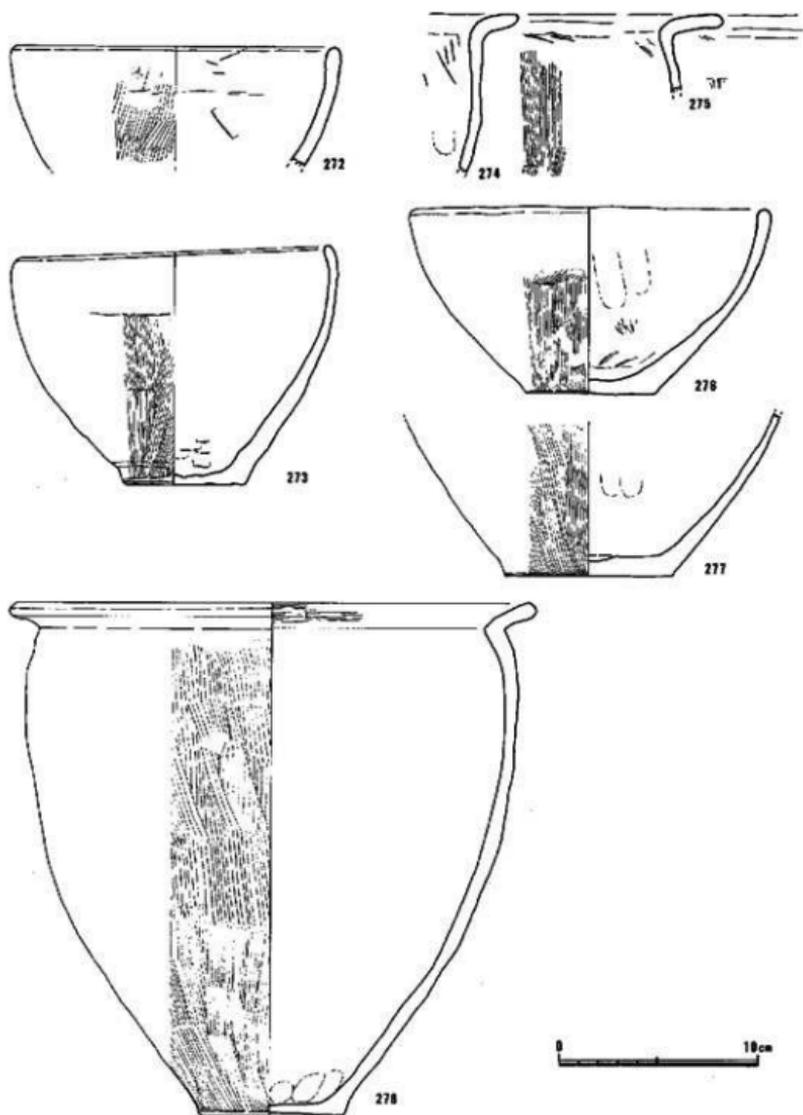
SK055(第48、52図) 第2面調査区南西隅で検出した。1.35×0.9m、深さ0.7mを測る長方形の土坑である。272、273が床からかなり浮いた状態で出土した。272と273は鉢で弥生中期のものである。口縁部を横ナデし、胴部外面は縦方向の刷毛目調整を施す。3mm大までの砂粒を含み橙色を呈す。273は鉢で口縁部は横ナデ、外面は刷毛目調整を施す。内面は刷毛調整をナデ消している。淡橙色を呈す。

SK058(第51、52図) 第2面調査区南西隅で検出した長方形の土坑で覆土中位に弥生土器274~278が出土した。274、275は逆L口縁の甕である。274は外面刷毛、内面ナデ調整を施し黄白

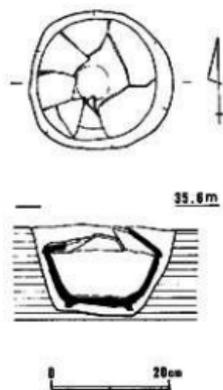


- | | | |
|-----------------------|------------------------|----------------|
| 1a 灰茶色砂質土 | 1 灰茶褐色土 | 15 明褐色土 |
| 1b 淡灰黄褐色シルト | 2 茶褐色粘質土 | 16 灰黄褐色土 |
| 2 暗茶褐色土 砂質がつよい | 3 茶褐色土 砂を多く含む | 17 明茶褐色土 |
| 3 暗茶褐色土 | 4 暗茶褐色粘質土 | 18 1dに近い 黄色がかる |
| 4 暗茶褐色土 (砂をほとんど含まない) | 5 黄褐色土 | 19 茶褐色土 しまりない |
| 5 暗茶褐色土 (やや青みをおびる・粘質) | 6 黄褐色粘質土 | 20 茶褐色土 |
| 6 暗茶褐色土 (砂質がつよい) | 7 暗赤色粘土 粘土が均一で少量の泥を含む | 21 淡茶褐色土 |
| 7 淡黄褐色土 やや砂質 | 8 暗褐色粘土 | 22 暗茶褐色土 |
| 8 淡灰褐色土 | 9 青みをおびた暗褐色粘土 (砂を多く含む) | 23 暗褐色土 |
| 9 暗灰褐色土 | 10 茶褐色土 砂を多く含む | 24 黄褐色砂質土 |
| 10 黒褐色粘土 | 11 黄褐色土 | 25 暗褐色土 23に同じ |
| 11 淡黄褐色シルト | 12 暗茶褐色土 | 26 淡黄褐色土 |
| 12 淡黄褐色粘土 | 13 暗茶褐色土 | 27 明黄褐色土 |
| 13 暗灰褐色粘質土 | 14 茶褐色土 (しまりがない) | 28 黄褐色砂質土 |
| 14 灰褐色土 やや黄がかる | | |
| 15 暗褐色粘土 | | |

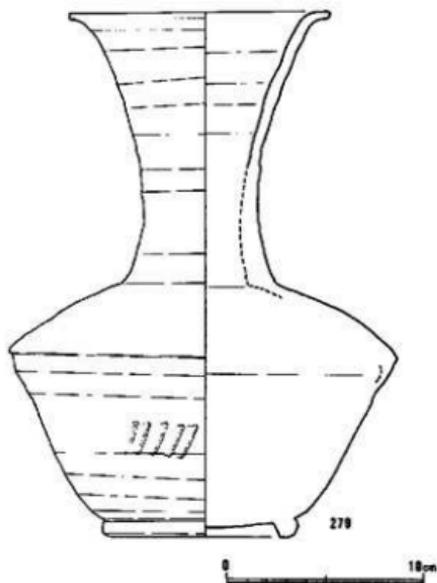
第51図 SK055、056、060、062実測図(1/40)



第52圖 SK055、056、076出土遺物實測圖 (1/3)



第53図 SK063実測図 (1/30)



第54図 SK063出土遺物実測図 (1/3)

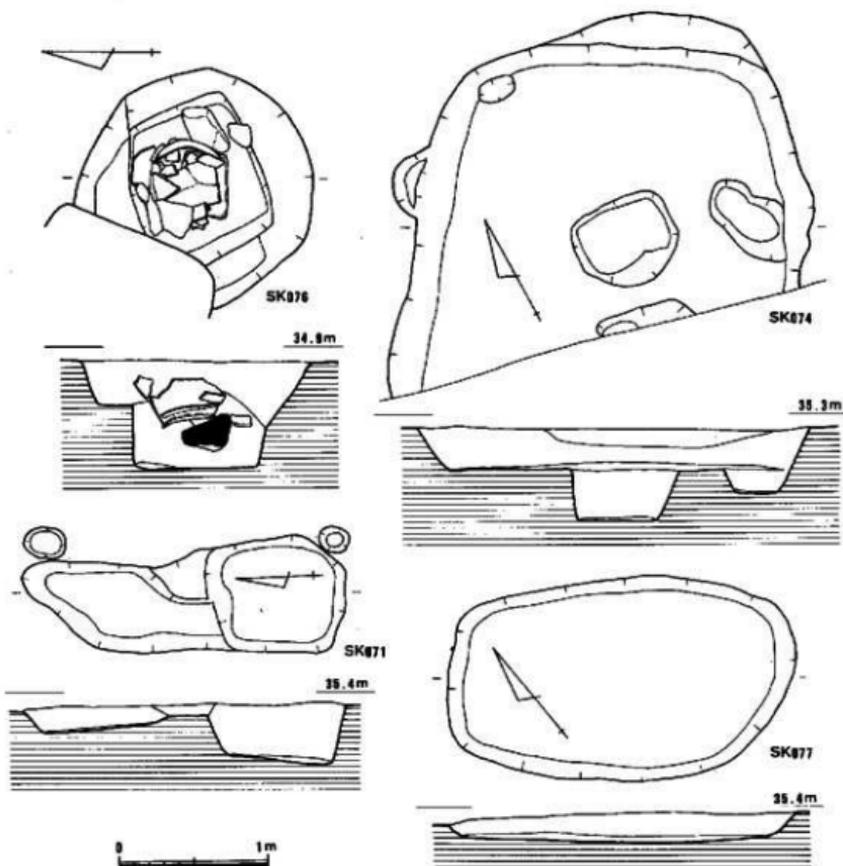
色を呈す。275はナデ調整で橙色を呈す。甕は煤の付いた胴部破片がある。276は鉢で口縁部を横ナデ、外面刷毛、内面刷毛の後ナデ調整で橙色を呈す。272と胎土、色調ともににており同一個体の可能性がある。

SK060 (第51図) 第2面の調査区南中央で検出した1.9×1.9m、深さ0.75mの隅丸方形の土坑である。砂質が強い覆土である。床面より少し浮いた状態で厚さ6cmの平らな石が出土している。遺物は縄文土器と思われる小片が出土したのみである。

SK062 (第51図) 第2面の調査区の北側SB070、SK020に切られる。1.5m×1m、深さ1.4mの長方形の土坑である。覆土は各層がレンズ状にたまる。8層は粘質の強い黒色土で異質である。一時滞水していたのではないだろうか。遺物は少なく縄文土器と思われる小片が出土したのみである。

SK063 (第54、55図) 調査区の中央部で検出した。須恵器の長頸壺が単体で出土した。出土状況図には示していないが頸部は胴部に落ちて出土している。掘方ははっきりせず岡には疑問がある。279は回転ナデで調整し、胴部下半はヘラ削り調整を施す。胎土は精良で砂粒は少ない。灰色を呈す。

SK071 (第55図) 第2面の調査区南部で検出した。北側が浅く、南側はピット状に深い。2つの遺構の切り合いの可能性もある。ピット状部分は0.9×0.8mを測る。覆土は暗褐色土である。



第55図 SK071, 074, 076, 077実測図 (1/40)

遺物は少なく弥生土器の小片が出土している。

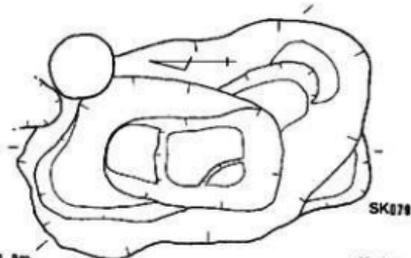
SK074(第52、55図) 第2面で調査区の南壁にかかる隅丸方形の土坑で調査区外に延びる。東西は2.2m、南北は2.5m以上深さ20cmを測る。中央には0.7m大のピットがある。黄灰褐色土を覆土とする。遺物は少なく土師器の坏と思われる小片1点と弥生土器が出土した。

SK076(第55図) 第2面の調査区西側中央でSB039に切られる土坑で弥生土器が半壊し倒置



SK076

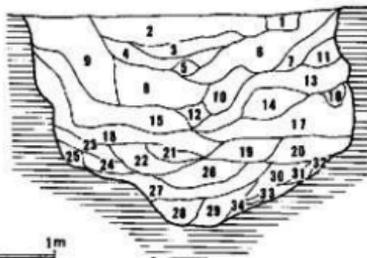
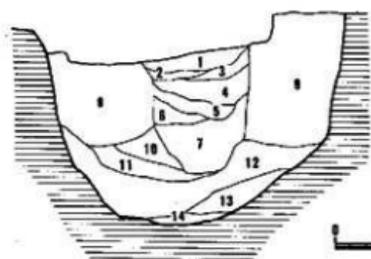
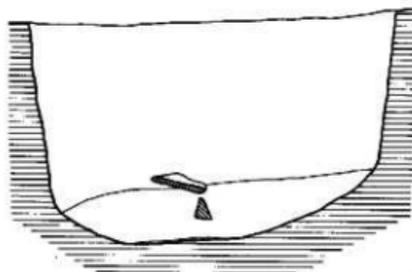
35.9m



SK079

35.9m

35.1m



0 1m

SK076

- 1 淡黄灰色土
- 2 淡灰褐色土 (黄色土ブロック入る)
- 3 黄褐色土
- 4 黄褐色土 (やや暗い)
- 5 淡黄褐色土
- 6 淡黄灰色土
- 7 暗灰色土 (1~7 ヒット順り方)
- 8 暗褐色土 焼土・炭を含む
- 9 灰土
- 10 暗灰色土
- 11 黄褐色土
- 12 淡茶灰色土
- 13 黄褐色土
- 14 淡茶色土

SK079

- 1 淡灰色 砂
- 2 暗灰褐色土
- 3 3に黄褐色土まざる
- 4 灰褐色土
- 5 黄褐色ブロック
- 6 灰褐色土
- 7 淡灰褐色土
- 8 灰褐色土上に
- 9 灰褐色土
- 10 灰褐色土
- 11 灰褐色土
- 12 暗灰色土
- 13 暗灰色土
- 14 灰褐色土
- 15 やや赤みをおびた灰色土

- 16 淡灰色土
- 17 淡灰褐色土に黄褐色土の小ブロック
- 18 暗灰褐色土
- 19 黄褐色土 pure
- 20 黄褐色土ややまざる
- 21 灰土上に黄ブロック多
- 22 灰褐色土
- 23 灰色土に多くの黄褐色土まざる
- 24 黄褐色土に少量の灰色土まざる
- 25 黄褐色土
- 26 黄褐色土
- 27 灰褐色土に黄褐色土まざる
- 28 淡灰褐色土と黄褐色の混土
- 29 黄褐色土
- 30 灰色土に黄褐色土まざる
- 31 灰褐色砂質土
- 32 黄褐色土
- 33 灰褐色砂質土
- 34 灰色土に黄褐色土まざる

第59図 SK076, 079実測図 (1/40)

した状態で出土した。その下には30cm大の礫が床から10cm浮いた状態で出土した。上部の掘方は1.6×1.6mの不整形であるが、下部は1.1×0.9mの方形を呈す。278が出土した。半壊していたが接合すると底部付近1/3を欠くがほぼ完形になった。逆L字口縁の口縁部を持つ甕である。外面は口縁部を横ナデ、胴部に縦方向の刷毛目調整を施す。内面は口縁部に刷毛目調整、胴部には斜方向の擦痕が残る。2mm大の砂粒を多く含む淡褐色を呈す。底部中央は器壁3mmと薄い。

SK077(第55図) 第2面の調査区東側で検出した楕円形の土坑である。2.3×1.4mを測る。覆土は灰色砂質土である。遺物は出土していない。

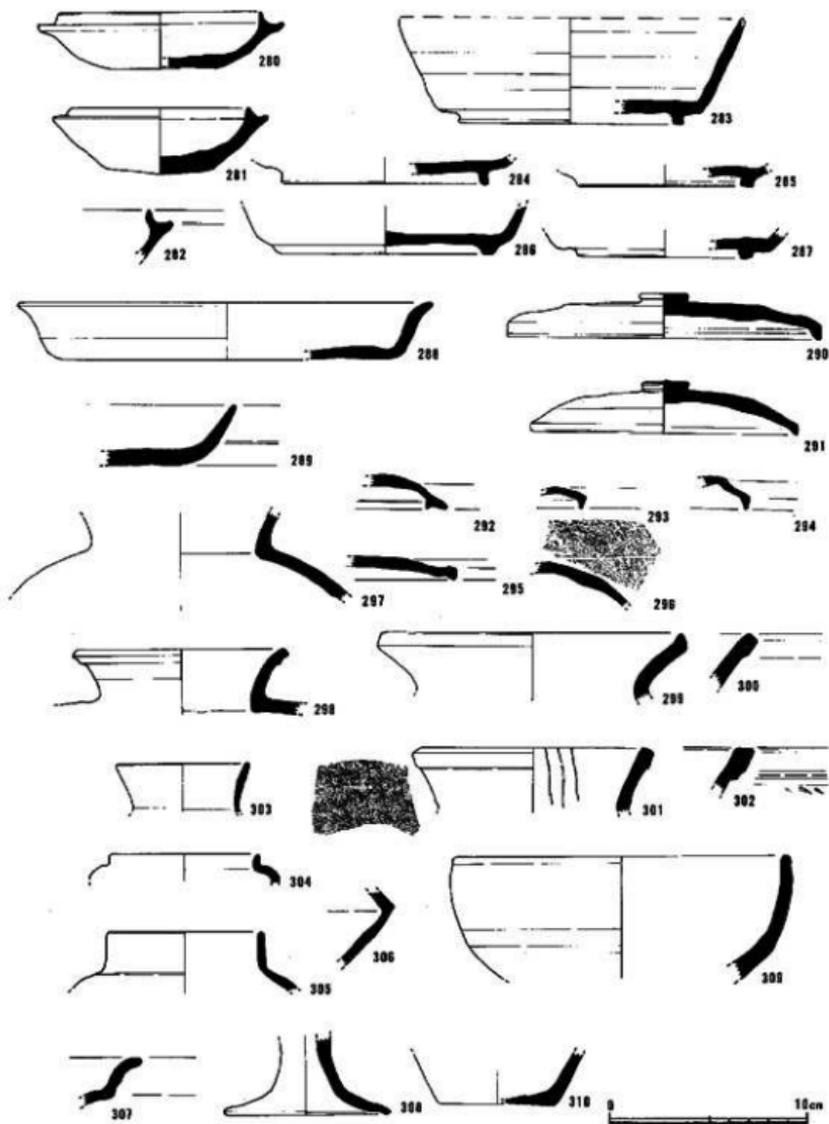
SK078(第56図) SB030-2を掘り下げる段階で検出した。2×2.5m、深さ1.5mの方形の土坑で底は狭まる。床より20~30cm浮いて礫が出土した。覆土は締まりがない。遺物は上部では柱掘形検出時に下げているため不明であるが、下部ではほとんど遺物は出土せず、縄文土器かと思われる小片が出土したのみである。

SK079(第56図) 第2面の調査区南部で検出した不整形の土坑である。2.4×1.4m、深さ1.9mを測る。覆土には締まりがない。遺物は出土していない。

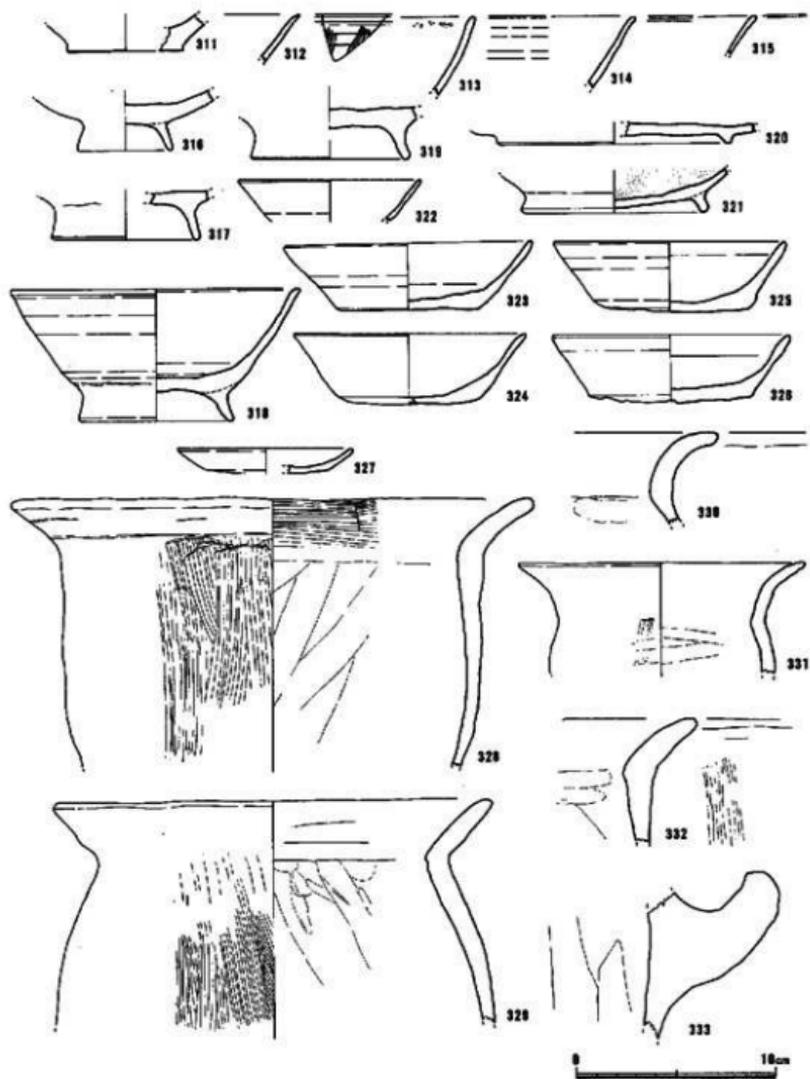
(6)ピット出土の遺物(第55-60図)

以上示した遺構の他に、多くのピットを検出している。第1面では北東側の孤立柱建物群の周囲に多く分布する。黒褐色土の地に砂が少し混じった暗褐色土を覆土としており検出困難であった。南側壁際で検出したものの覆土は灰褐色土であり、やや異なる。ほとんどのピットが遺物を出土しており、約400を数える。そのうちほとんどのピットで古代の遺物が出土している。規則的に並びそうなものもあるが建物を建てるまでには至っていない。第2面では、黄褐色土の地に黒褐色土を覆土とするピットを多く検出した。北東側では第一面と同様に多く検出し、南西側では密に重なり検出した。第1面の掘り残しもある。遺物が約400基から出土しており、古代の遺物、鉄滓が出土したものについては全体図では第1面に加えた。第1面のピットはほとんどのものから古代の遺物が出土しており、少なくとも北東側に関してはかなり第1面で検出したピット群と区別できたものと思われる。中にはシミ状のものもある。以下出土遺物を一括して示す。

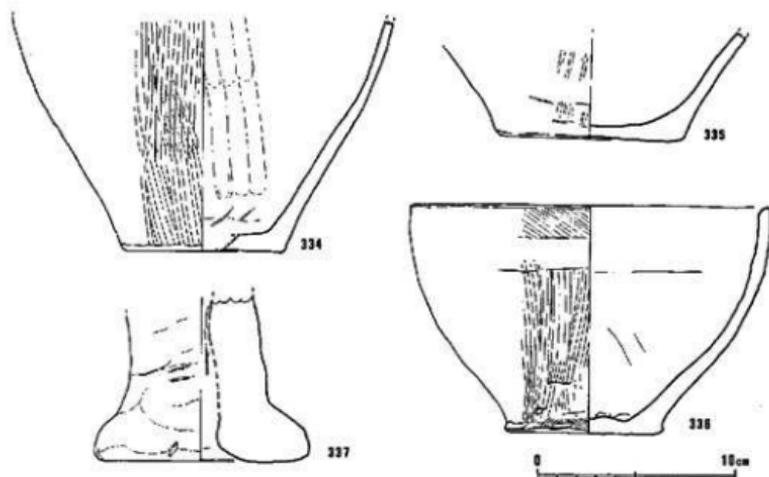
280~310は須恵器である。280~282はかえりを持つ坏身で280は底部にヘラ削りを施し、281はヘラ切りのままである。283~287は高台付きの坏である。底部はヘラ切り後に削り等の調整を施すが、286は粗くヘラ切り底が残る。287は精良な胎土で作りも丁寧である。288、289は皿でいずれも胎土が精良でヘラ切りの後288は削り、289はナデ調整を施す。290~296は蓋である。297~302は甕である。298は頸部の弧が内面の回転ナデの弧とずれるが掻き目もない。301は内面に浅い沈線が入るが、ヘラ記号ではない。303~306は壺である。304は短頸壺で胎土は精良



第57図 ビット出土遺物実測図1 (1/3)

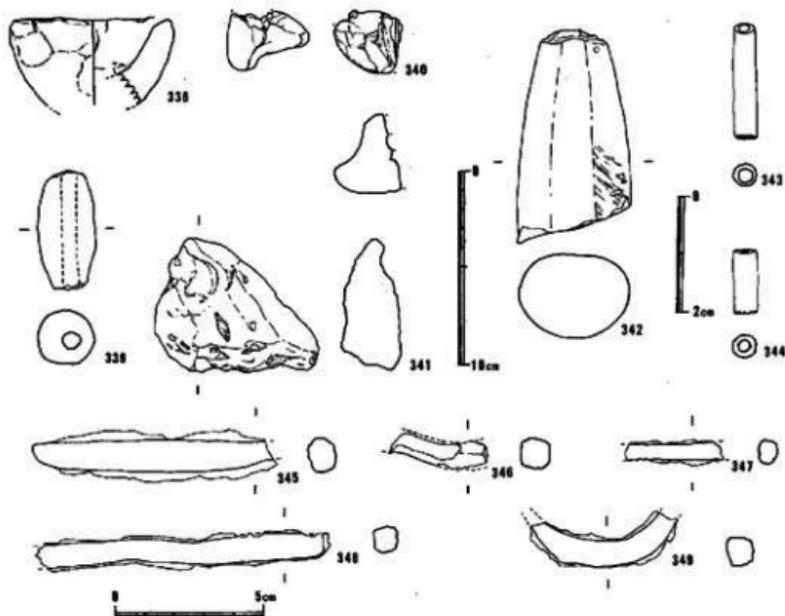


第58図 ビット出土遺物実測図2 (1/3)



第59図 ビット出土遺物実測図3 (1/3)

で淡灰色である。306は長頸壺の胴部屈曲部で淡灰色を呈す。307は屈曲し外に立ち上がる口縁部が外反する。天地逆とも考えられるが口縁部として図示した。308は高杯の脚部で灰白色を呈すが、灰かぶりによりまだら状になる。309は鉢で下部はカキ目を施す。外面はやや紫がかった灰色を呈す。310は底部で精良な胎土である。底部は回転ヘラ削りを施す。311は越州窯青磁碗の底部で、円盤状を呈しやや上げ底風である。312は白磁V類で体部外面に櫛目文を入れる。わずかに青色を呈した乳白色を呈す。313は白磁で気泡が目立つ。314、315は、青磁で深い緑色を呈す。316～319は土師器の碗である。320は盤か。橙色を呈す。321は黒色土器Aの碗で底にはへら切り板目圧痕が残る。322～326はへら切り底の杯である。323、325は完形で口径12.6、11.7cmを測る。327は土師器の皿で精良な胎土で黄白色を呈す。へら切り底で板目圧痕がわずかに残る。328～333は土師器の甕または甌である。いずれも外面を刷毛目調整、内面はへら削りである。333は取手で橙色を呈す。334～336は弥生土器である。334、335は甕の底部で外面は縦方向の刷毛目調整を施す。334は内面に指圧痕が見られる。336は鉢で口縁部を斜方向の刷毛目調整の後横ナデを施す。黄灰白色を呈す。337は支脚である。土は細かく均一で焼きは固い。338は手すくねの土器で指頭痕、爪の跡が見られる。金雲母を多く含む。339は土懸

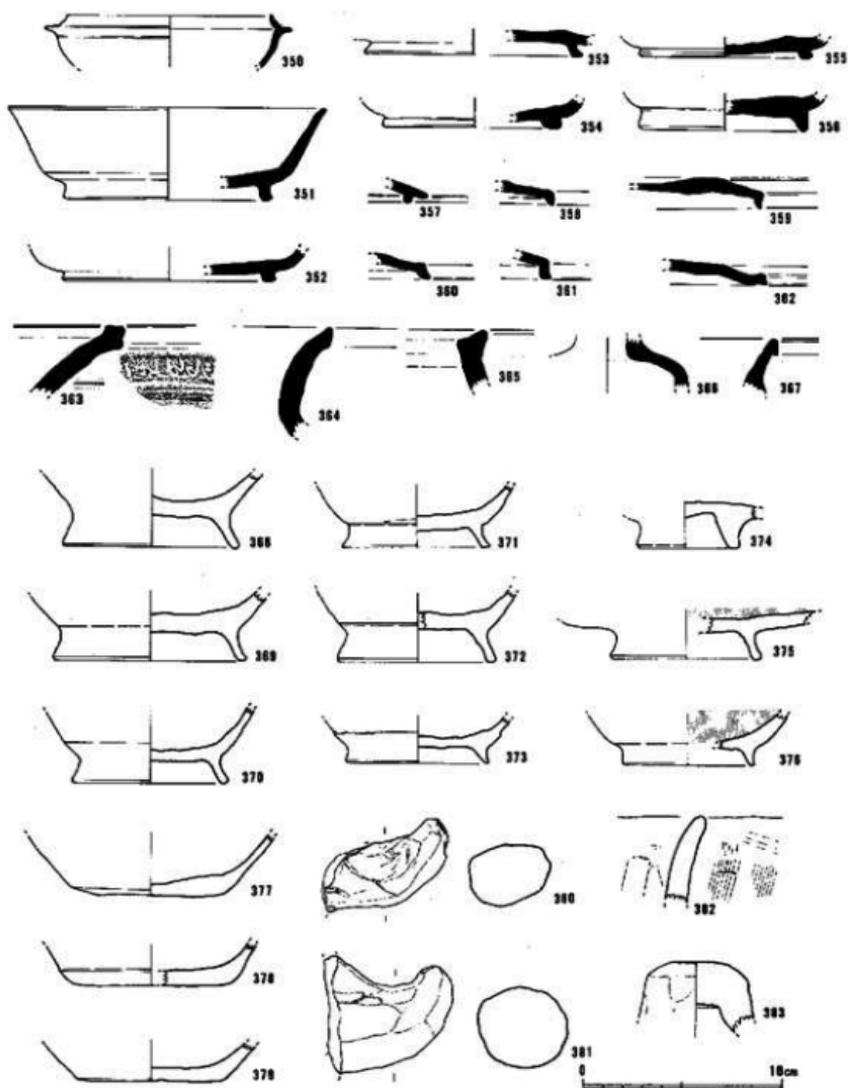


第60図 ビット出土遺物実測図4 (1/3、1/2、1/1)

で淡灰色を呈す。15gを計る。340は手すくねの土製品で断面を示した上部はつまみ状で指頭痕が残り斜方向に5mm幅の穴が通る。下部は丸く滑らかである。341は不整形の土製品で3mm大の砂粒を含む。表面に5mm大までのくぼみが多く見られる。342は玄武岩製の磨製石斧で表面は滑らかである。343、344は管玉で碧玉製と思われる。345-349は鉄製品である。344は刀子と思われる。342は断面方形でやや曲がる。348は断面幅1cmの方形を呈す。刀子か。349は幅5mmで曲がっており、片側は先細りするようである。

(7) トレンチ出土の遺物(第61図)

調査区東北部の黒褐色土面の下の層に当る暗灰色上を除去して遺構検出を行った際、レベルが落ちる調査区中央は灰褐色土が堆積しており黒褐色土が出ていなかった。そこで5本のトレンチを設けた。この落ちは2面めで確認できた河川のくぼみによるものである。この河川と黒褐色土の面の遺構との関係は層的には不明である。結果的にこれらのトレンチ出土の遺物は中



第01図 トレンチ出土遺物実測図 (1/3)

夾の河川状の落ちから出土したものである。この堆積の上では造構らしい造構を検出していないので、造構にともなう整地層ではない。しかしこの窪地が埋まる時期を表すであろう。以下簡単にトレンチ出土の遺物を示す。350～367は須恵器である。350は瓶身で器壁が薄い。2mm大の砂粒を含む。351～356は椀である。354は精良な胎土である。355と356は内面を回転ナデ調整で仕上げナデ調整はみられない。357～362は蓋である。359は天井部にヘラ削りを施す。362は生焼けで灰白を呈し、軟質である。363、364は甕の口縁である。363は頸部の浅い沈線の上にJ字状のヘラ描きを繰り返す、波状文を施す。364は回転ナデ調整を施し、内面には自然釉がかかる。櫛描き状の沈線がみられる。365は内傾する口縁部を持ち、胴部が張る鉢状の器形になるものか。外面はヘラ状工具によるナデ調整か。366は甕と思われる。灰白色を呈す。367は甕または壺の口縁部である。細砂粒を含み暗灰色を呈す。368～374は土師器の椀である。全て内面は回転ナデ調整のみである。371には底部外面に削り調整が残る。他はナデ調整を施し、ヘラ切り痕が残るものはない。370の疊付きには3mm幅の圧痕が残る。373は底部外面はヘラ切り末調整である。灰白色を呈す。374は大型の環になるものか。375と376は黒色土器Aである。375は橙白色を呈し軟質である。375は椀で外面は淡橙色を呈す。377～379は土師器の環である。377は切り出し方法は削り調整のため不明だが板目を残し、内面にナデ調整を施す。378は器面が粗れており調整不明だが、板目がみられる。379はヘラ切り痕がそのまま残る。380と381は甕の取手である。382は外面は刷毛目調整、内面は削り調整を施す。やや外反する口縁を持つ。383は支脚状になるものか。2mmまでの砂粒を含み、淡灰黄色を呈す。2次焼成は受けていない。

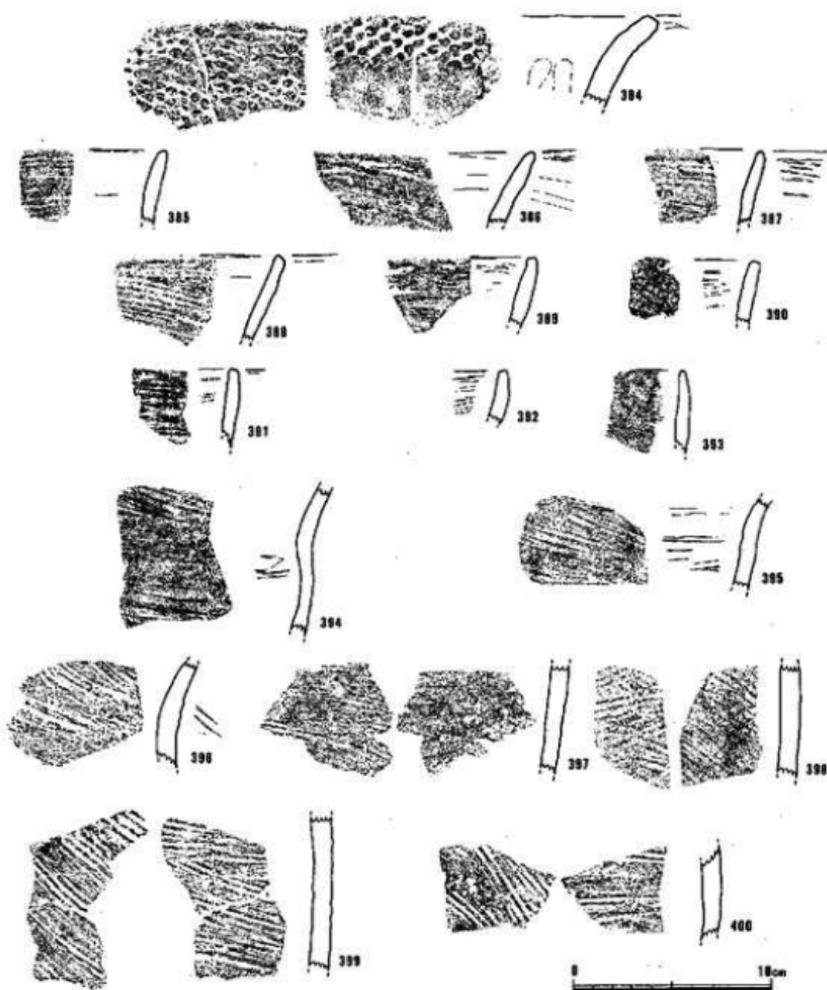
(8) 包含層出土遺物(第62～76図)

遺構検出時、遺構出土の遺物で明らかに混じり込みと思われるもの、段落等から出土した遺物を一括して示す。縄文土器に関してはピット出土の遺物も含む。

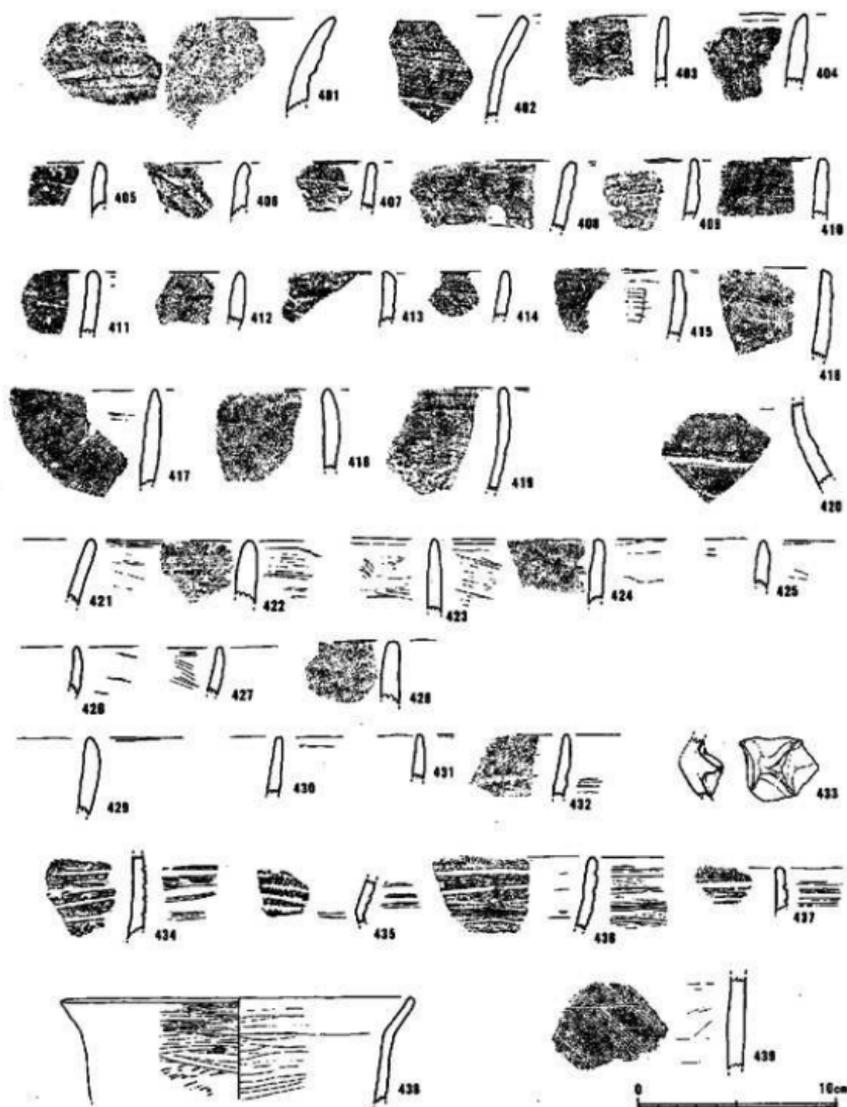
384～487は縄文時代の土器である。

384は楕円押型文土器である。2mmまでの砂粒を多く含む、淡黄褐色を呈す。

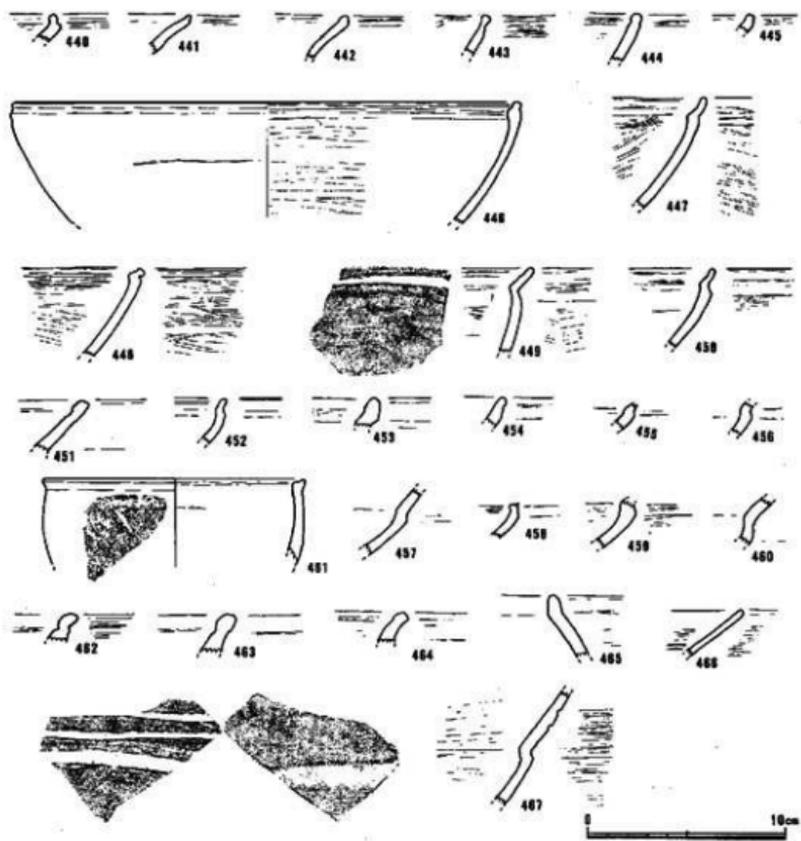
385～373は器面調整に糸痕を施す。いずれも砂粒を多く含む粗製土器で397、399、400が赤茶色を呈する他は淡灰橙色から灰褐色を呈す。390、391、394は糸痕の後にナデ調整を施し比較的器面は平滑である。内面は390、392、395、397、399、400は糸痕調整痕がみられ、387、389、391、394、397は板目状の擦痕が残る。386は幅7mmの削りを施す。その他はナデ調整である。小片のため器形はわかりづらいが、385～387、394～396は外反し開口縁を持つと思われる。その他は直口する深鉢になる。401～421は削り調整による調整を施す。そのうち228～416は後にナデ消す。内面は420に糸痕がみられる他は408は焼成後に外面から穿孔する。429～432はナデ調整である。433は鉢のナデ調整を施す屈曲部に付くりボン状の突起である。434～437



第62图 包含层出土遗物实例图1 (1/3)

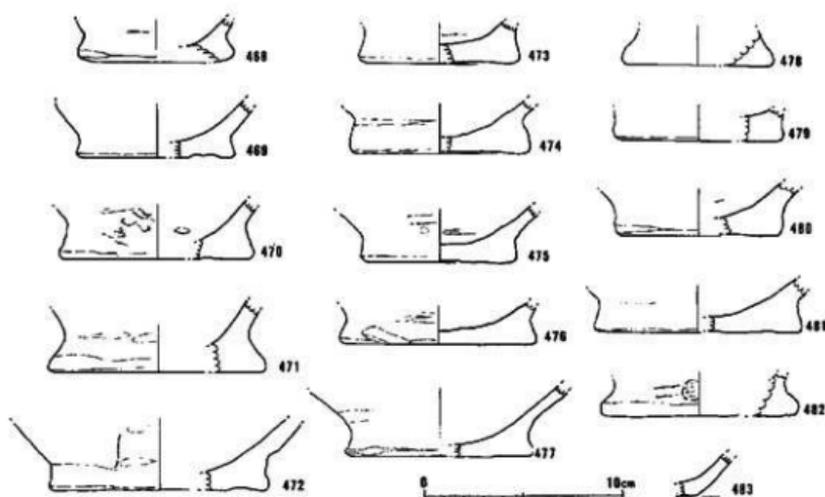


第83图 包含層出土遺物実測图2 (1/3)



第64図 包含層出土遺物実測図3 (1/3)

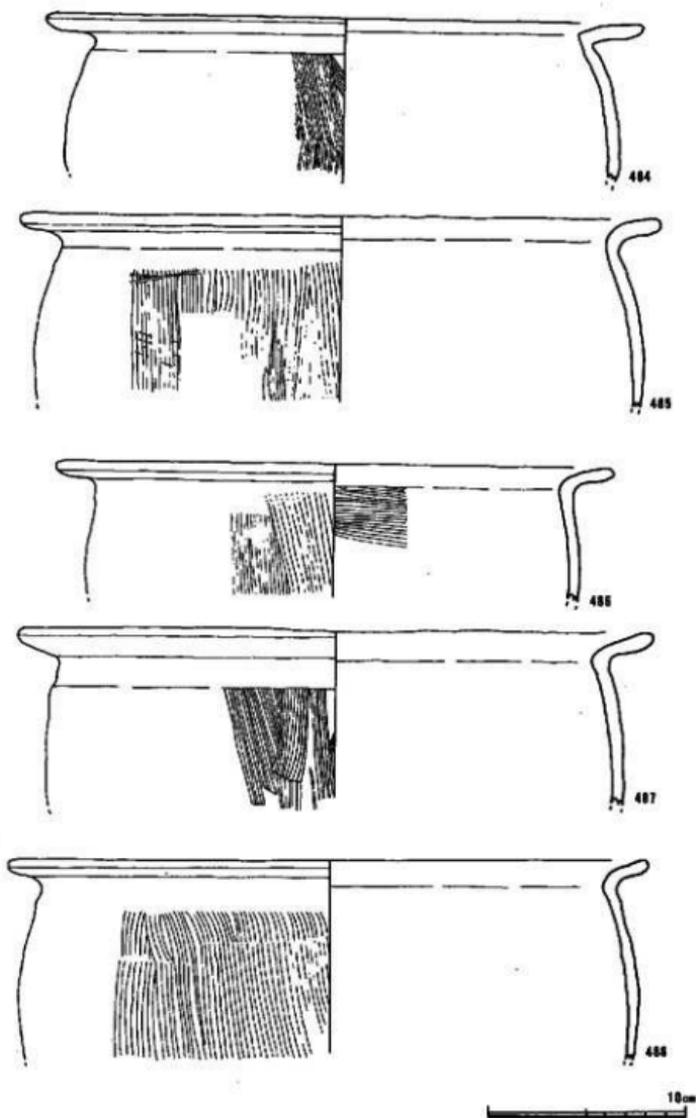
は幅広い口縁帯に沈線を施す。深鉢または鉢になるものと思われる。438は内外面ともに研摩調整を施し平滑な器面であるが光沢はない。439には外面に細く鋭い沈線で斜格子文を描く。440~467は研摩調整を主体とした精製土器である。440~442は外反する長い頸部に口縁帯が付く。443は口縁直下内外面がくぼみ状の凹線により薄くなる。447は口縁部に沈線を施し胴部は椀状になるものである。446~454は屈曲する口縁部に、椀形の胴部を持つ。455~460は屈曲す



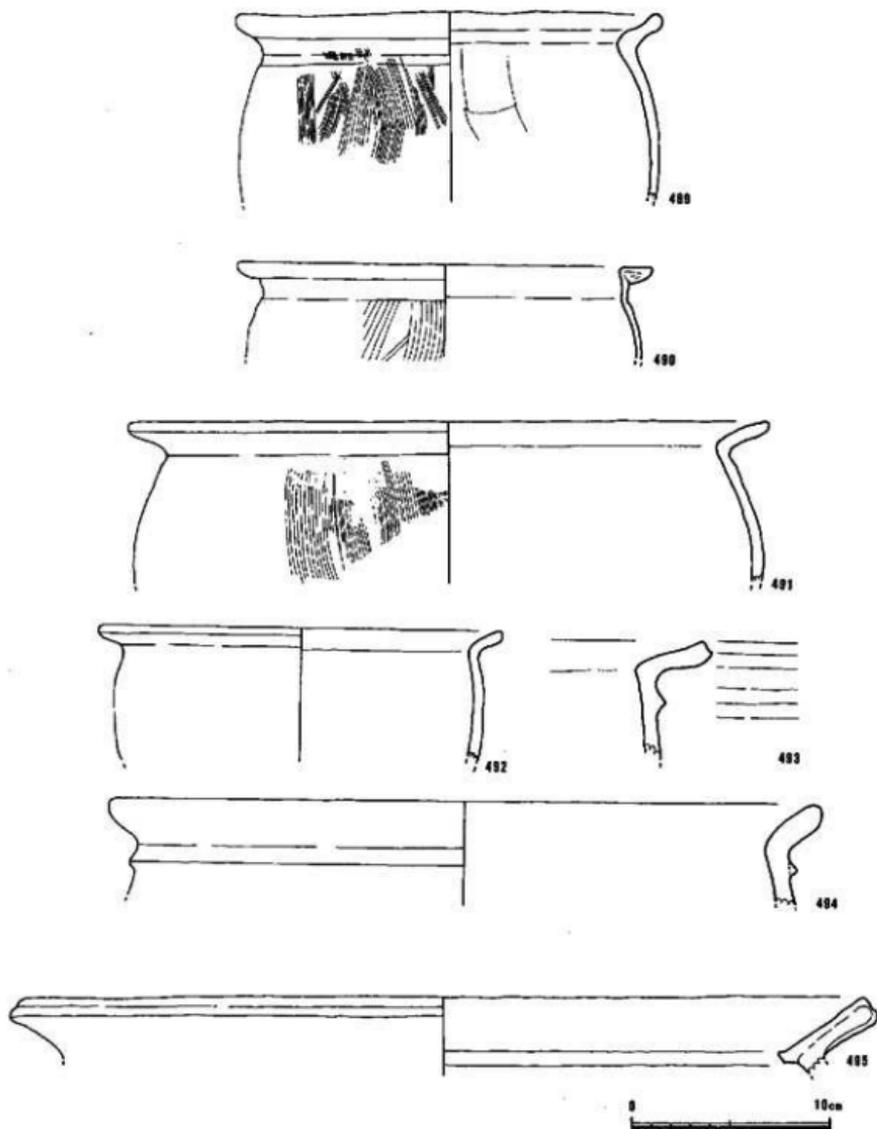
第65図 包含層出土遺物実測図4 (1/3)

る胴部である。452は器面が粗れており調整は不明である。やや胴部が張る器形を持つ。462～464は短い頸部に球形の胴部を持つものである。465は器面が粗れる。球形の胴部を持つ。466は直口する薄い器壁を持ち、内面に沈線を施す。それより傾きを復元したが、疑問が残る。467は波状口縁になるものと思われる。沈線、段の部分に赤色顔料が僅かに残る。468～482は深鉢の底部でいずれも台形を呈す。474はナデ調整により若干上げ底になる。483は器壁が薄目で若干上げ底である。

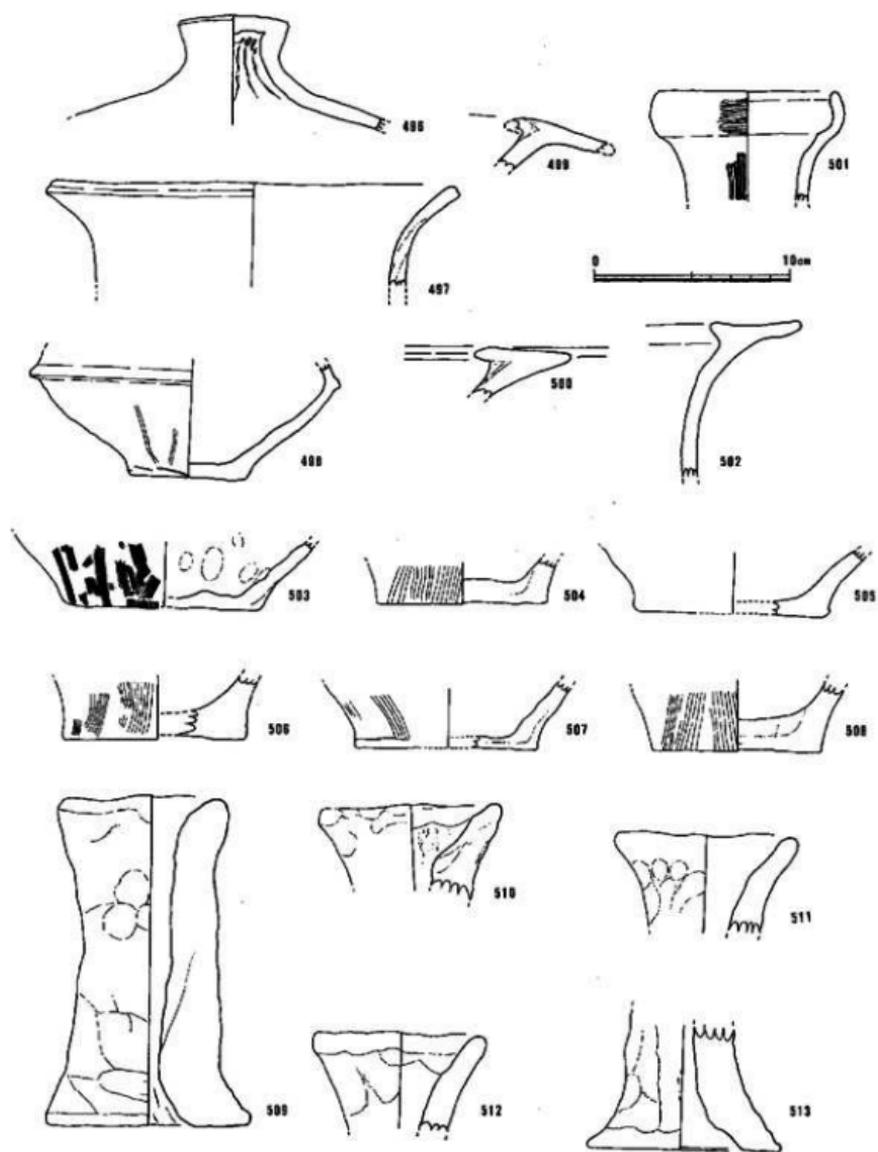
454～513は全て弥生土器である。484～495までは甕の口縁部付近である。外面くびれ部より下には概ね縦方向の刷毛目が見られる。口縁部は横方向のナデであり、内面も横方向のナデが施されるものが多いが、486は外面と同じ工具による縦方向のナデがみられる。489は外面にはすすが付着し、内面は板状工具によるナデ(削り?)が施されるが、木目等は剥離のために観察できない。489は内面には削りの痕跡を残す。体部と口縁くびれ部にすすが付着する。490は口縁部を外側に折り曲げて三角状の口縁をつくりだす。496は蓋であり、内面頂部付近には爪形が残る。赤褐色で若干長石等を含む。497は口縁が朝顔形に開く壺の口縁部であり、外面は横方向にナデを施した後、外面は丹塗りで仕上げている。暗文はみられない。内面は一部に赤色



第88图 包舍层出土文物实例图5 (1/3)



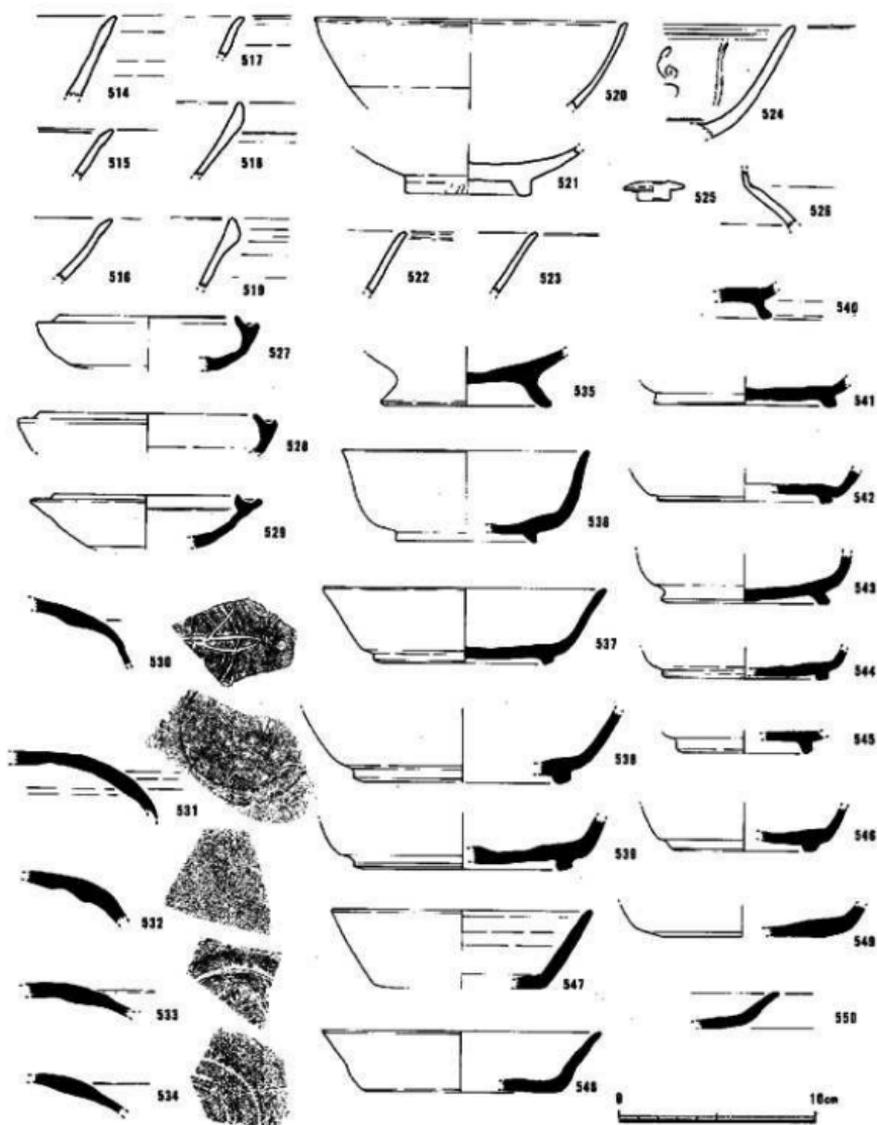
第67图 包舍层出土物实例图6 (1/3)



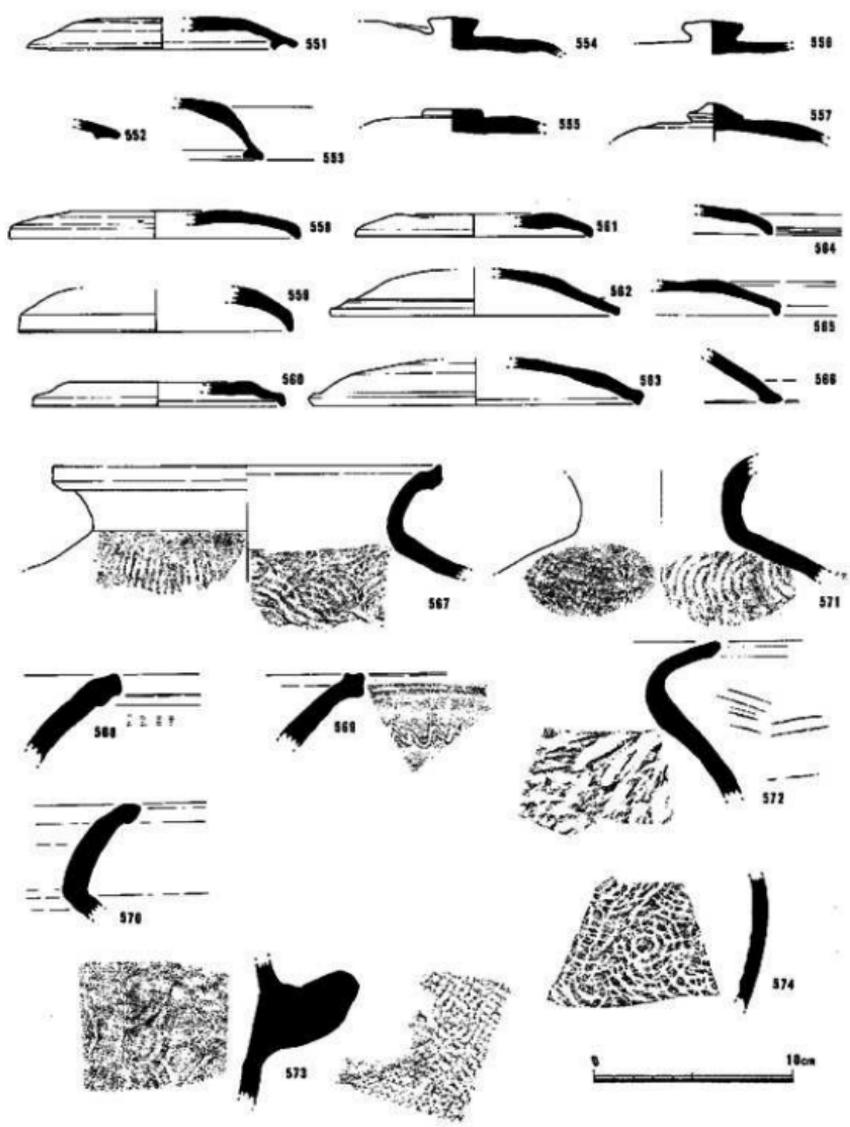
第88图 包官层出土遗物实例图7 (1/3)

顔料が付着している。498は長頸壺の胴部で外面はかなり剝離しているがもとは丹塗りが施されていたものである。内面の調整は不明である。501は袋状口縁壺の口縁部である。外面は丹塗りで、口縁部は横方向の、頸部は縦方向に研磨している。口縁部内面にも丹が垂れており、一部頸部内面にも付着している。胎土は赤褐色であり、硬質であるがやや砂粒が多い。502は鋤先状口縁をもつ壺の口縁部である。外面・口縁上面は先に横方向のナデを施し、後に丹塗りをを行う。剝離が著しく、詳細は不明である。内面の調整も不明である。500・502は鋤先状口縁をもつ高杯の口縁部である。500は内外面共に丹塗りを施すが剝離がはげしく、調整等は不明である。502には丹塗りの痕跡はない。503・505・507は壺の、504・506・508は甕の底部と思われるが小破片であるために区別は困難である。501は内面に指頭痕がみられる。509～513は器台である。外面は指頭痕や強いナデ痕が見られ、削りはみられない。しかし口縁部内面や底面では削りを施している。

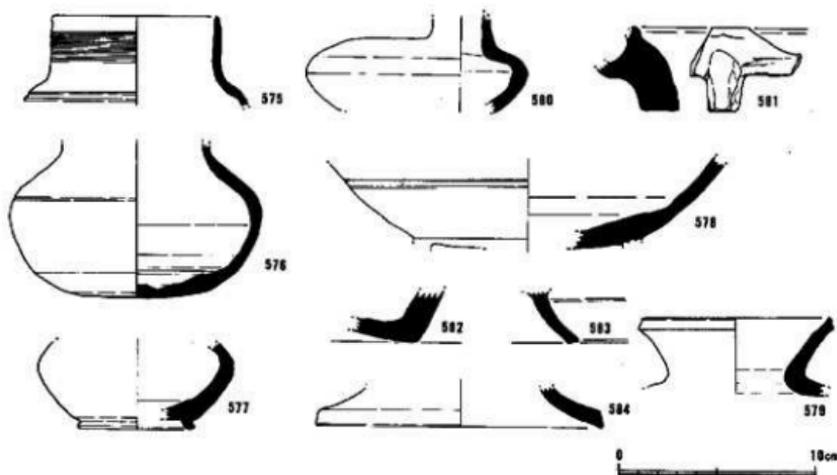
514～516は越州窯青磁でやや緑色を帯びた淡灰色を呈す。発色が悪い。517～521は白磁の碗である。518、519は玉縁の口縁部を持つ。519の外面には小さな気泡がみられる。520は口縁部をわずかに外反させ端部を丸くする。淡い緑灰色を呈す。521は高台部は露胎で淡い緑灰色の釉をかける。522、523は緑釉陶器で黄緑色の釉が剥げかける。同一個体の可能性がある。531は龍泉窯系青磁で深い緑色を呈す。貫入はみられない。525は上部のみに淡青緑色の釉がかかる。526は外面に深い緑色の釉がかかる陶器である。527～579は須恵器である527～529は坏身で受け部に返りを持つ。527は底にへら削りがみられる。他は小片でもあり不明である。530～534はへら記号を持つ。天地は不明なものもある。535～546は碗である。いずれも破片資料であり復元して掲示している。535は脚部が長く外に張り出し土師器の形態に似る。539以外は回転ナデ調整の後にナデ調整を施す。541は1mm大の砂粒を多く含み目立つ。焼きが甘く内面は淡茶色を呈す。底部外面には板目状の痕跡があるが定かではない。539、546は底部から体部への立ち上がりが屈曲し稜線がみられる。547～550は皿である。547は底部にサスの圧痕もしくは擦痕風の痕跡がみられる。549は生焼けて内外面ともに茶褐色を呈す。器壁の中心のみ還元し暗灰色を呈す。底部外面は回転へら削りを施す。内面には回転ナデの後にナデ調整を施す。551～566は蓋である。小片で観察できないもの以外は天井部は削り調整を施し、内面はナデ調整を施す。559は外面は灰被りで黄緑色を呈す。562は内面に灰を被る。内面を上にして焼成したものか。外面口縁部には断面三角形の細い突帯を貼付する。2mm大の砂粒を含む。563は外面口縁部以外は焼きが甘く、灰白色を呈す。556は生焼けて灰白色を呈す。557は3mm大までの砂粒を多く含み目立つ。567～572は甕である。567は生焼けて黄灰白色を呈す。外面には平行引き、内面には同心円の当て具痕が残る。568も生焼けて淡褐色を呈す。回転ナデ調整を施し、外面口縁部下には短い板目状の文様を断続的に施すが、器面が粗れているためはっきりとは見えない。569は口縁下にへら描き波状文を施す。570は回転ナデ調整を施し、内面には当て具痕がわ



第69图 包舍层出土物实测图(1/3)



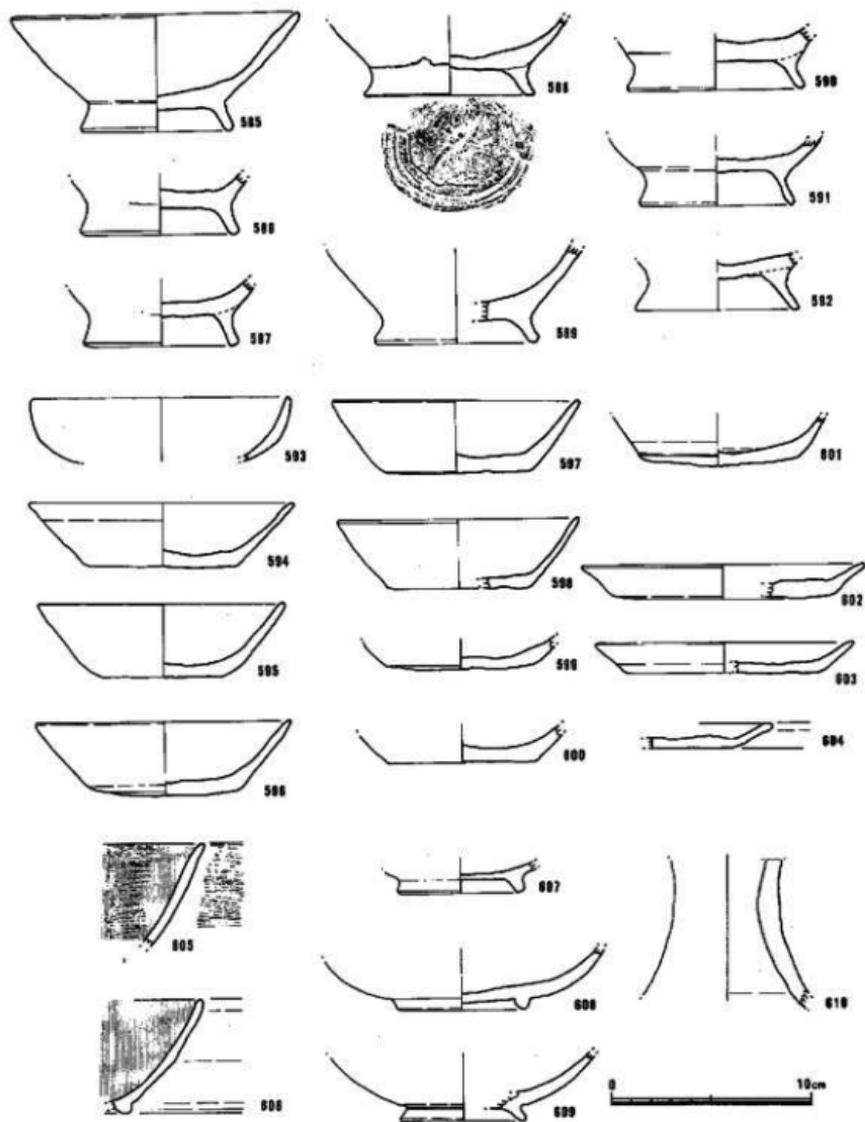
第78图 包舍层出土遗物实测图9 (1/3)



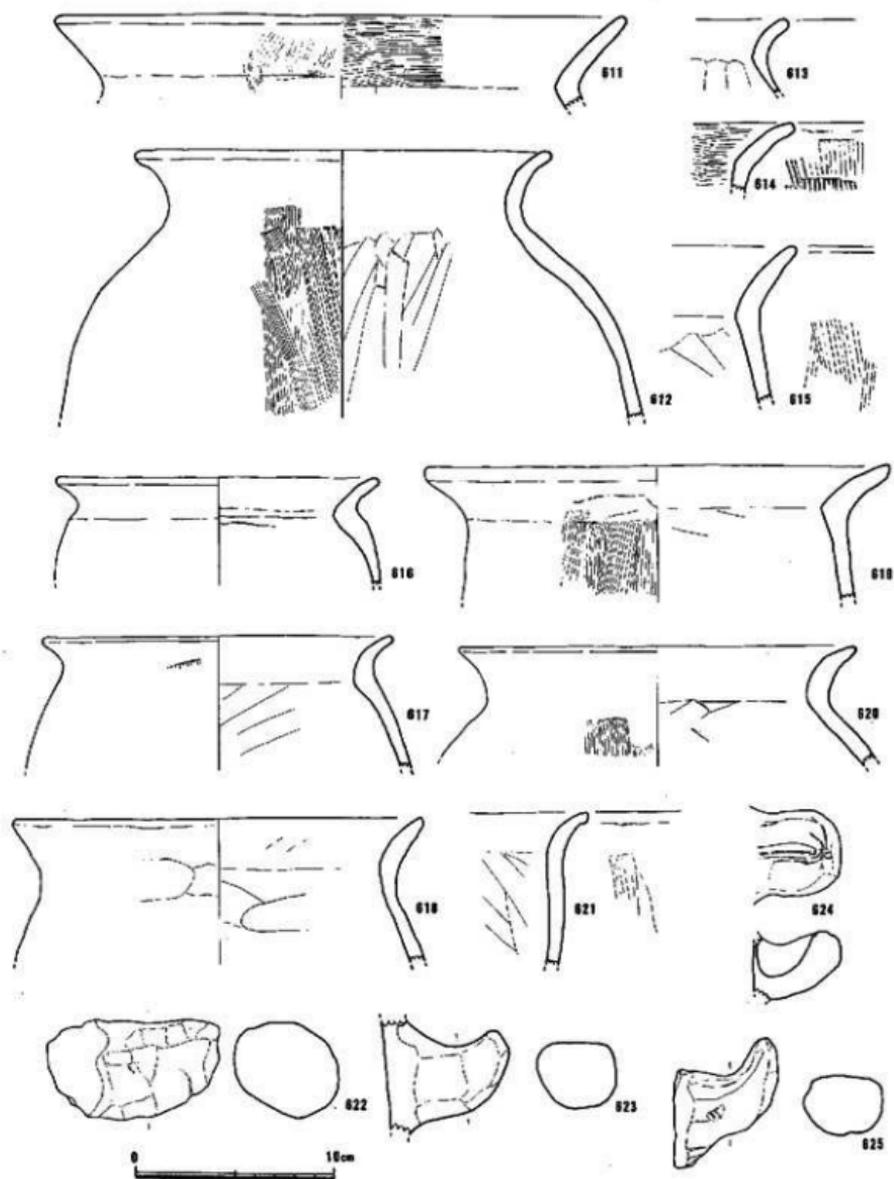
第71図 包倉層出土遺物実測図1B (1/3)

ずかにみられる。571は生焼けで橙色をおびた灰白色を呈す。外面には格子目叩き痕、内面には同心円当て具痕が残る。572は外面は灰色、内面は茶褐色を呈す。外面には擦痕、内面には当て具がみられる。573は甔の取手で外面には格子目叩き痕、内面には同心円当て具痕がみられ、内面はナデ消す。574は甔の胴部で外面には灰が被り、内面には当て具痕が残る。576-579は壺である。575は直立する口縁下に張り目が残り、胴部上部には沈線を施す。576は生焼けで灰白色を呈す。回転ナデ調整を施し、底部にはへら削りを施す。577は長首壺になると思われる。内面は回転ナデの後ナデ調整を、外面にはへら削りを施す。580は平瓶で淡灰色を呈し、3mm大の砂粒を含む。581は脚部で内面は弧を描き丸い器形を呈す。582は上底で内面に木口痕が残る。583、584は脚部で584は高環と思われる。

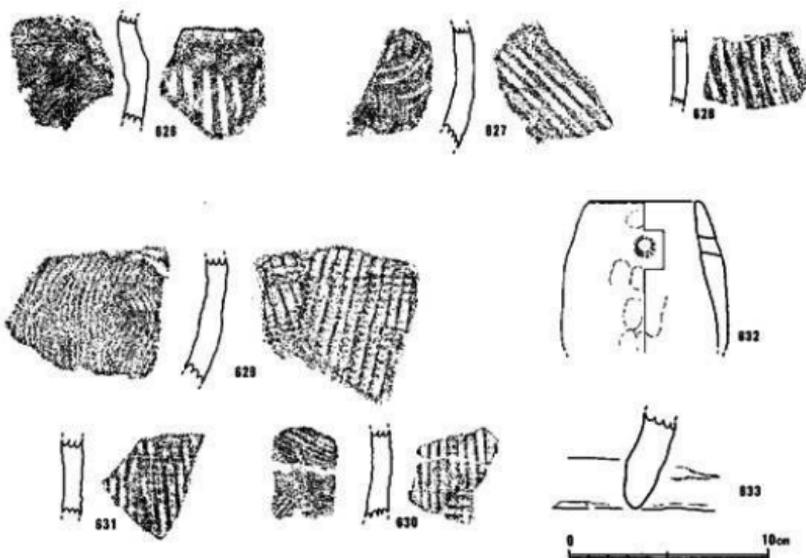
585-604は土師器である。585-592は椀で橙色または淡橙灰色を呈す。器面が粗れ気味で調整が不明瞭であるが、内面は回転ナデ調整でナデているものはみられない。底部はへら切り未調整で686に板目が付く。588は灰色が強く焼きが硬く他と見た目を異にする。ちょうど脚部から剥げており、接合部に櫛書き状の凹凸を施す。593-601は環である。593は外面を赤色に塗っているが器面が粗れており詳細は不明である。594、596、597は底部の切り放し痕がみられない。ナデ等の調整によるものか粗れによるものかはっきりしない。他は明瞭にへら切り痕が残っており未調整である。内面のナデ調整はみられない。602-604は皿である。底部はへら削



第72图 包舍层出土文物实测图11 (1/3)



第73图 包含层出土物实测图12 (1/3)



第74図 包含層出土遺物実測図13 (1/3)

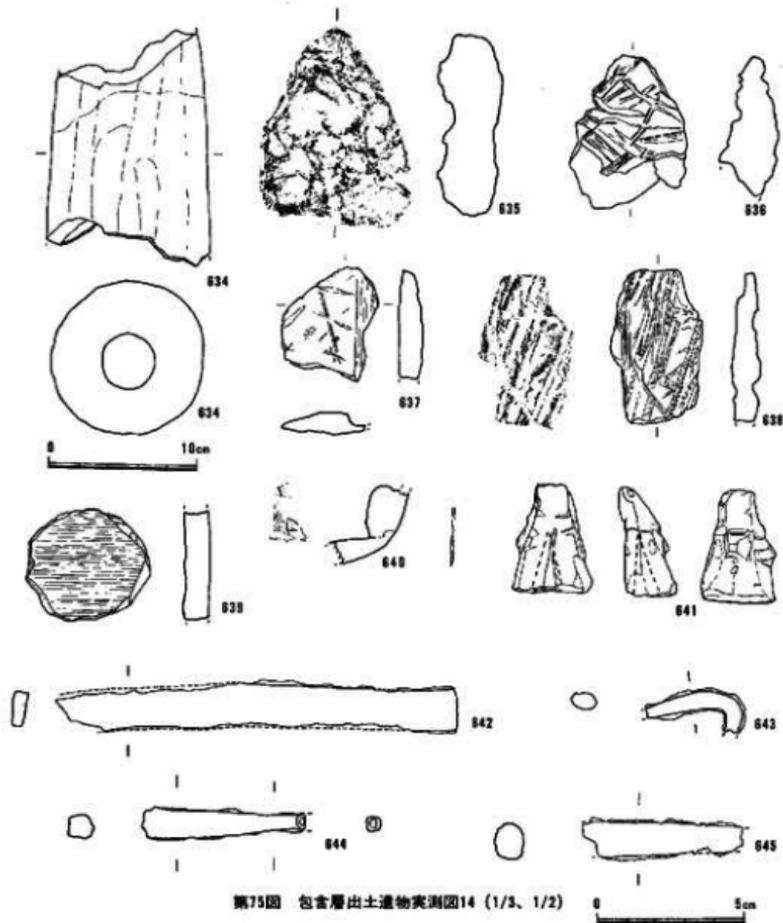
り調整で602には内面ナデ調整が施される。

605、606は黒色土器Aである。605は内外面に丁寧な横方向の研摩調整を施し、外面底部付近には回転ヘラ削りがみられる。口縁部外面は黒色を呈し、体部は橙色を呈す。606は口縁部外面もくすんだ黒色を呈す。器面が粗れており調整は不明である。胎土には2mm大の砂粒を含む。

607、608は瓦器である。607は内面にナデ調整を施す。608は外面は黒色、内面は白色を呈す。609は土師器の掬で精良な胎土である。610は高坏の脚部である。器面が粗れており調整は不明である。

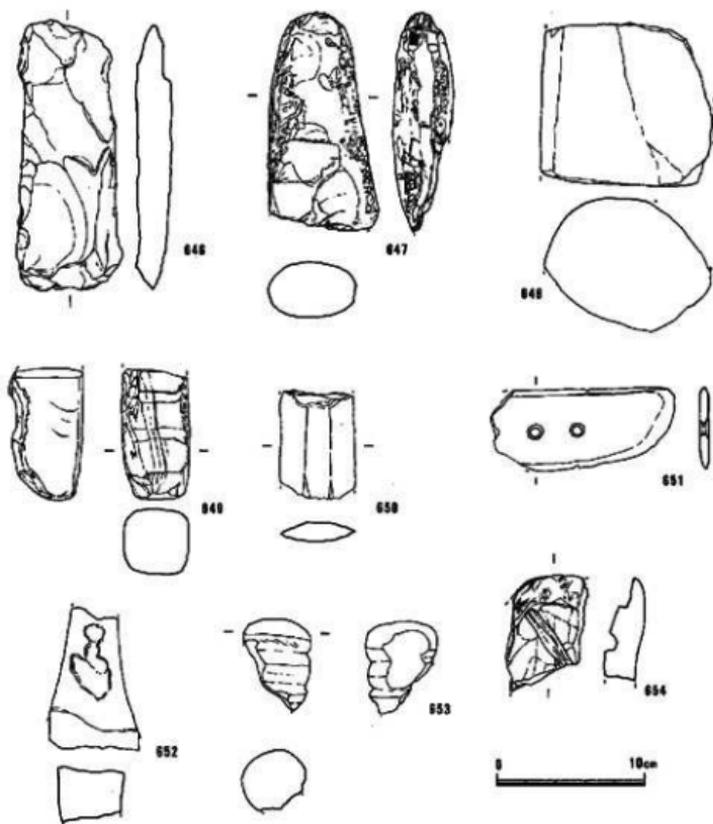
611～621は土師器の甕である。口縁部は横ナデ胴部外面は刷毛目内面は削り調整を施すものが多い。611、614は口縁部まで刷毛目が施される。618は外面ナデ調整で頸部に指圧痕が残る。621は頸部の屈曲が緩い。外面は淡く桃色がかり2次焼成を受けたものと思われる。624～625は甕の取手である。624には狭く深くぼみが彫られている。

624～631は甕に叩き調整を施した製塩土器とされているものと同様である。外面には平行叩きまたは疑似格子目叩き痕が残り、内面には細い弧を描く当て具痕が残るものとナデ調整を施



第75図 包倉層出土遺物実測図14 (1/3、1/2)

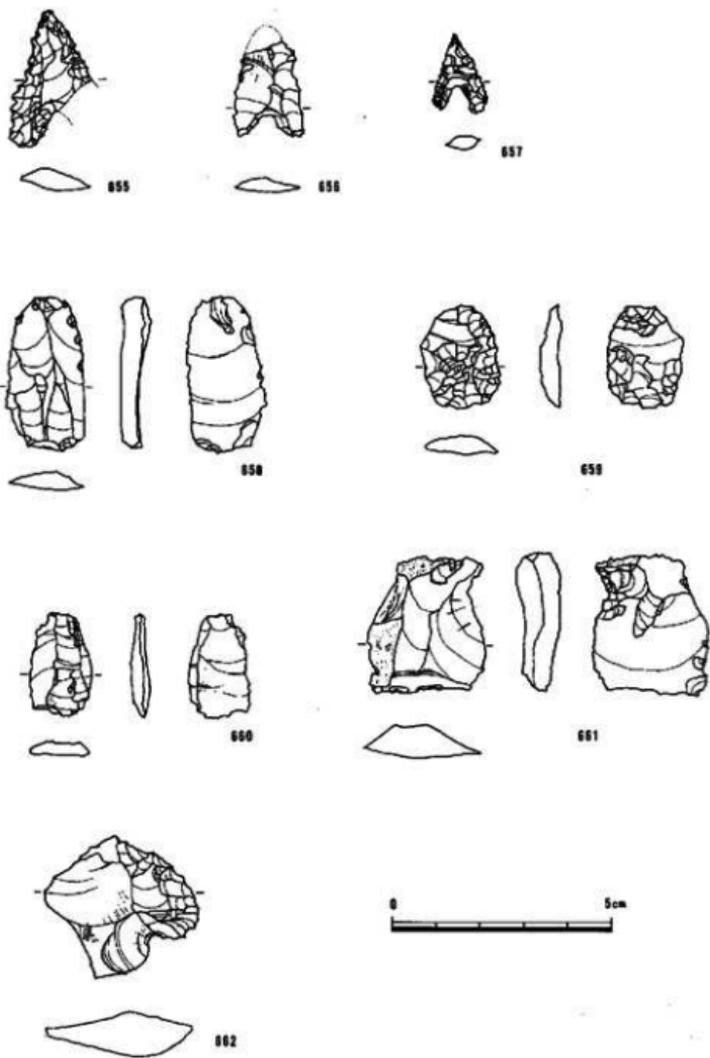
を呈しスサの痕跡が残る。639は灰釉陶器片で打ち欠きにより土版状を呈す。640は球状を呈すと思われる土製品であるが天地不明である。外面に沈線が入る。641は土人形で底から円錐形の穴が開く。642～645は鉄器である。いずれも錆が著しく原形が不明である。642は刀子か。643は現存する断面は丸く、曲がる。645は一方が細くなり刃を持つものか。646からは石器である。646は玄武岩製の打製石器で長さ14cm、幅4.7cm、重量を測る。647は玄武岩製磨製石斧で側面は敲打痕が残る。刃部は欠けるが僅かに残っており長さは現状と変わらないと思われる。648は玄武岩製石斧で全面に敲打痕が残る。649は柱状片刃石斧で浅い抉りが入る。650は石剣である。651は石包丁で約20mはなれた破片が接合した。652は砂岩製の砥石である。653は丸



第78図 包含層出土遺物実測図15 (1/3)

みを帯びた円柱形の砂石に2条の深くほみが彫られる。欠損しており全体は不明であるが、深くほみは1面のみで他の面は浅くなる。砥石か。655は滑石製品で石鏝の再加工品であろう。つまみ上部にはすすが付着する。

655～657は石鏝である。655、656は主剥離面を残す。658は縦長の薄片で両端に細かな2次調整を施す。659は細かな調整を全面に施す石鏝か。660はくさび形石器、661、662はスクレーパーと思われる。図示したものは全て黒曜石製である。



第77圖 包官層出土遺物實測圖18 (2/3)

IV おわりに

前述までのように東入部遺跡第4次調査においては、縄文時代早期、晩期、弥生時代中期、古代、中世の遺構と遺物を検出した。以下反復になるが時期ごとに概観しておきたい。

1 縄文時代

各遺構の覆土中から晩期を中心とする遺物を出土したが、この時期のものとは明確なものはない。SK062等は縄文土器のみが出土し覆土も他と異なりこの時期の可能性もあろうが遺物も小片でありはっきりしたことはいえない。第2面において縄文土器のみを出土するピットを検出した。北東側の標高が上がる部分に多く分布しており、この範囲に遺構または包含層があったものと思われる。包含層とすれば6層または7層であろうが確認できていない。南西側は遺物自体少なくないとはいえない。

遺物は晩期の土器、石器が主体であるが押型文土器348が1点出土している。内外面に斜走する楕円押型文を施し田村式に含まれるものと思われる。これに伴うと思われる石器として657があげられる。岩木遺跡等でも少量であるが出土しており、荒平山の山裾部にこの時期の遺物の分布が認められる。

晩期については小片がほとんどであるため編年的に困難なものが多い。深鉢は口縁帯を持つ精製のもの(423~430)、外反し頸部に屈曲部を持つもの、直口するものがある。浅鉢は器形が雑多である。古閑式の器形を引くものでは、頸部が長く伸び口縁帯を持つもの(440等)、短い口縁帯と頸部がボール状の胴部につくもの(446等)があるが、口縁帯は小さく、沈線、屈曲がシャープでない。462~464は球形の胴部になる黒川式の典型とされるものもある。浅鉢は467を除いて黒川期に含めて考えることができると思われるが、深鉢に口縁帯を持つ精製のものがあり、古閑式から黒川式の時期に幅を持たせて考えておきたい。この時期の遺物は近年、園場整備事業にともなう重留、岩本、清水、東入部遺跡の調査等で出土しており、資料の増加と共に器種構成等も明らかにできるものと思われる。

剥片石器は458点が出土した。石材は黒曜石445点、サヌカイト13点である。黒曜石は肉眼観察ではあるが佐賀県伊万里市腰岳産のものと思われる。

2 弥生時代

竪穴式住居2軒、土坑3基、遺物集中分布3個所を検出した。遺構は第2面で検出したが、SX029等は第6層中で出土した。弥生時代の遺構も6層上面からの掘込みの可能性もある。7層上面まで下げる際に弥生時代の遺構をとばしていることも考えられる。

弥生時代の遺物が出土した遺構の分布は北東側の高い部分に多い。また、5次、8次調査では南西隅に続く国道沿いで中期から後期の住居跡を検出しており、南側での分布はこれに続くものであろう。SC053からは砥石が出土している。

3 古代

今回の調査で最も多くの遺構と遺物が出土した時期である。はっきりとは決め難いが大まかな時期ごとに遺構と遺物の変遷をたどり、遺構の性格についてふれてみたい。

7世紀代 遺構は検出していないが遺物は須恵器では527、528のような坏身、551、553のような坏蓋等、土師器では99のような坏等が出土している。量的に少なくともは、何らかの遺構があると思われる。後世の遺構にも紛れ込んでおり、当期の遺構が壊されたか、またはピットの中に7世紀代のものがある可能性がある。

8世紀代 SK063、SB031を除く大型建物群等が考えられる。SK063は長頸壺が8世紀前半のものである。大型建物群は本来同時期の遺物を伴わないものであり、堀形から出土した遺物も少ない。その中でも多くの遺物を出土したSB030には8世紀後半までに収まる遺物が出土しており、9世紀に下がる遺物も出土していない。他の主軸を同じくする建物ではむしろ7世紀の遺物が目立つほどである。これらの建物群は8世紀後半に位置づけられるものと思われる。ただし調査区北側ではSB067～070が切りあっており、建てきれしていない掘方がある。またSB030も立替の可能性があり同時に存在した建物群を想定することは困難である。南側のSB039～041は、041が柱間が異なっており建て増しの可能性があるが、同時に存在したことは間違いないと考えられる。また、建物の掘方に少量であるが鉄滓が出土しており、製鉄関連の施設が存在していたと考えられる。

9世紀代 遺構ではSB031、SK011、012、013がある。SB031はSB030を切り、土師器の椀を出土している。9世紀後半と考えられる。SB011～013は6層に被った灰褐色土層上で検出した。黒色土器に10世紀に入りそうなものもあるが土師器の坏、椀等9世紀後半から末の遺物を主体とする。またトレンチ出土の遺物も9世紀代に収まっており、この時期には河川状のくぼ地も埋没していたと思われる。また、製鉄関連遺構は土器の出土が少ないため時期が決め難く、同時期かも不明である。とりあえずSK010が大型ピットの上に乗ること、SK024出土の土師器の坏から9世紀代に含まれるものと考えておきたい。

10世紀代 9世紀とした遺構の内に10世紀に下がるものもある可能性がある。しかし明確な遺構はなく、遺物も9世紀に比べると減少している。

11世紀代 SK021で出土した土師皿255が11世紀後半から末のものと考えられる。これより前の遺構から時期的にはなれる。

12世紀代 SK002、003、009等があげられる。これらの遺構は黒褐色土を覆土とし、002は大型建物に被る灰褐色土の上で検出しており6層上面で検出した遺構とは異なる。これらの遺

構は調査区の北側中央に集中しており広がらない。

以上を繰り返すと、7世紀代に何らかの遺構が作られ始め、8世紀後半には大型の建物製鉄関連の施設が存在する。9世紀には中央の河川が埋没していき11世紀末から12世紀に若干の土坑が掘られる。

次に遺構の性格について若干触れておきたい。

1m大の掘方を持つ掘立柱建物群は郡衙等の可能性と共に、製鉄関連遺構があるということから官衙工房の可能性もその性格の一つとして考えられよう。

鉄の徴税体系をみると賦役令では「正丁一人。(中略)鉄十斤。鉄三口。鉄二口⁽¹⁾」とある。しかし、実際遺跡から出土する木簡をみると「備前国赤坂郡周邇郷調鉄十口天平十七年十月廿四日」・「三上郡信敷郷調鉄十口⁽²⁾」と郷が単位となっているものや、鉄ではないが、「合志郡紫草大根四百五十幅⁽³⁾」、のように郡が単位となっているものがあり、官衙工房のようなところで製作されたことも考えられる。特に8世紀中頃には、藤原仲麻呂によって新羅征討が計画され⁽⁴⁾、続日本紀天平宝字六年正月二八日条をみると「造東海、南海、西海等道節度使料錦襖青各二万二百五十具於大宰府(下略)⁽⁵⁾」とあり、九州で大規模な鉄器(主に武器)生産が行われたことが推測される。また当遺跡から鉄鍔・刀子なども出土しているが、軍防令をみると、「凡兵士。(中略)每人。(中略)胡篋一具。(中略)刀子一枚。⁽⁶⁾」とある。掘立柱建物について、以上製鉄関連遺構と結びつけてみたが、その性格については、同期の調査に期したい。

SK012、013は製塩土器、土鉢、不明土製品、鉄製品が出土しており、他の遺構の遺物との違いが際だっている。製塩土器としたものは外面に叩きを施す事で、機能的に製塩を行ったものとは限定できない。しかし官衙的な遺構の特殊性から製塩に使った土器の可能性も捨てきれない。不明土製品は立野遺跡⁽⁷⁾で出土しているものと同様のもと考えられる。

以上で今回の報告を終えるが、建物で建てきれなかったものが多く、調査区内の地形等充分に示すことができず不十分なものとなった。製鉄関連遺構については鉄滓の分析を中心に改めて報告する予定である。

注)

(1)井上光貞他編 1976 日本思想体系「律令」 岩波書店

(2)木簡学会編 1990 「日本古代木簡選」 岩波書店

(3)九州歴史資料館 1985 「太宰府史跡出土木簡概報(二)」

(4)岸 俊男 1969 「藤原仲麻呂」 吉川弘文館

(5)1988 「続日本紀」国史体系増補改訂普及版 吉川弘文館

(6)注(1)に同じ

(7)福岡県教育委員会 1986 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 — 8 —

付 論

東入部遺跡4次製鉄関連遺構出土品の金属学的調査

大 澤 正 己

概 要

9世紀頃に比定される東入部遺跡4次調査で検出された不明瞭な遺構から出土した鉄滓を調査して次の点が明らかになった。

<1> SK010, SK018, SK024遺構から出土した鉄滓は、荒鉄（製錬生成鉄で、捲き込みスラグや炉材粘土、表皮スラグの不純物を含む原料鉄）の成分調整を行った製錬鉄滓であった。当遺構は、製錬鍛冶工房跡の可能性をもつ。

<2> SK035遺構出土鉄滓は、砂鉄製錬滓に分類される。出土鉄滓の形態からみて自立型整形炉が想定される。

<3> SK042遺構出土鉄滓は、小型箱形製鉄炉から排出された砂鉄製錬滓の可能性をもつ。

<4> SK057遺構は、鍛冶原料の鉄塊系遺物採取のための鉄塊や鉄滓の小割り場に想定される。出土鉄滓は半還元砂鉄粒子を留めた砂鉄製錬滓であった。

<5> SK059遺構は整形製鉄炉跡の可能性をもち、調査鉄滓は炉底滓から鉄塊系遺物を割り出した残滓（製錬滓）と考えられた。

1. いきさつ

東入部遺跡は、福岡市早良区大字東入部宇飛松329-1に所在する。当遺跡は、公民館の駐車場造成に伴って調査され、全域にわたって鉄滓が出土した。その中で特に強い被熱箇所、焼土、炉壁などが集中して製鉄関連遺構の可能性の強いところから鉄滓を選び出し、遺構の性格を解明するための専門調査を行った。

鉄滓調査に際しては、たたら研究会関東地区委員の穴澤義功氏と共に外観観察をおこなって遺構性格の予測をつけ、金属学的調査で実証する方法を採っている。今回調査の各遺構出土品は、福岡平野の古代製鉄研究解明に繋がる重要性をもつもので、今回調査は予備調査を兼ねている。後日、更に各遺構から出土した鉄滓と鉄塊系遺物を加えて検討して行く予定である。

2. 調査方法

2-1. 供試材

Table.1に示す。各遺構1点の鉄滓の調査であった。

Table.1 供試材の履歴と調査項目

符号	試 料	炉 型	遺構No.	計 測 値		調 査 項 目		
				大きさ(mm)	重量(g)	顕微鏡組織	ビッカース 硬度	化学組成
HGI4-1	中型楕形滓	精錬鍛冶炉	SK010	125×75×48	326	○	(○)	○
6	大型楕形滓	〃	SK018	120×150×50	1880	○	○	○
7	小型楕形滓	〃	SK024	30×35×20	20	○	-	-
2	炉 内 滓	自立型整形炉	SK035	74×47×43	186	○	○	(○)
3	炉 底 滓	小型箱形炉	SK042	65×65×35	170	○	○	(○)
4	炉内流動滓	小 割 場	SK057	64×37×28	59	○	○	○
5	炉内滓(破砕)	整 形 炉	SK059	55×44×29	81	○	○	○

2-2. 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) 顕微鏡観察

鉄滓は水道水で十分に洗浄し乾燥後、中核部をベークライト樹脂に埋め込み、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3ミクロンと1ミクロンで仕上げた光学顕微鏡による観察を行った。

- (3) ビッカース断面硬度

鉄滓の鉱物組成の同定を目的として、ビッカース断面硬度計(Vickers Hardness Tester)を用いて硬さの測定をおこなった。試験は鏡面研磨した試料に136度の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡試料を併用した。

- (4) 化学組成

鉄滓の分析は次の方法で実施した。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第1鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素(SiO_2)、酸化アルミニウム(Al_2O_3)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K_2O)、酸化ナトリウム(Na_2O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO_2)、酸化クロム(Cr_2O_3)、五酸化燐(P_2O_5)、バナジウム(V)、銅(Cu)：ICP法。ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)：誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果と考察

- (1) IIG14-1, SK010出土鉄滓(精錬鍛冶滓)

- ①肉眼観察

表裏ともに茶褐色を呈し、肌荒れた碗形滓で端部を欠く欠損品である。表面は木炭痕、裏面は石英まじりの粘土を付着する。破面は黒褐色で気泡少なく緻密質である。

- ②顕微鏡組織

Photo.1の①～③に示す。鉱物組成は、白色粒状の多くのウスタイト(Wüstite: FeO)と、淡灰色木ずれ状のファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_2$)、基地の暗黒色ガラス質スラグから構成される。なお、ウスタイト粒内には淡茶褐色微小析出物の鉄(Fe)－チタン(Ti)化合物が認められる。これらの晶癖は製錬鍛冶滓に分類される。

- ③ビッカース断面硬度

Photo.1の③にウスタイト粒に硬度測定を行った圧痕写真を示す。硬度値は、546Hvである。ウスタイト(Wüstite: FeO)の文献硬度値は450～500Hvである。¹¹⁾ 該品は粒内に鉄(Fe)－チタン(Ti)化合物を析出するので若干高めに値がでている。一応ウスタイトと同定してよからう。

④化学組成

Table. 2に示す。全鉄分(Total Fe)が52.97%に対して、金属鉄(Metallic Fe)が0.32%、酸化第1鉄(FeO)47.56%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)22.42%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)成分は25.98%であって、このうち塩基性成分(CaO+MgO)が3.94%と高いのは精錬鍛冶でも初期段階であろう。砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO₂)1.16%、酸化ジルコニウム(ZrO₂)1.0%、バナジウム(V)0.23%は福岡平野在地砂鉄を始発原料とした荒鉄が鍛冶原料となっている。酸化マンガン(MnO)0.12%も精錬鍛冶萍のレベルといえる。他の随伴微量元素は特異点はなく、酸化クロム(Cr₂O₃)0.27%、硫黄(S)0.03%、五酸化燐(P₂O₅)0.27%、銅(Cu)0.002%であった。

(2) HGI4-6, SKO18出上鉄萍(精錬鍛冶萍)

①肉眼観察

表裏共に灰褐色地に鉄錆を発生、木炭噛み込みがあり、肌は荒れの大きい大型椀形萍で1.9 kgを計る。破面には、製錬萍の緻密硬質萍を包含していた。

②顕微鏡組織

Photo.1の④~⑥に示す。鉱物組成は、大きく成長し凝集した白色粒状ウスタイト(Wüstite: FeO)で占められる。その粒内には鉄(Fe)-チタン(Ti)化合物が析出する。またウスタイト粒間には、少量のファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)と暗黒色ガラス質スラグが埋める。大型椀形萍であって徐冷を受けてウスタイトが大きく成長していた。これも精錬鍛冶萍に分類される。

③ピッカース断面硬度

Photo.1の⑥にウスタイト粒の硬度測定止痕を示す。硬度値は562Hvであった。鉄(Fe)-チタン(Ti)化合物の影響がこれもみられた。ウスタイト粒と同定される。

④化学組成

Table. 2に示す。鉄分が多くてガラス質成分は少ない。全鉄分(Total Fe)が63.83%に対して、金属鉄(Metallic Fe)0.24%、顕微鏡組織でウスタイトの凝集がみられた様に酸化第1鉄(FeO)が多くて67.21%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)は16.23%の割合であった。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は少なくとも9.77%、このうちの塩基性成分(CaO+MgO)は1.70%であった。チタン濃度は濃縮されて2.83%、酸化ジルコニウム(ZrO₂)は1.4%、バナジウム(V)0.38%は高めであって、製錬萍に近い値である。これも精錬鍛冶は初期段階であろう。酸化マンガン(MnO)は0.27%と高め傾向にあった。他の随伴微量元素は前述鉄萍のHGI 4-1と大差なかった。同系鍛冶原料の排出萍と考える。

(3) HGI4-7 SKO24出上鉄萍(精錬鍛冶萍)

①肉眼観察

直径35mmの超ミニサイズの椀形萍で約4分の3程度を欠損している。表裏共に赤褐色の錆に包まれて、木炭痕を残す。破面は気泡を散在させるが緻密質であった。

②顕微鏡組織

Photo.1の⑦に示す。超ミニの小型品で急速に冷却されてウスタイトは成長せずに小粒であった。ウスタイト粒内には、やはり鉄(Fe)-チタン(Ti)化合物を析出し、精錬渣滓の晶癖を有している。

(4) HG14-2 SKO35出土鉄滓(砂鉄製錬滓)

①肉眼観察

表皮は淡灰黒色を呈した清らか無光沢肌に小気泡を散発させた炉内滓破片である。裏面は炉底粘土との反応痕をもつが、約半分は破砕面であった。破面は干渉色で小気泡をもつ緻密質滓であった。

②顕微鏡組織

Photo.2の①～⑤に示す。鉱物組成は白色粒状ウスタイトで、その粒内には鉄(Fe)-チタン(Ti)化合物を析出し、これに共伴して淡茶褐色多角形状のマグネタイト(Magnetite: Fe_3O_4)を晶出する。また、それらの粒間には、淡灰色木ずれ状ファイヤライトと暗黒色ガラス質スラグが埋める。これらの構成鉱物は、低チタン含有酸性砂鉄を原料とした砂鉄製錬滓に分類される。

③ピッカース断面硬度

Photo.2の⑤にウスタイト、⑥にマグネタイトの硬度測定をおこなった圧痕写真を示す。前者の硬度値は549Hv、後者は672Hvであった。マグネタイトの文献硬度値は500から600Hvであって、該品は、それより若干上まわる。硬度測定時にヒビ割れが入って誤差を生じているが、これも一応マグネタイトと同定できる。

④化学組成

Table.2に示す。全鉄分(Total Fe)が49.03%とやや低減するが、そのうちの金属鉄(Metallic Fe)が0.21%、酸化第1鉄(FeO)51.45%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)12.62%の割合であった。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は24.02%であるが、鉄と滓の分離を促進する自媒剤の塩基性成分($\text{CaO} - \text{MgO}$)は多くて5.38%である。砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO_2)は4.6%酸化ジルコニウム(ZrO_2)3.5%らは今回分析値での上限値であって、更に、酸化マンガン(MnO)も0.42%と多く、砂鉄製錬滓としての典型的数値を出している。他の随伴微量元素らは、特別言及する点はなく、通常製錬滓レベルであった。

(5) HG14-3 SKO42出土鉄滓(砂鉄製錬滓)

①肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、やや粗粒肌をもつ炉底滓の破片である。一部鉄錆の強い個所をもつ。裏面には木炭痕が認められた。破面は無気泡で緻密質である。

②顕微鏡組織

Photo.2の⑥～⑧に示す。鉱物組成は淡灰色盤状結晶のファイヤライト(Fayalite: $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$)が多くて、これに少量のマグネタイトとウスタイトが晶出する。これも砂鉄製錬滓に分

類される。

③ピッカース断面硬度

Photo.2の③にファイヤライト結晶の硬度圧痕写真を示す。硬度値は701Hvであった。ファイヤライトの文献硬度値は、600から700Hvであって、当該結晶はファイヤライトと同定できる。

④化学組成

Table.2に示す。今回調査試料でもっとも鉄分が少なく、ガラス質分の多い滓である。顕微鏡組織と矛盾はない。すなわち、全鉄分(Total Fe)は38.38%に対して金属鉄(Metallic Fe)は0.16%、酸化第1鉄(FeO)42.74%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)7.79%の割合である。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は43.24%で、このうち、塩基性成分(CaO+MgO)が5.69%と多い。これは製錬滓としての成分系を表す。砂鉄特有元素の二酸化チタン(TiO₂)は1.44%、酸化ジルコニウム(ZrO₂)は1.5%、バナジウム(V)0.26%らを総合的に勘案すると、やはり製錬滓としての成分である。随伴微量元素に特異点のみあたらぬ。

(6) HGI4-4 SKO57出土鉄滓(砂鉄製錬滓)

①肉眼観察

表裏共に灰黒色を呈し、幅狭流動肌をもつ炉内滓である。裏面は間歇流動性で凹凸を有する。破面は黒色で気泡は少ない。

②顕微鏡組織

Photo.3の①～⑤に示す。鉱物組成はマグネタイトとファイヤライト主体であるが、一部に砂鉄が半還元状態で懸ぶくする。

$3\text{Fe}_2\text{O}_3 + \text{CO} = 2\text{Fe}_3\text{O}_4 + \text{CO}_2$ のマグネタイト(Fe₃O₄)で留まった状態である。十分にスラグ化しきっていないので砂鉄も半還元であった。砂鉄製錬滓の品癖を残す。

③ピッカース断面硬度

Photo.3の⑤に半還元砂鉄からマグネタイトへと変化しかかった粒の硬度圧痕を示す。圧痕周辺にはクラックが入って正常な値はとれないが571Hvであった。本来は600前後に収まるのであるが、マグネタイトと同定できる。

④化学組成

Table.2に示す。半還元砂鉄粒子をかかえ込んだ滓なので、砂鉄のままに近い成分系となる。全鉄分(Total Fe)は47.17%に対して、金属鉄(Metallic Fe)が0.21%、酸化第1鉄(FeO)34.97%、酸化第2鉄(Fe₂O₃)28.28%の割合であった。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は28.52%で、塩基性成分(CaO+MgO)もさほど高くなく2.80%であった。二酸化チタン(TiO₂)1.15%、酸化ジルコニウム)0.5%も低めで、原料砂鉄に近く濃縮度は低い。顕微鏡組織に見合った成分系であった。分類は砂鉄製錬滓といえる。

(7) HGI4-5 SKO59出土鉄滓(砂鉄製錬滓)

①肉眼観察

表皮側は全部破砕されて原形は保たず剥離面のみを残す。淡く錆を発生し赤褐色となる。素肌は小気泡を露出するが緻密質。裏面は炉底粘土との反応痕や木炭痕を残すので炉内滓の小割り破片と判別がつく。破面は黒色緻密質であった。

②顕微鏡組織

Photo.3の⑥～⑧に示す。鉱物組成はウスタイトの凝集で、その粒内に塊状に鉄(Fe)ーチタン(Ti)析出物をもつ。この析出物が微細化していれば製錬鍛冶滓となるが、塊状となるところは、炉底滓が時折みせる析出状態で製錬滓に分類できる。

③ピッカース断面硬度

Photo.3の⑧に硬度圧痕の写真を示す。硬度値は540Hvでウスタイトと同定できる。

④化学組成

Table.2に示す。炉底滓の鉄分の多い滓なのでガラス質は少ない。全鉄分(Total Fe)は63.48%に対して金属鉄(Metallic Fe)が0.33%、酸化第1鉄(FeO)多くて69.08%、酸化第2鉄(Fe_2O_3)13.52%の割合である。ガラス質成分($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$)は12.23%と少ないが、その内の塩基性成分($CaO + MgO$)は2.45%と製錬滓レベルを保っている。また、砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)1.4%、酸化ジルコニウム(ZrO_2)1.5%、バナジウム(V)0.30%は、これも総合的には製錬滓成分である。

4. まとめ

東入部遺跡では、9世紀代に小型箱形製鉄炉(SK042)と豎形炉(SK059、SK035)を操業し、盛大な鉄生産を行っている。そこで生産された鉄塊系遺物は、鉄塊小割り場(SK057)で選別作業がなされて鍛冶原料が準備され、鍛冶工場のSK010、SK018、SK024で精錬鍛冶がなされたと想定される。

今回の鉄滓調査で、製鉄遺跡内の大まかな作業空間利用の道筋を辿ることができた。更に精度を上げるには鉄塊系遺物などを加えた調査が必要となってくる。後日に期待したい。

(注)

- 1) 日刊工業新聞社「焼結鉱組織および識別法」1968
- 2) 1)と同じ
- 3) 1)と同じ

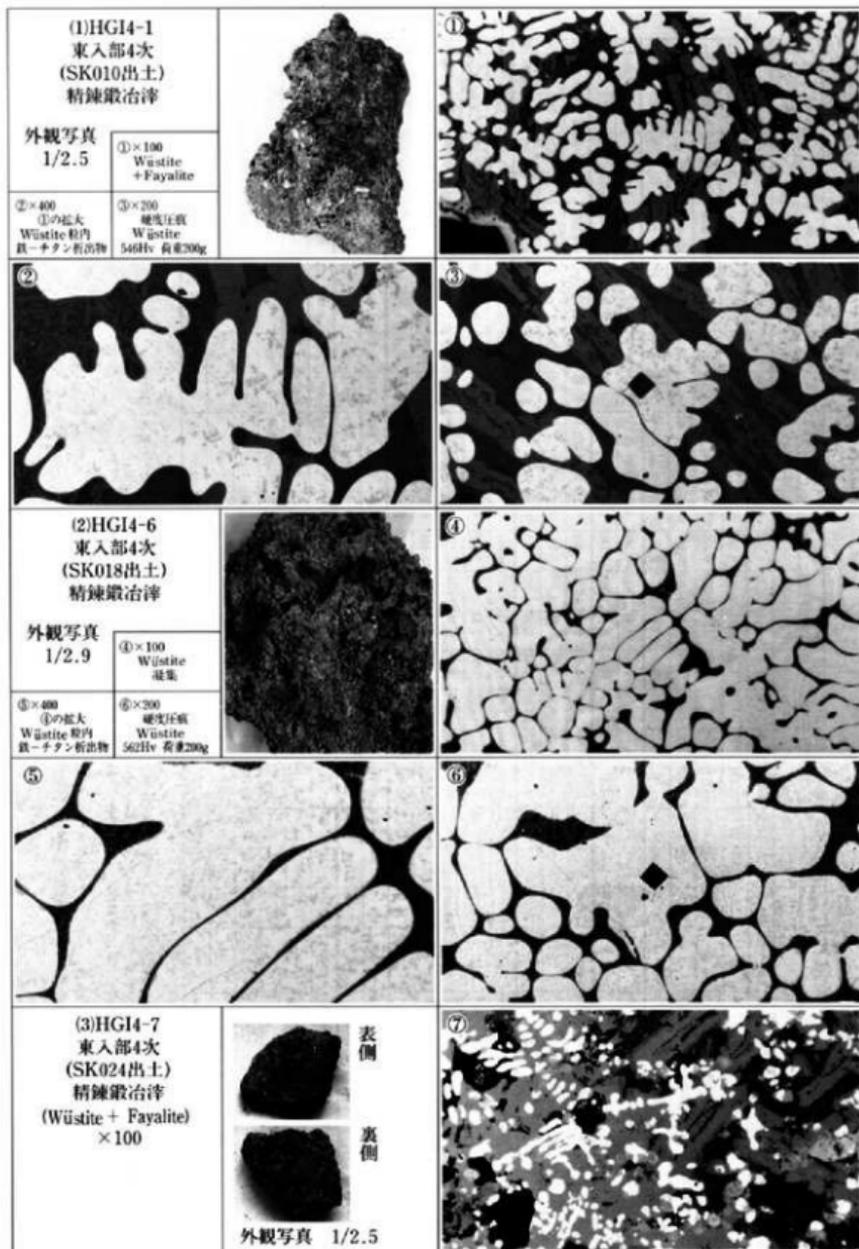


Photo.1 鉄滓の顕微鏡組織

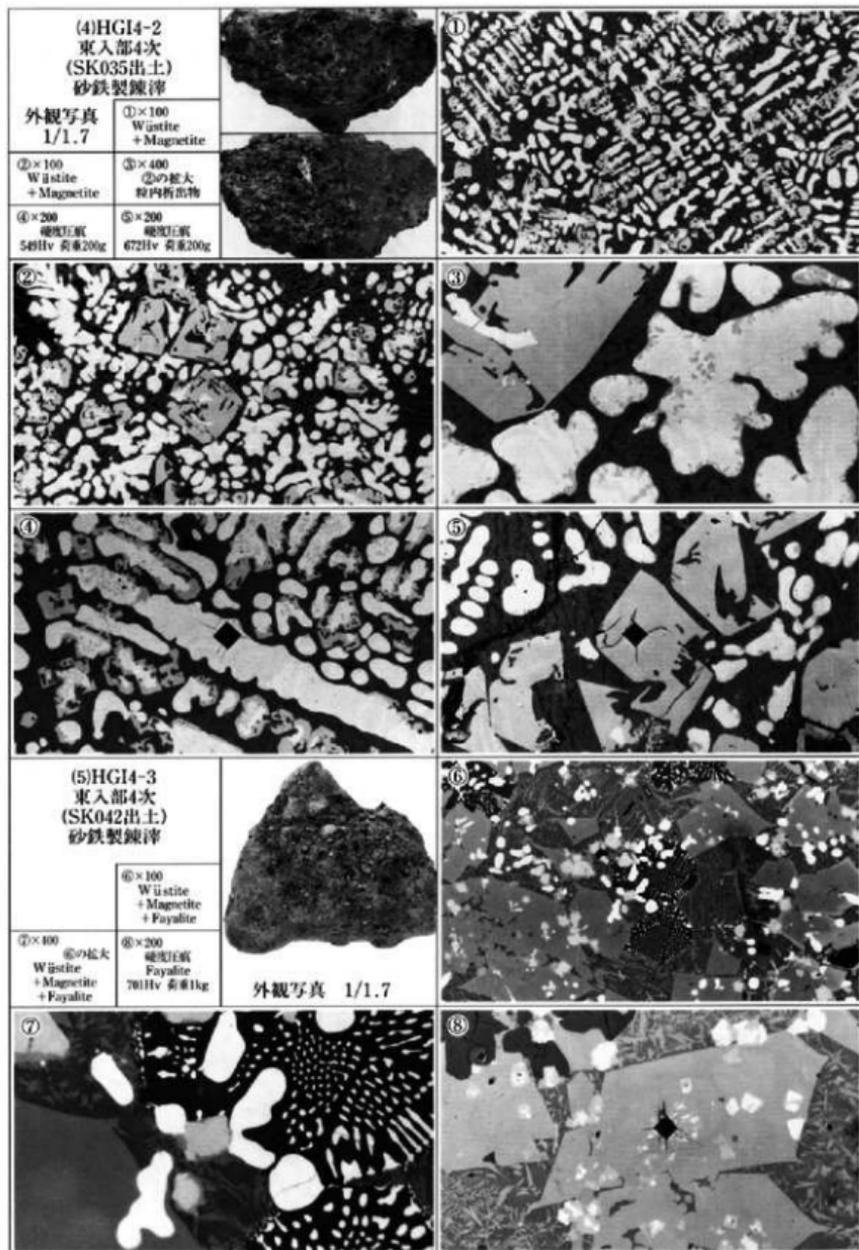


Photo.2 鉄滓の顕微鏡組織

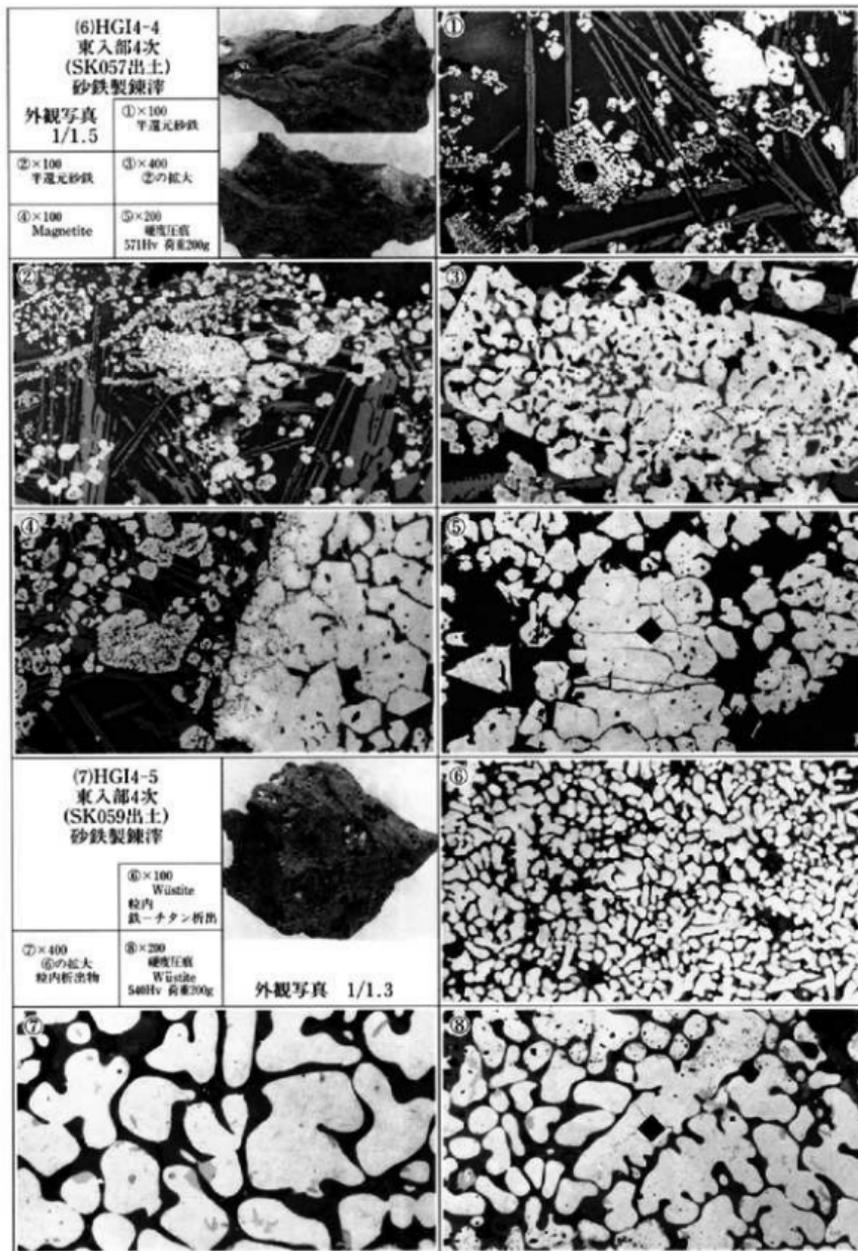


Photo.3 鉄滓の顕微鏡組織

圖 版



(1)第1面全景



(2)第1面(西から)



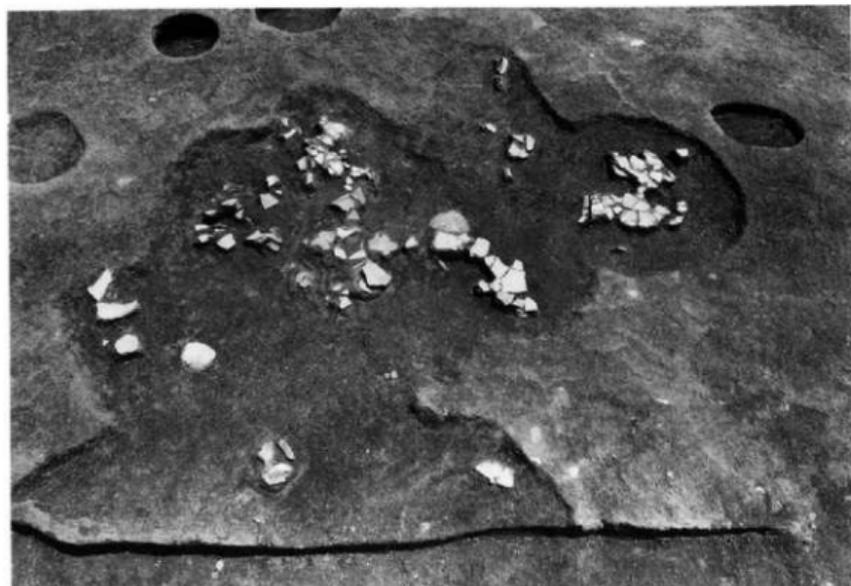
第2面(北西から)



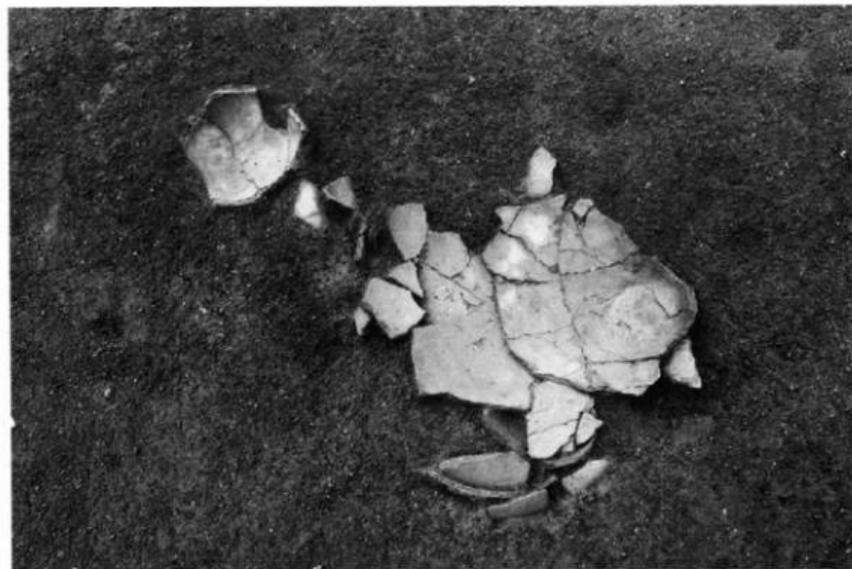
(1)SC053(西から)



(2)SC054(東から)

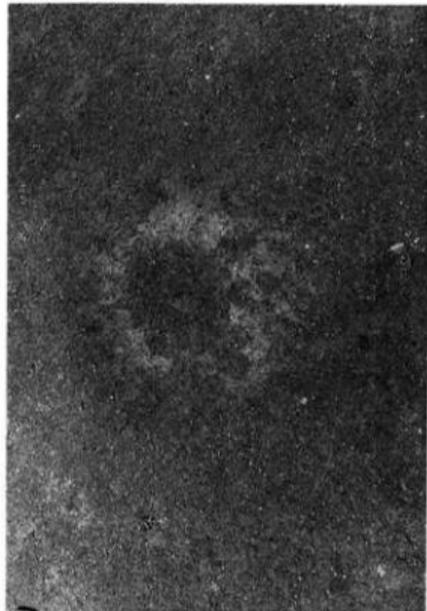


(1)SX029(北から)

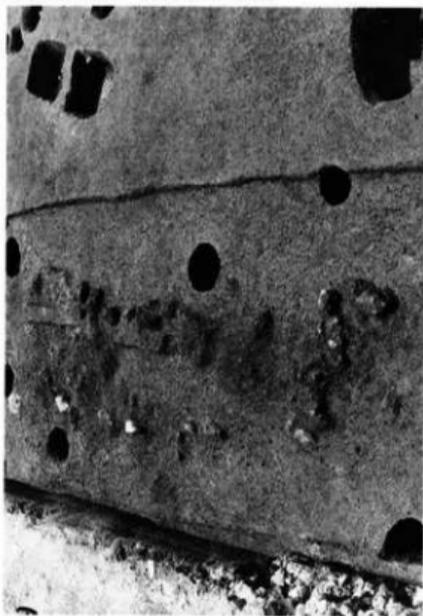


(2)SX064(西から)

(1) SX0005 (南から)



(2) SX0001' 018 (南から)



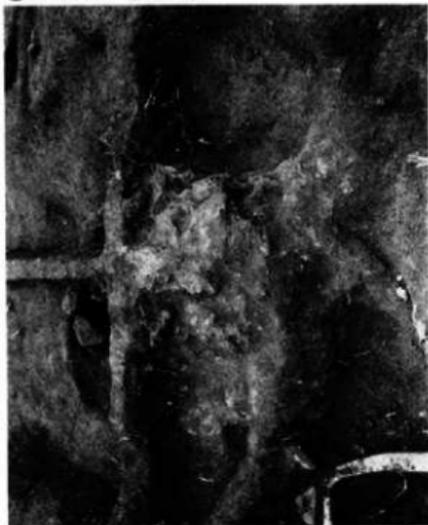
(3) SX0024 (西から)



(4) SX0024 (南から)



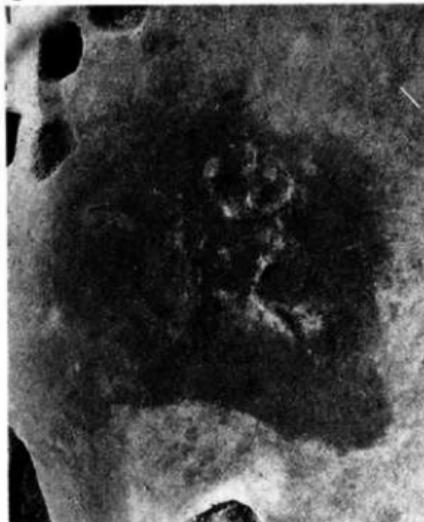
(1) SX0325 (西から)



(2) SX0412 (東から)



(3) SX0559 (南から)



(4) SX0559 (南から)

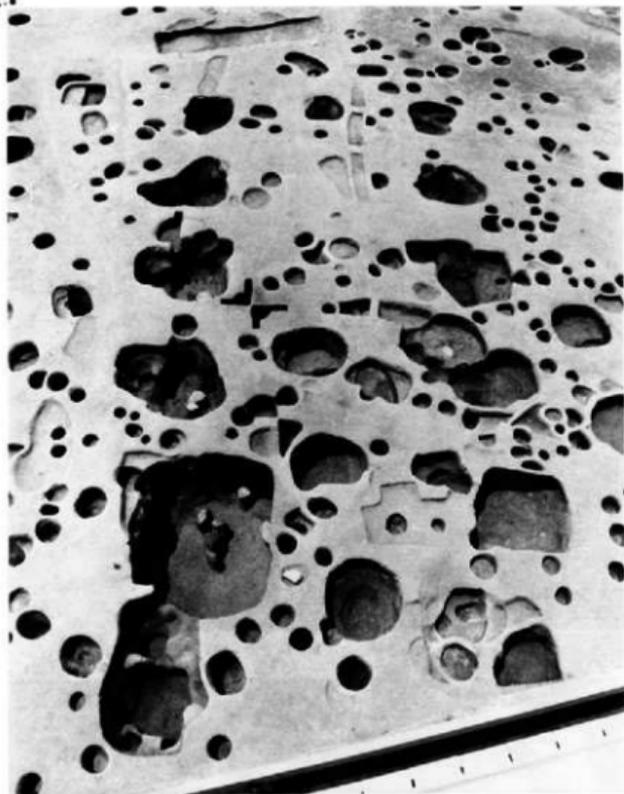




(1)北東側建物群(南から)



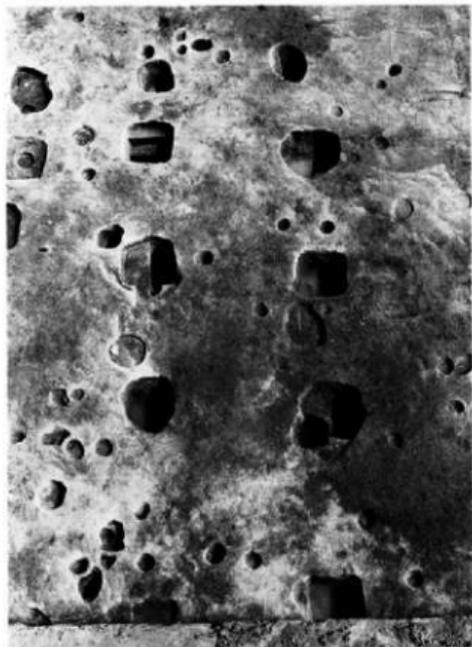
(2)南西側建物群(南から)



(1)SB030(北から)



(2)SB030, 031(西から)



(1)SB042(南から)



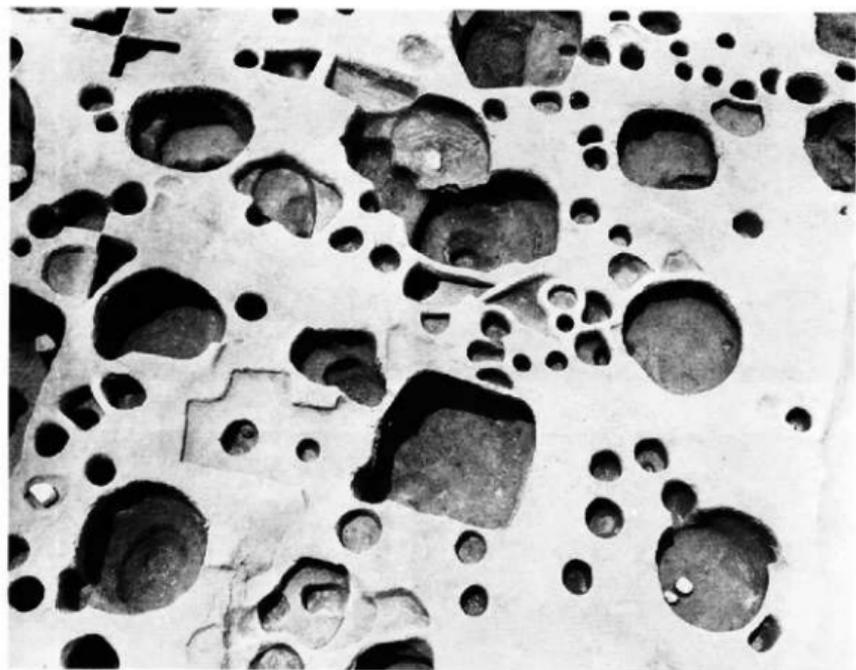
(2)SB031(北から)



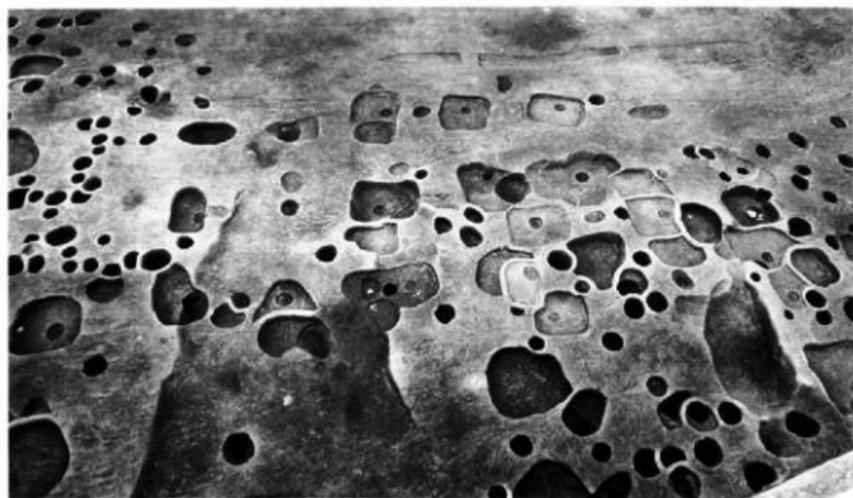
(1)SB069(北から)



(2)SB039(東から)



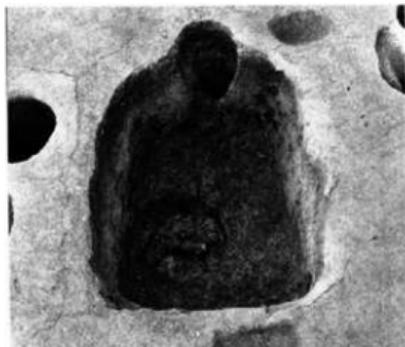
(1)SB031(北から)



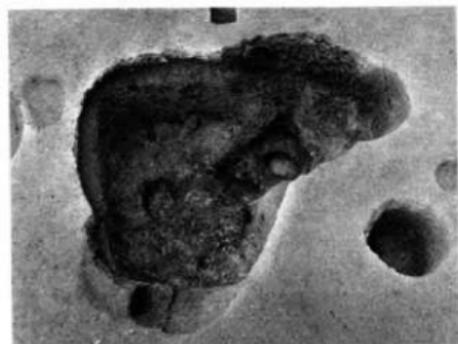
(2)SB067、068周辺(北から)



(1)SB030-4



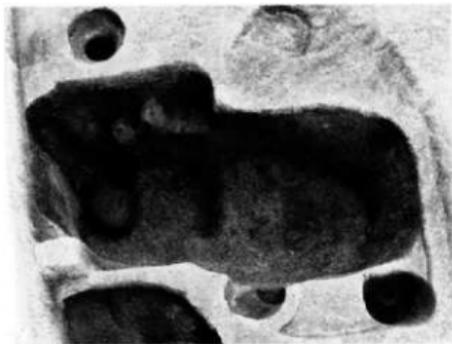
(2)SB030-7



(3)SB030-5



(4)SB030-6



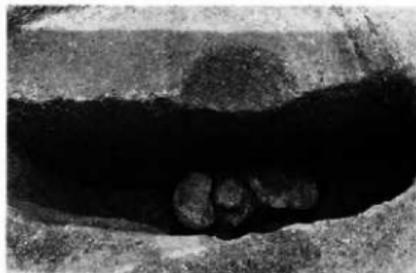
(5)SP



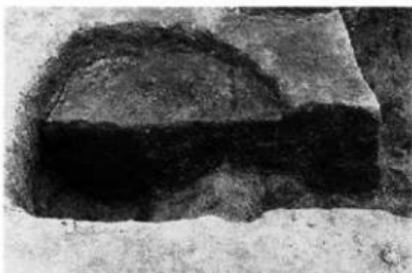
(1)SB030-4



(5)SB031-4



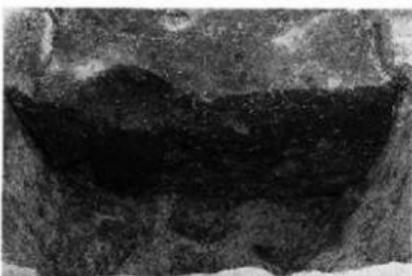
(2)SB030-7



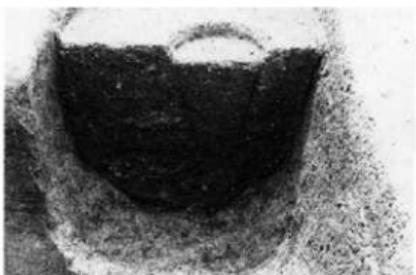
(6)SB067-9



(3)SB030-13



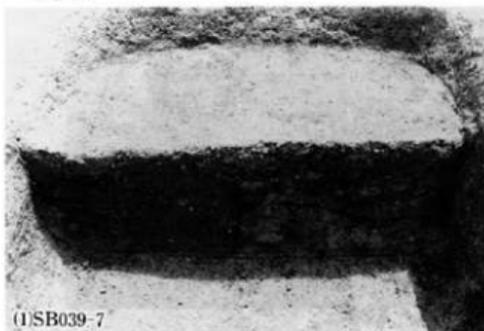
(7)SB068-3



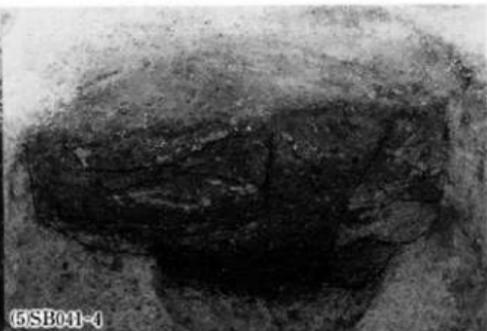
(4)SB030-?



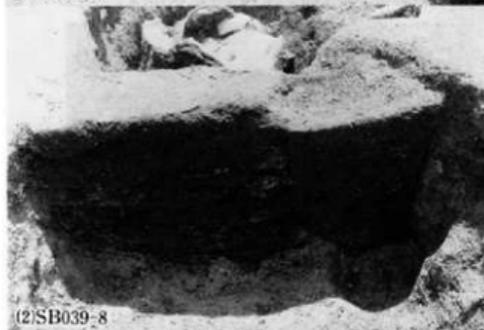
(8)SB068-9



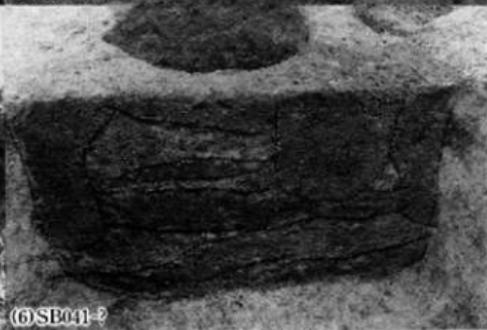
(1) SB039-7



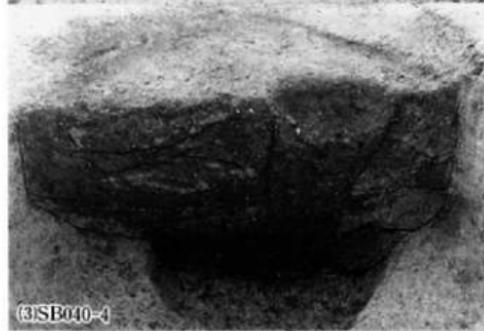
(5) SB041-4



(2) SB039-8



(6) SB041-2



(3) SB040-4



(7) SP1501



(4) SB040-6



(8) SP1559



(1)SK002(西から)



(2)SK076(南から)

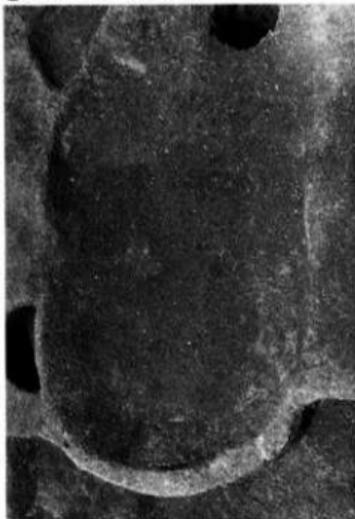


(1)SK012(西から)



(2)調査区南西隅ビット群(南から)

(1) SK003 (東から)



(2) SK011 (北東から)



(3) SK012 (南西から)



(4) SK019 (東から)



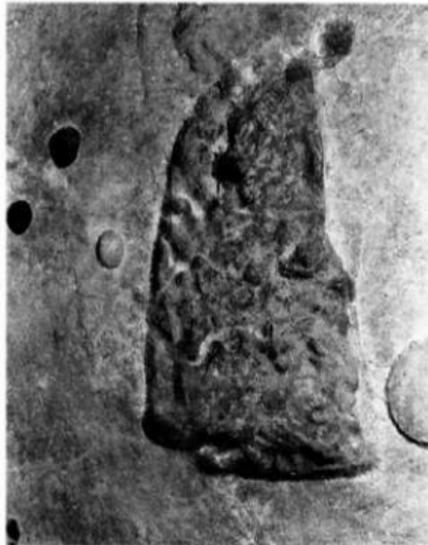
(1) SK021 (前から)



(2) SK020 (前から)



(3) SK022 (前から)



(4) SK021, 022 (前から)



① SK056 (東から)



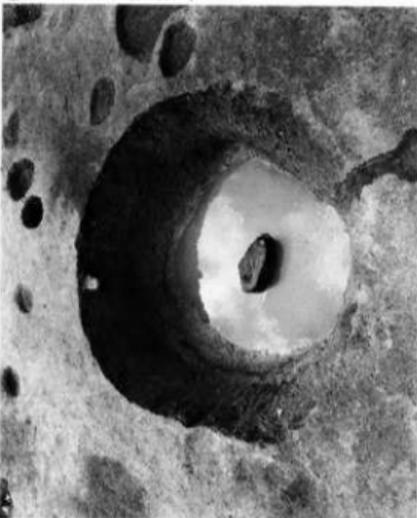
② SK063 (西から)



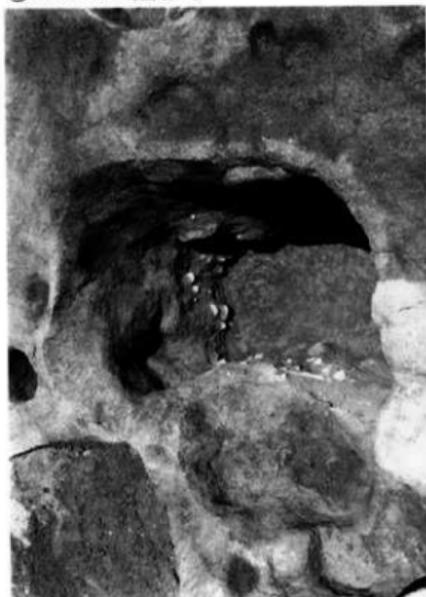
③ SK056 (西から)



④ SK060 (東から)



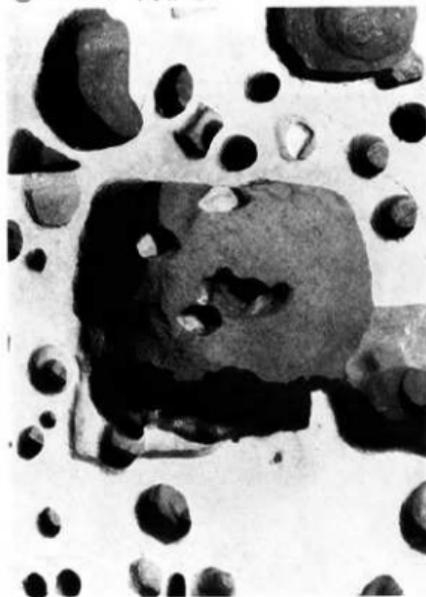
① SK062 (南から)



② SK074 (南から)

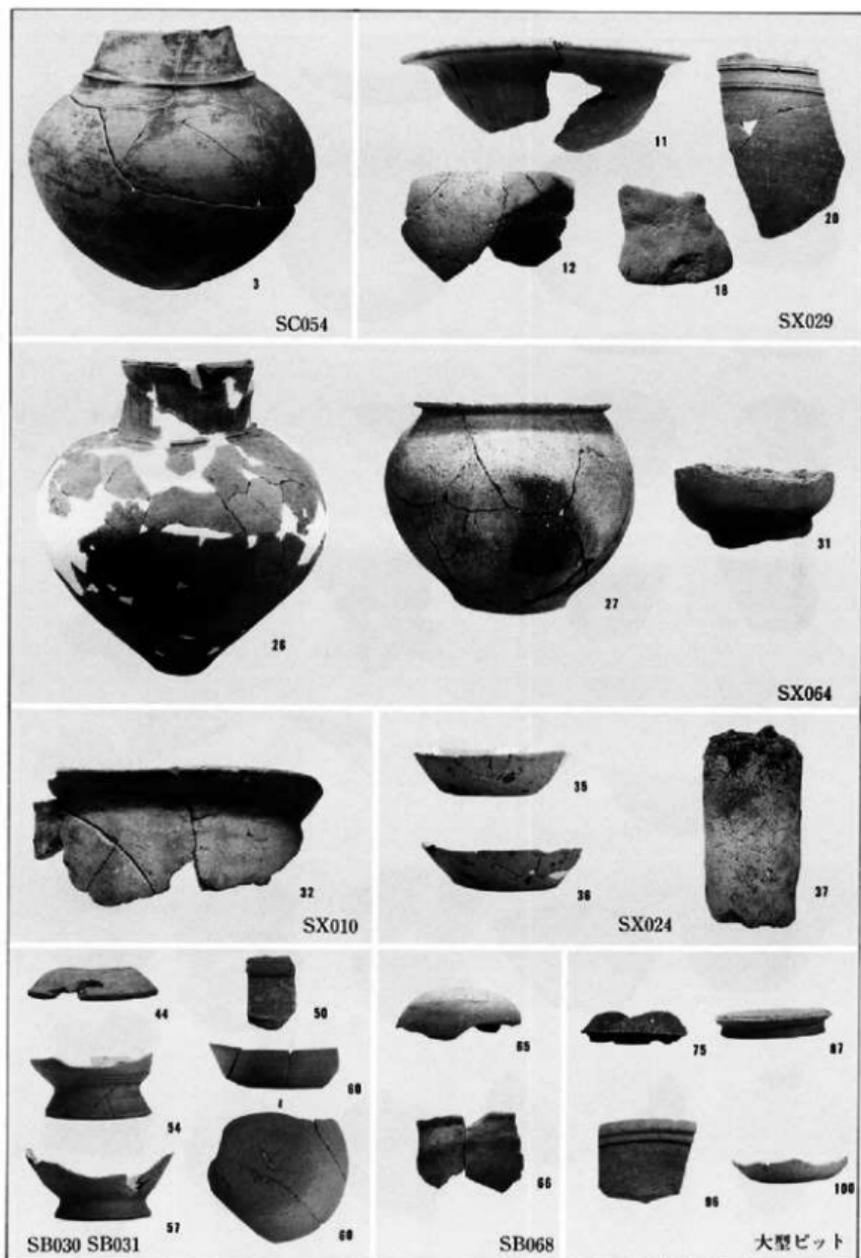


③ SK079 (北から)



④ SK078 (東から)

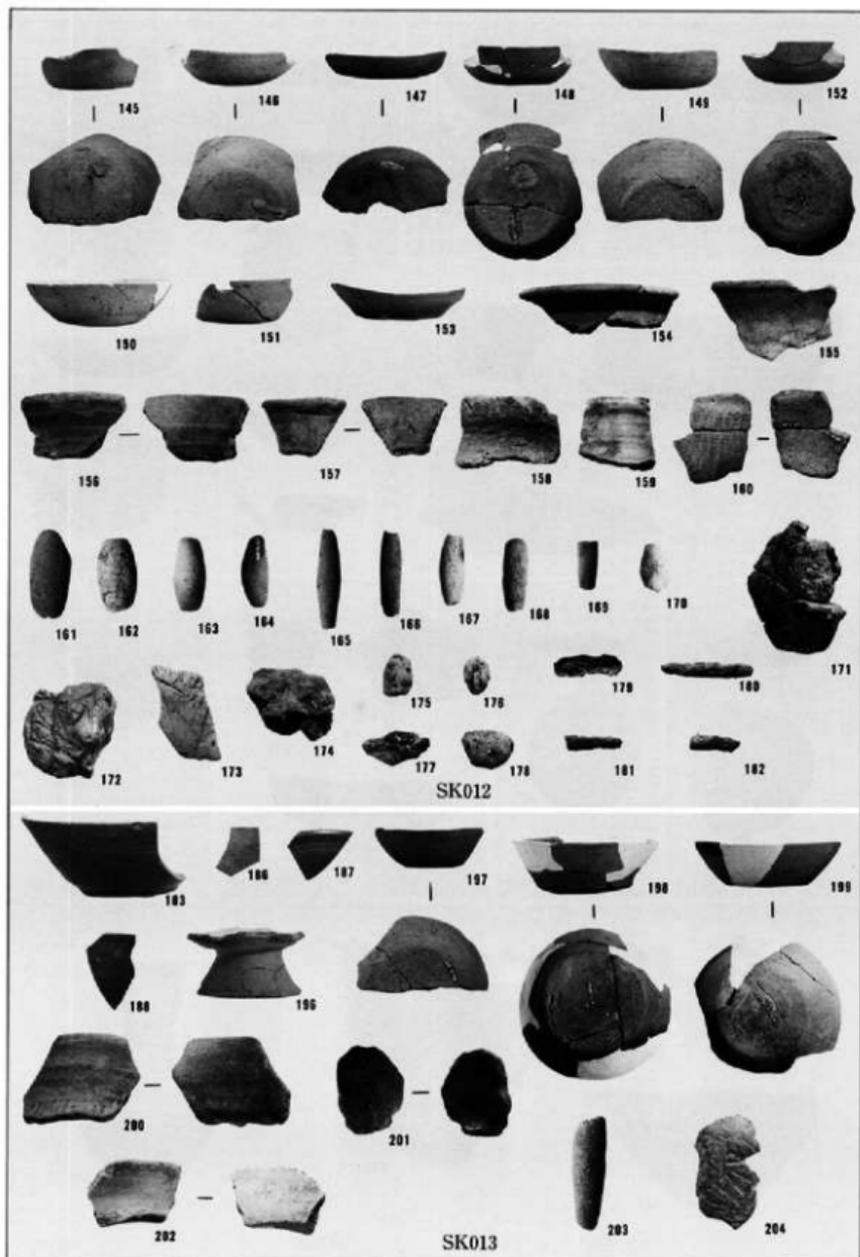




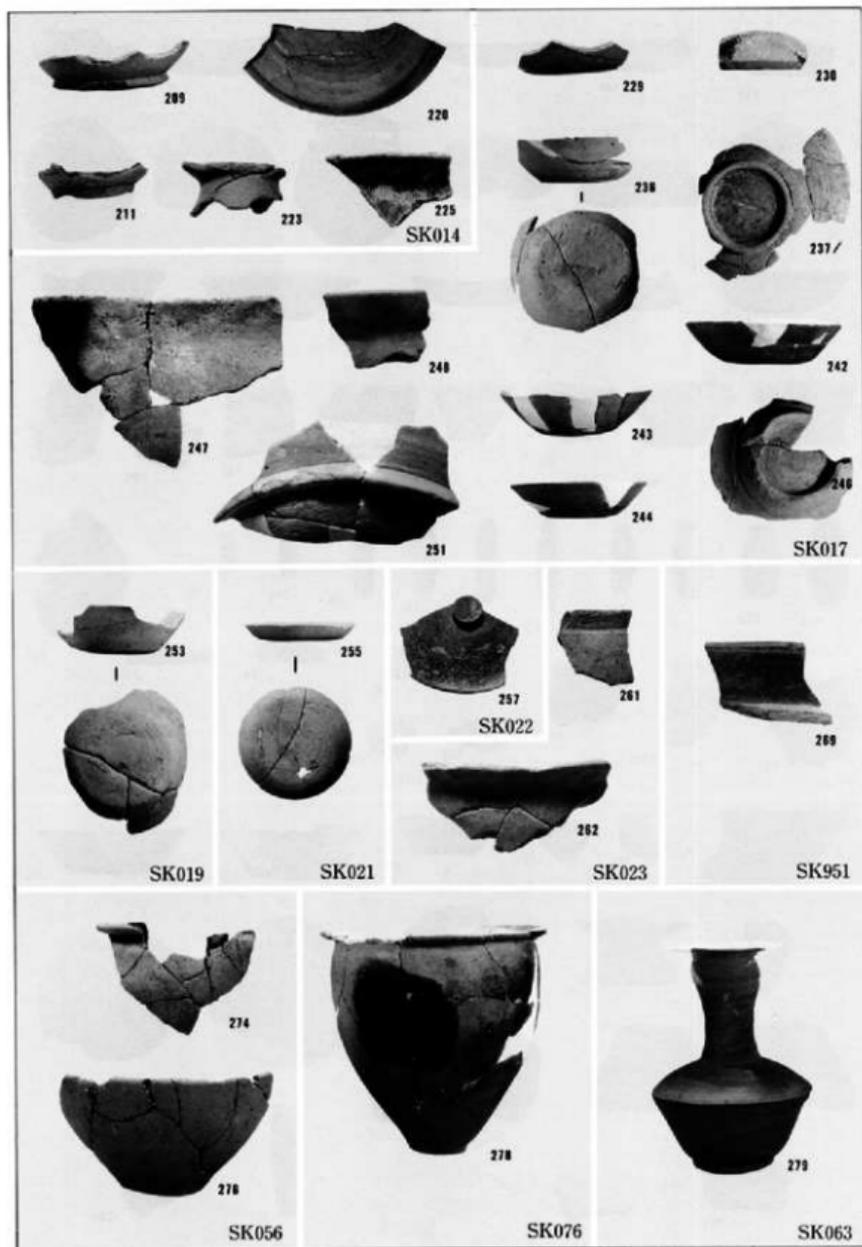
出土遺物1 SC054, SX029, 064, 010, 024, SB030, 031, 068, 大型ビット



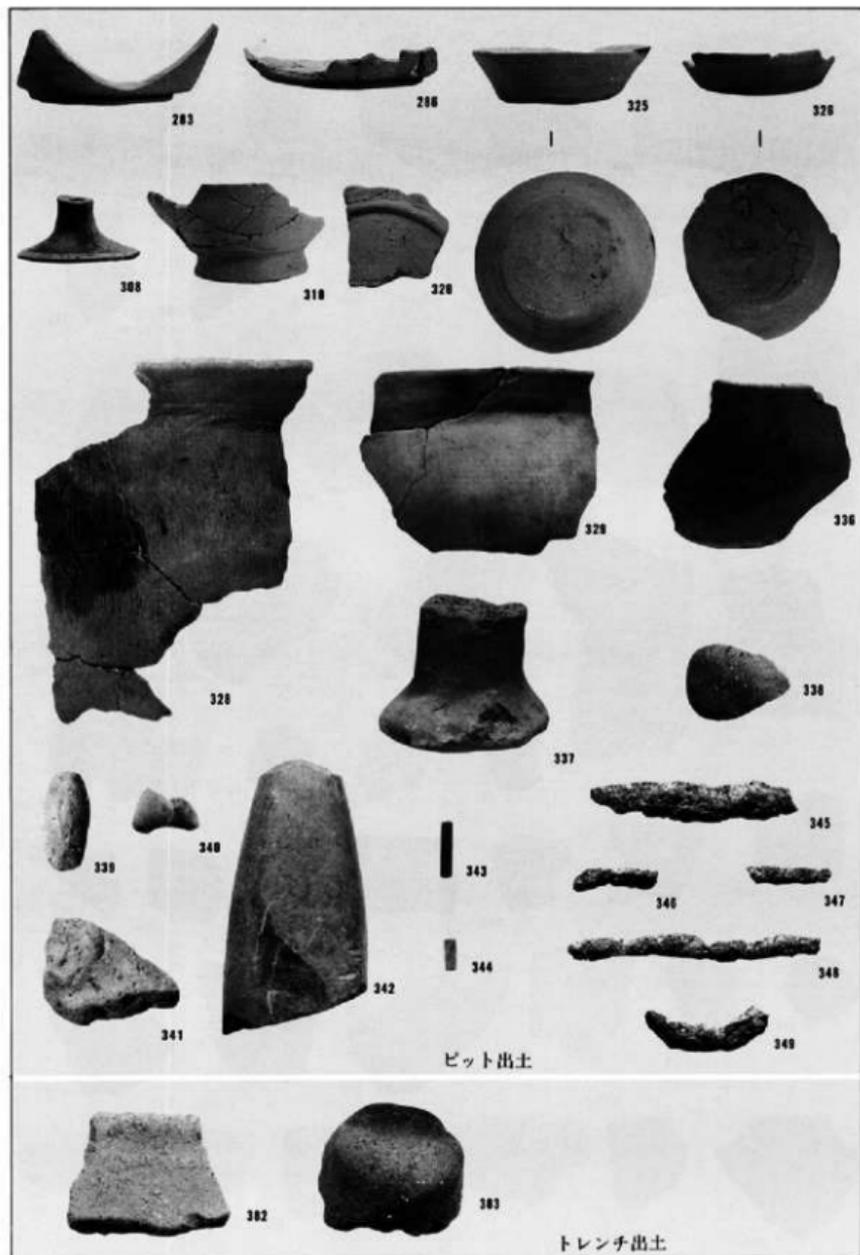
出土遺物2 SK002、003、009、011、012



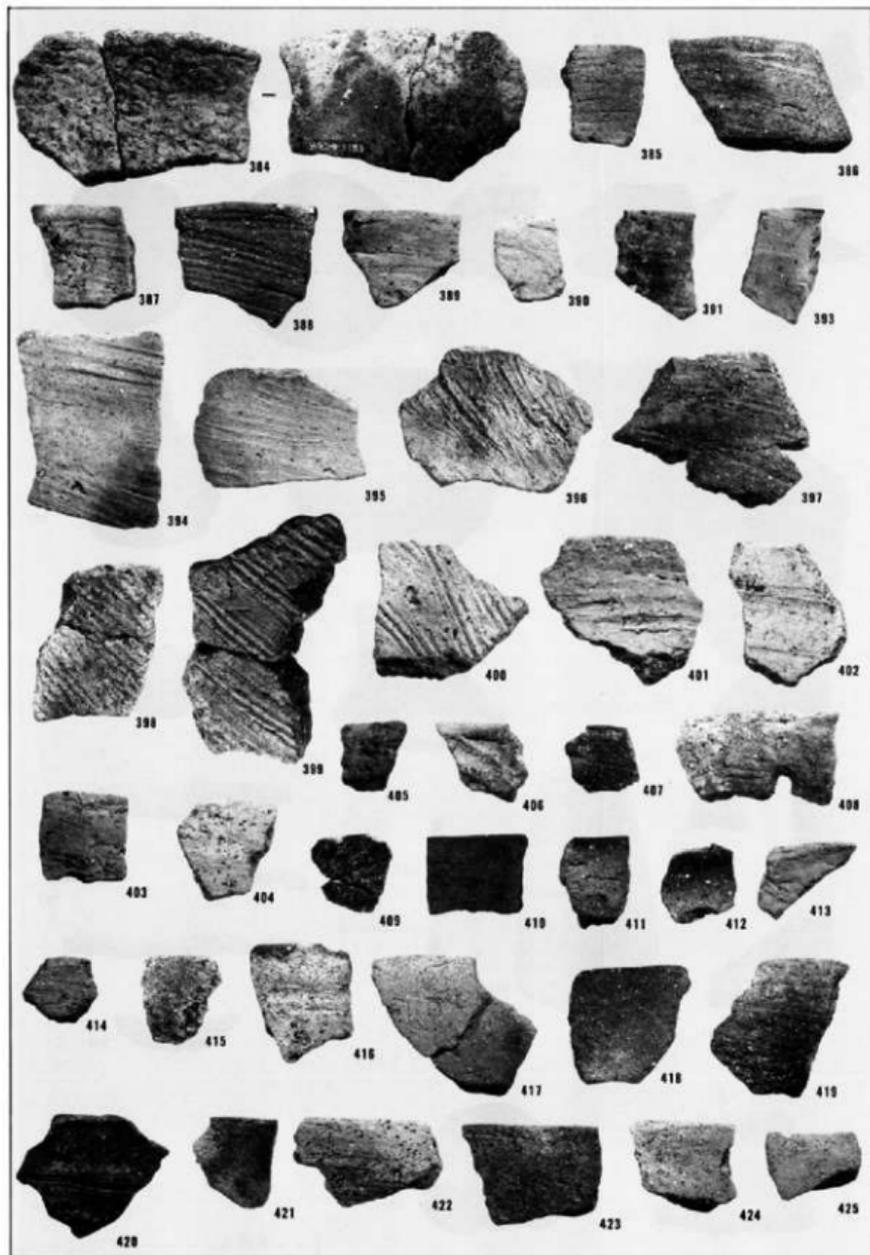
出土遺物3 SK012、013



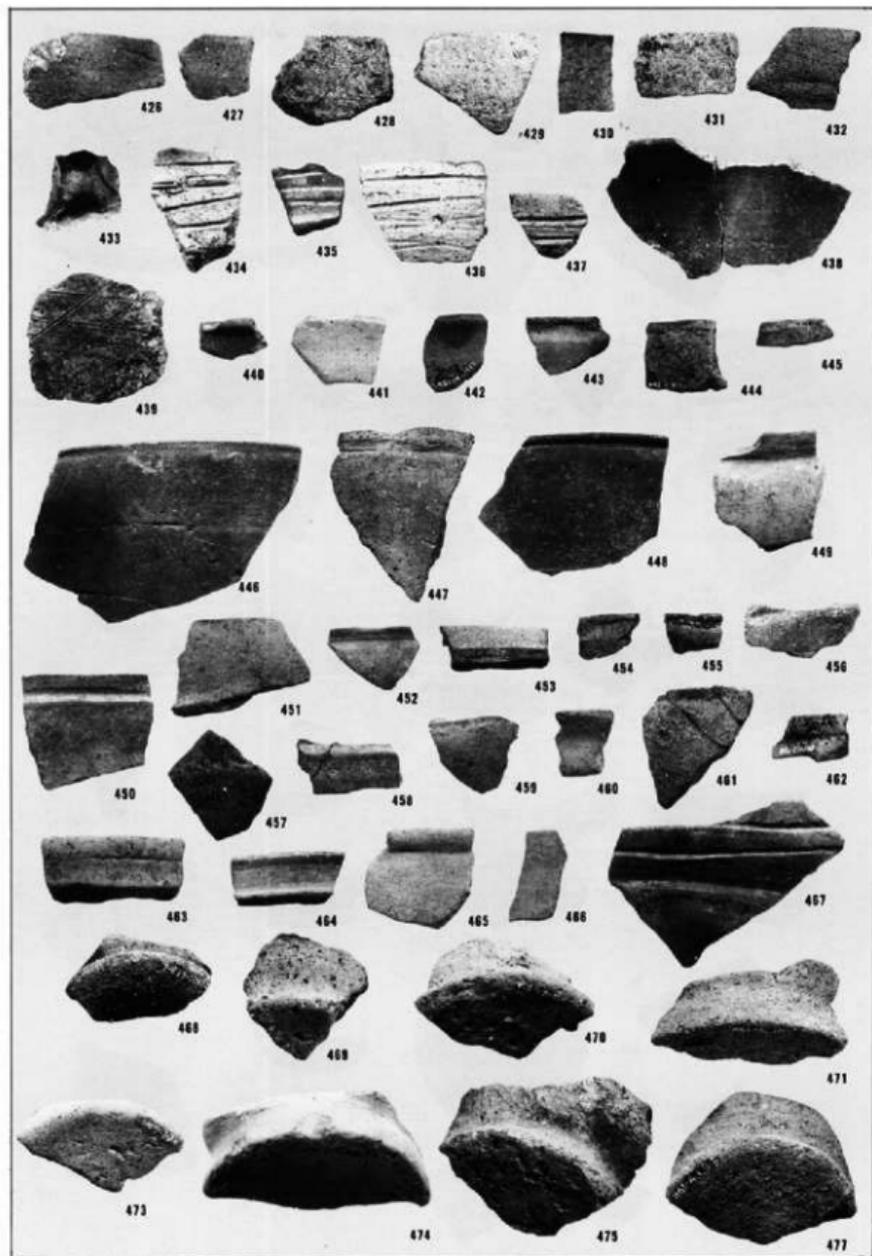
出土遺物4 SK014、017、019、021、022、023、051、056、076、063



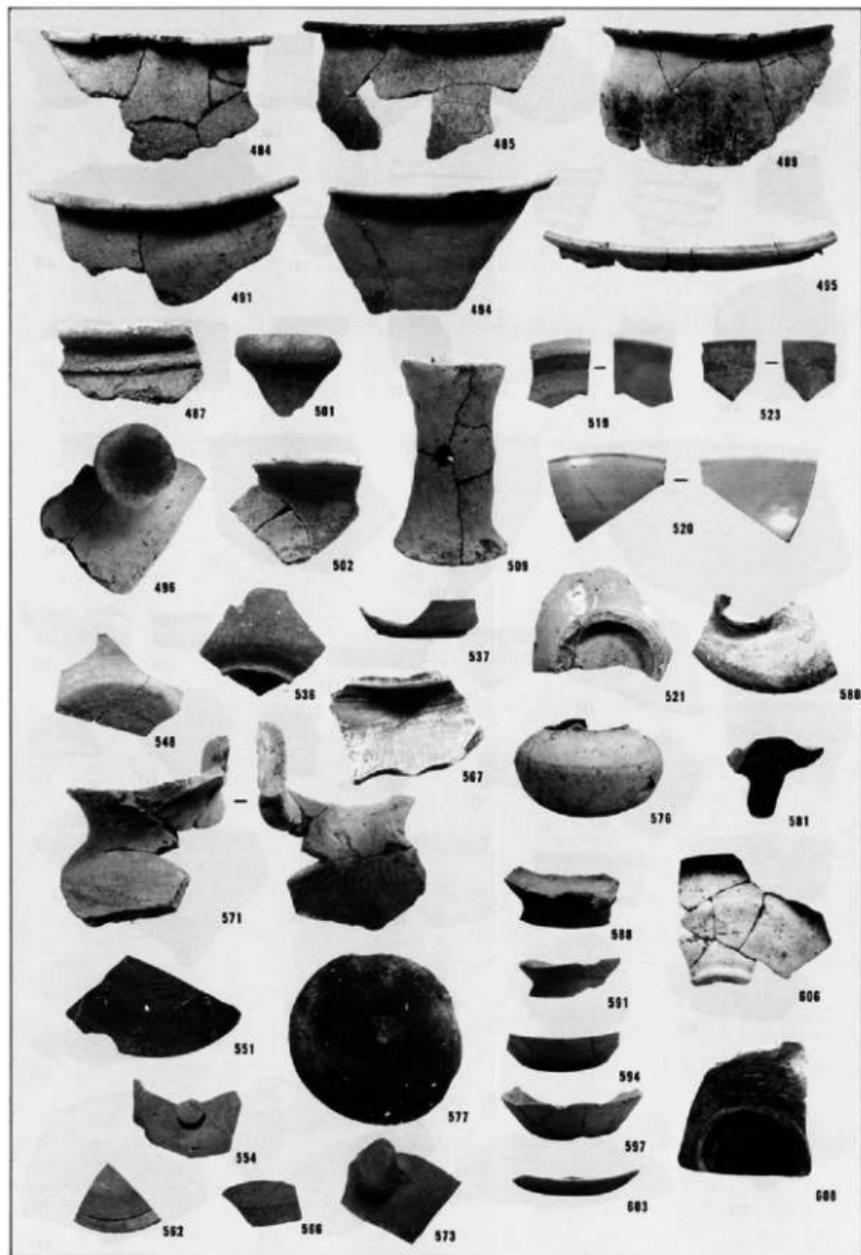
出土遺物5 ピット、トレンチ



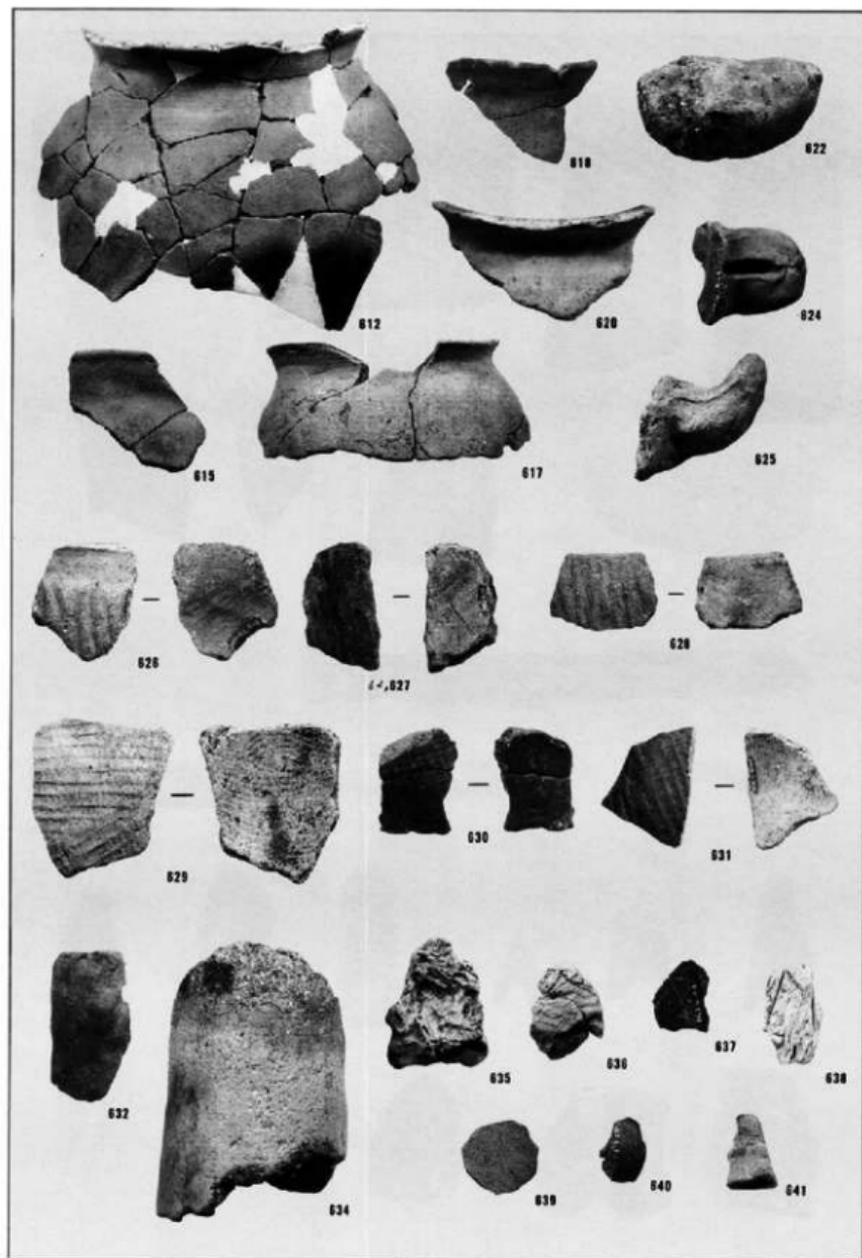
出土遺物6 包含層



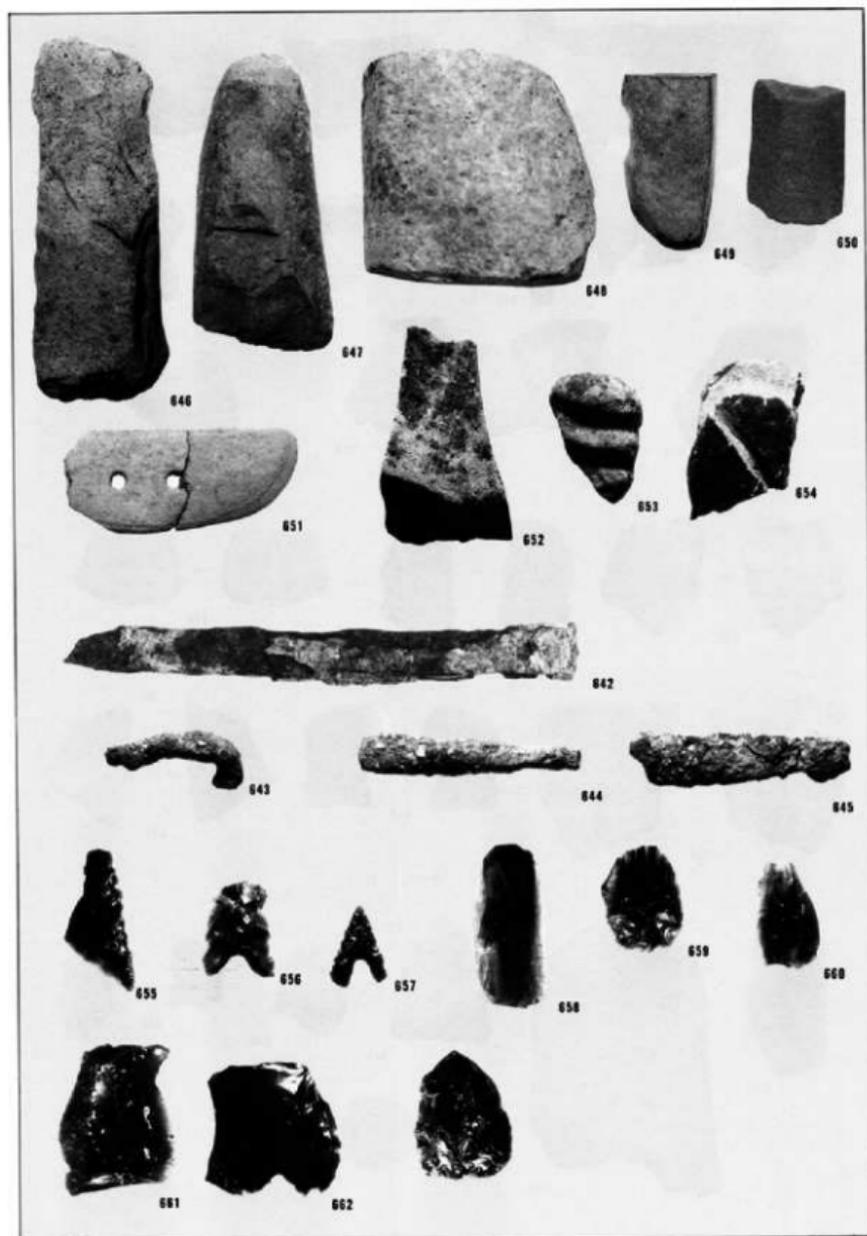
出土遺物7 包含層



出土遺物8 包含層



出土遺物9 包含層



出土遺物10 包含層

福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集

東入部遺跡群1

1994.3.31

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
印刷 大野印刷株式会社
福岡市博多区板田2丁目2-65
